

霧陰伊香保湯煙

三遊亭圓朝

鈴木行三校訂・編纂

青空文庫

儲さて、お話も次第に申し尽し、種切れに相成りましたから、何か
 好よい種を買出したいと存じまして、或お方のお供を幸い磯部いそべへ参
 り、それから伊香保いかほの方へまわり、遊歩かた／＼実地を調べて
 参りました伊香保土産のお話で、霧隠伊香保湯煙きりがくれいかほのゆけぶりと云う標題
 に致してお聴きに入れます。これは實際有りましたお話でござい
 ます。彼の辺あは追々と養蚕さかんが盛に成りましたが、是は日にっぽん本第一
 の鴻益こうえきで、茶と生糸の毎まい年ねんの産額は実おびたゞに夥しい事でございま
 す。外国人も大して之を買入れまする事で、現に昨年などは、外

国へ二千万円から輸出したと云いますが、追々御勉強でございまして、あの辺は山を開墾してだん／＼に桑畑にいたします。それにまた蚕卵紙を蚕に仕立てます故、丹精はなかく、容易なものでは有りませんが、此の程は大分養蚕が盛で、田舎は賑やかでございませぬ。養蚕を余り致しません処は足利の方でございませぬ。此処はまた機場でございまして、重に織物ばかり致します。高機を並べまして、機織女の五十人も百人も居りまして、並んで機を織つて居ります。機織女は何程位な賃銀を取るものだと聞いて見ると、実に僅かな賃でございませぬ。機織女を抱えますのに二種有ります。一を反織と云い、一を年季と申します。反織の方は織賃銀何円に付いて何反織ると云う約定で、凡て其の織る

人の熟不熟、又勤惰きんだによつて定め置くものでござります。勉強次第で主人の方でも給金を増すと云う、兎に角宅うちへ置いて其の者の腕前を見定めてから給料の約束を致します。又一つの年季と申しますると、一年も三年も或は七年も八年もございりますが、何十円と定めまして、其の内前ぜんきん金を遣やります。皆手金の前借が有りません。それで夏冬の仕着しきせを雇やといぬし主より与える物でございませぬ。これは機織女を雇入れます時に、主人方へ雇やといにんうけじよう人請状を出しますので、若い方が機に光沢つやが有つてよいと云うので、十四五か十七八あたりの処が中々上手に織りますもので、六百三十五もんめ匁、ちつと木綿にきぬ糸が這入りましたして七十寸位だと申します。其の中うちで二崩しなどと云う細かい縞しまは、余程手間が掛ります。一ひとはた機四

反半掛に致しましても、これを織り上げて一円の賃を取りまするのは、中々容易な事ではございません。機織場の後うしろに明りどりの窓が開いて居ります。足利辺あたりでは大概これを東に開けますから、何故かと聞きましたら、夏は東から這入りまするは冷風だと云います。依よつて東へ窓を開け、之をさまと云います。夏季蚊なつかいぶし燻を致します。此の蚊燻の事を、彼地あちらではくすべと申します。雨が降つたり暗かつたりすると、誠に織り辛いと申しますが、何か唄をうたわなければ退屈致します処から、機織唄がございます。大きな声を出して見えもなく皆唄みんなつて居ります様子を見て居りますると中々面白いもので、「機が織りたや織神さまと、何卒日機どうそひばたの織れるよに」と云う唄が有ります。また小倉織おぐらおりと云う織方おりかたの唄

は少し違つて居ります。「可愛い男に新田山にたやまがよ通い小倉峠が淋しか
 ろ」、これは新田山と桐生きりゆうの間に小倉峠と云う処がございます。
 是は桐生の人に聞きましたが、囃はやしがございませぬが、少し字詰りに
 云わなければ云えませぬ、「桐生で名高き入山書いりやまかきあげ上の番頭さ
 んの女房に成つて見たいと丑うしの時参りをして見たけれども未だに
 添われぬ」トン／＼パタ／＼と遣るのですが、まことに妙な唄で。
さて儲、足利の町から三十一町、行道山ぎやうどうざんの方かたへ参ります道に江川えがわ
 村と云う所が有ります。此処こゝに奥木佐十郎おくのぎさじゆうろうと云つて年齢六十
 に成る極く堅人かたじんがございませぬ。旧は戸田様もとの御家来で三十石も
 頂戴したもので、明治の時勢に相成りましたから、何か商売を為し
 なければならんと云うと、機場のこと故、少しは慣れて居ります

から、せがれものすけの茂之助を相手に織娘おりこを抱えて機屋をいたしますと、明治の始めあたりは、追々機が盛つて参り大分繁昌だいぶで親父おとっさんも何どうか早く茂之助に善よい女房を持たせたいと思いうち、織娘の中で心掛けの善いおくと云うが有りまして、親父おやじの鑑識めがねでこれを茂之助つまきちに添つわせると、宜よいことには忽たちまち子供こが産できました。総領さだを布卷吉つまきちと申して今年七歳になり、次は二月生れで女の児こをお定さだと申します。

二

扱さて、奥木茂之助は、只機が織り上るとちやんと之を畳みまして

綴糸とじいとを附ける。彼あれもまた一ひと役やくで、悉すつかり皆出来た処こで此品これを
 持ち、高崎たかさきや前橋まえばしの六齋さいさい市の立ちまする処へ往つて売
 るの
 でございますが、前橋は県庁がたちまして、大分だいぶん繁昌はんしょうでございま
 して、只今は猶なほ盛んで有りますが、料理茶屋の宜よいのも有る。其
 の中で藤本ふじもとと云う鰻屋で料理を致うちす家が有ります。六齋が引
 ますると、茂之助は何日いつも其家そこへ往つて泊りますが、一体贅沢者
 で、田舎の肴は喰えないなどと云う事を平生ふだん申して居ります。処
 が此の藤本は料理が一番宜いと云うので、六齋市の前の晩から、
 翌日あしたの市の時も泊り、漸々だん／＼馴染なじみとなり、友達が来て共に泊
 る
 と云うような事に成りました。すると此の藤本の抱こえで、小瀧こたきと
 云う芸者は、もと東京浅草猿若町さるわかまちに居りまして、大層お客を取

りました芸者で、まだ年は二十一でございりますが、悪智あくちのあるもので、情いろおとし夫ゆえに借金が出来て、仕方なしに前橋へ住替えて来ましたが、当人は何時までも田舎に居るのは厭で、早く東京へ帰りたいたいと思うとお金が欲しくなつて来ます。すると、誰でも遊あそびに来る時などには、宅うちに金瓶が八つに、ダイヤモンドが八十六も有るように大法螺おおほらを吹きます。

茂「今度は何千反持つて来て、何処どこへ何百反置いて、此処へ何百反渡して金を何百円持つて帰る」

と云うように、大業おおぎような事を云うから、小瀧も此の茂之助を金の有る人と思ひますと、容貌こがらも余り悪くはなし、年齢としは三十三で温おとなし和やかな人ゆえ、此の人に縫すがり付けば私の身の上も何うか

成るだろうと云うと、此方こちらは素もとより東京の芸妓げいしやと云うのを当込んで掛りましたのだから、ついした事から深く成り、現うつゝを抜かして寝泊りを致しました事も度々たびくなれども、茂之助の女房おくのは、苟かりそめ且かつにもいやな顔を為しません。幾ら夫につらくされても更に気にも止めず、却かえつて夫の不始末をお父とつさんに取成し、くの「私はもとは此の家うちへ機織に雇われた奉公人を、斯こうやつて若旦那に添わして下さるとは冥加至極のこと、お父さんのお鑑識めがねにかない此の家の女房に成り子供まで出来ましたから、若旦那さまに幾ら辛くされようとも、旧もとの身分を考えれば何も云う処ところはございませぬ、それは男の楽しみゆえ一人や二人情婦おんなの有あるは当あたり

前まえ
「

と諦めて居るを宜い事にして、茂之助は些とも家へ歸つて来ません。終には増長して家の金を持出して遊びに出て、小瀧に入いれあ上げて仕舞いますので、追々借財が出来ましたが、親父は八ヶましいから女房のおくのが内々で亭主の借金の尻を償つぐのつて置きます。此のおくのは、年齢二十七だが感心なもので、亭主の借金をほつゝ内証で返す積りで働きますのだが、夜業よなべを掛けても、一反半織るのは、余程上手なものでなければ出来ませんのを、おくのは一生懸命に夜業を掛けて、毎日二反ずつ織上げませんと、亭主の拵えた借金が払えないと精出して遣やつて居ります。然そういう結構な女房を持つて居ながら、茂之助は心得違いにも、とうとう多分の金を以もつて彼かの小瀧を身請もつといたしました、尤も其の頃の事ゆえ、

身請と云つても旅の芸妓げいしやは廉やすかつたもので、こま／＼した借金を残らず払つても、百二十円も有れば治まりがつくと云うくらいのもので、藤本の方を綺麗に極りを附けて小瀧を連れて来ましたが、宅うちへ入れる事が出来ませんから、足利の栄さかえ町ちよう六十三番地に、ちよつとした空家あきやが有りましたから、これを借受け、飯ま事ごと世帯しよたいのように小瀧と二人で暮して居りましたが、小瀧は何か旨い物が喰たべたいとか、あゝいう物を織おらして来てお呉くんなさいと云う我まゝ氣随であります、茂之助は宅うちへ往いく了簡もなく、差向いで酒を呑み、小瀧の爪つめ弾びきを聞いて楽しんで居うります中に、商売なまを懶なまけて居るから借金に責められるが、持立ての女だから、見え張つた事ばかり為して居ります。

三

しおちよう
塩町と云う処に、相模屋さがみやと云う料理茶屋が有ります。此家これ
は彼地あちらでは一等の家でございます。或日あるひのこと、桑原治平くわばらじへいと云
う他所よそへ反物を卸す渋川しぶかわの商人あきんどと、茂之助は差向いで一猪いちちょ
口飲こやりながら、

治「こゝろ茂之助さん、君イね、何も彼かも心得の有る人なり、それ
に前々は先まず戸田さまの御藩中であつて大小を差した人に向つて、
僕が失敬な事を云うようで済みませんが、何うせ君の氣に入るま
いけれども、君の妻君のような者を持つは、実に此の上ない幸福

だと思ふが、おくのさんの心掛てえものは別だね、其の代り田舎
 育ちだから愚図だと云うは、何うもまア何かその云うことが、私^{わし}
 も田舎者だから田舎の蟲^{ひいき}貞をするてえ訳じやア無いが、言葉が違
 うので貴方^{あなた}の氣に入らんか知りません、言葉は国の手形さ、亭主
 の留守を守るのが細君の第一の勤め、家事を治めるのが^{あたりまえ}当然
 の処だが、如何にもその、おくのさんの家事の守りようが眞実で、
 無駄のないようにして、織娘^{おりこ}の手当から、織上げさせてからに自
 分ですつかり綴糸を附けて、直ぐに六斎へ持出せるように拵えて
 置くのに、貴方^{あなた}は少しも宅^{うち}へ帰らねえのは心得違いで有りましよ
 う、尤も今じやア別に成つておいでなさるから宅^{うち}へ往^ゆく事も有り
 ますまいが、お父^{とつ}さんは義理が有るから、おくのさんに彼^{あれ}は宅へ

寄せ附けないと云う、又おくのさんは、舅の機嫌を取つて、貴方
 の借金の方を附けるてえ事を、僕は此間こなえた聞いて、落涙をしまし
 たが、本当に感心な心掛だと思おもえました、貴方あなたも子は可愛いだろ
 うね」

茂「へ、子の可愛く無いものは有りません」

治「それはね君も惚れて、大金を出してからに身請までした女を、
 よせと云うのは僕が強気ごうぎに失敬な事を云うと君思ふかは知れんが、
 彼あのお瀧を、君に持たして置くのをよさせ度たいね、廃よし給え、君
 の為に成らんから」

茂「誰そも然そう云うが、何うも自分の好いた女と、一ト処ひで取膳とりぜん
 で飯でも喰わなけりやア詰らんからね、何も熱く成つてると云う

訳じやア無いが、僕の方からおくのを好いて持った訳でも無い、親の意を背かずに厭な女だけでも仕方なしに持ったが、自分の好いた女を愛して居るのがマア男の楽しみだからね」

治「それは楽しみさ、何も僕が君の楽しみを止めるてえ訳では無いが、如何にも君の細君の心に成つて見ると、僕は君の楽しみを止めたいね、彼のお瀧なるものは……君の前でお瀧と云つては済みませんが、僕も彼が芸者で居る時分二三度買った事も有るが、おくのさんのように、あゝ遣つて留守を守つて固くして、亭主の借金済しまでして、留守を守つて居るようなら宜しいが、中々彼は守らんぜ、密夫の有る事を君知りませんかえ」

茂「え……誰か〜」

治「誰かと云うて顔色を変えて……迂濶りした事は云えない、確
とはと云う証もなし、何も僕がその密夫と同衾を為ていた処
を見定めた訳では無いけれども、何うも怪しいと云うのは、疾う
から馴染の情夫に相違ないようだ、君の前で云うのは何んだが、
本當に彼が君を思つて貞女を立て通す気かも知れないが、君の処
へ松五郎と云うものが遊びに来ましよう」
茂「なに彼は東京の駿河台あたりの士族で、まだ若え男だが、
お瀧が東京の猿若町で芸者を為て居た時分に鼻肩に成つた人で、
今零落れて此地へ来て居ると云うので、福井町に居ると云つて
時々遊びに来るから僕も酒を飲合つて居るのさ」

四

治「君は氣い附かずに居るんだかね、君の留守へ彼の松五郎が来て、お瀧と差向いで飲んで、僕の這入ろうと為たのを、氣い附かないようだったから、すーツと外して出たが、其の後兩度ほど松五郎と差向いで酒を飲んで居た処を見たが、何も差向いで酒を飲んで居たから密通をして居ると云う訳でも無いが、実は色を売って居た芸者の事だから、何んとも云えないのさ、それに君も細君に苦勞を掛けて、子まで有る身の上で、負債も嵩んで居られる事だから、日頃御懇意に致すに依つて申すのだが、入らざる事を云うと君に愛想を尽されて立腹を受け、再び取引せんと云われ、

ば止むを得んが、全く君のお為を心得るから云いますので」

茂「有難う……然う云えば彼の松五郎は度々来ます」

治「度々来ましよう」

茂「私彼奴たゞア置きませんへエ……」

治「それは悪い……顔の色を変えて、たゞア置きませんなんて、

刃物三昧をするのは時節が違いますよ、成程あんたは素と戸田さ

まの御藩中だが、今は機屋だから機屋らしい事を為なければなり

ませんよ、御近所に原與左衛門も居りますから、誰か解るものを

頼んで、体能く彼を東京へ帰すとか、又は他へ縁付けるとかして、

話合いで別れなえといけませんぜ、先方で君に惚れて何処まで居

る了簡か、又は出てえ了簡なのかそれは分りませんが、君も然う

思つては最う添つちやア居られますまい、岡目八目だが」

茂「いえ何うも御眞実辱けない、成程浮氣稼業の芸妓だからち

つとは為ましようけれども、私が大金を出して、多分の金も有る

身の上では無いが、彼の借財を返して遣り、請出した恩誼も有る

からよもやと思います、彼の時など手を合せて、私は生涯此地に

芸妓を為て居る事かと思いましたが、貴方のお蔭で足を洗つて素

人に成れました、斯んな嬉しい事は無い、時節が違うからべん／

＼と何時までも芸妓をして居る心は有りませんと云つて拝んだ

事も有りますから、此の恩誼は忘れまいかと思ひますが、何う為

たら宜かろう……二人の悪事を見定め、何うかして松五郎と密通

して居る処へ踏み込んで遣りたいね」

治「じゃア斯う為たら何うだろう、君は時々松五郎を家へ呼んで酒を飲み合うだろう、じゃア何うだえ、今夜は淋しくつて夫婦差向いで酒を飲んでも面白くないが、東京の人の云う事は面白いから松さんと呼んで来なと云つて、遅くまで飲んで、夜短かの時分だから泊つてお出な、是から歸るつたつて一人身の事だから、女郎買でも始めると宜くないと云つて無理に止めてサ、貴方が端の方へ寝て、中央へお瀧を寝かして、向うの端へ松五郎を寝かして、貴方が寝た振をして、軒を搔いて居る、其の中にお瀧が中央に居るから、若し情実が有ればソレ夜中に向うの床の中へ這入るとか、男の方からお瀧の方へ足でも突込めば、貴方が跳起きて兩人をおさえ付け、実は斯ういう訳の有る事を知つて居るから汝を呼

んだのだと云つて、長熨斗ながのしを付けて呉れて遣る、己おれも男だ、素もとよ
り芸妓げいしやの浮気は知つて居るから汝に呉れて遣ると云えば、錢入
らずに事が済むから、然うしてあんなものは早く追出して仕舞つ
て、何うかおくのさんを可愛がつて上げなんし、宜くねえよ」

茂「誠に有難う」

治「然しかし僕が云つたと云つてはなりません」

茂「いや御親切誠に有難う」

と真実な治平の言葉に感じて宅へ帰りました。

五

其の翌日は丁度所の休み日で、

茂「今日は松五郎を呼んで一盃ばい飲みたい」

と手紙を以て松五郎を呼びに遣ると、早速まいりました。

茂「何ぞ旨い肴は無いか」

と云うので是から三人で酒を飲み合つて居る中うちに、茂之助が氣を付けて見ると、何うも二人の様子が訝おかしい、氣が付かずに居おれば然そうでもないが、疑心を起して見ると、すること成すこと訝しく見えます。ちよいと見る眼遣めづかいの時に、眼の球が同じ横に往ゆきながらも、松五郎の方かたを見る時は上の方ほうへ往くが、僕の方を見る時は、下さがりめ眼で、何んだか輕蔑して見るような眼つきだ、鱒どじょうの骨拔を皿へとりわけけるにも、僕の方には玉子の掛らない処を探して、

松五郎の方へばかり沢山玉子の掛った処が往くと、一々気になつて来ます。斯う遣つて僕にばかり盃を差すのは、僕に酒を勧め酔わして置いて寝かしてから彼奴あいつの方へ往く了簡だろう、と思ひましたから、成なるたけ酒を飲まぬようにして、お膳の隅へあけて、お瀧に盃を差し、女を酔わして墮落させようと思ひ、頻しきりに酒を勧めめる。其の心の中の戦うちたゝかいは実に修羅道地獄の境きようがい界がいで、三人で酒を飲んで居りましたが、松五郎は調子の好いい男で、

松「何うも大きに酩酊めいていしました、もうお暇をしましう、お暇をしましう」

茂「まア宜いいじやア無いか、今夜は泊いつて往いき給え、是から福井町へ帰れば、貸座敷と云つても余あんまり好いいのは無いが色を売る処、

こと
殊に君は独身者だから遊女にでも引ツかゝると詰らんよ、一つ蚊帳の中へ這入って三人混雑にお泊りよ」

瀧「お泊んなさいよ、お前さんは独身だから余程遊ぶてえ事を聞いたが、詰らないお錢を費つて損が立つ計りではなく、第一身体でも悪くするといけないし、それに余程もう遅いよ、慥か一時でしよう」

茂「だからさ、泊つて往きたまえ」

と無理に引止め、片端へ茂之助が寝て、中央へお瀧、向うの端へ松五郎が寝まして、互に枕を附けると、茂之助は胸に一物有りますからわざとグウー／＼と鼾を掻いて居りますが、少しも寝ない。何うして居やアがるか見て遣りたいと、眼を瞑つて居

ながらも時々細目に開いて、態わざとムニヤくと云いながら、足を
 バタアリと遣るついで次手にグルリと寝転ねがえりを打ち、仰向あおむけに成つて、
 横目でジイとお瀧の方へ見当を附けると、お瀧はスヤリくと寝
 て居る様子、松五郎もグウーくと鼾を搔いて居ますから、いま
 にお瀧が彼方あつちへ往いくに相違ないと思つて居る中うちに、次第ついでに夜
 が更けて来る、渡良瀬川わたらせがわの水音高く聞えるように成ると、我慢し
 て起きて居たいが飲める口へ少し過したので、ツイとろくと茂
 之助が寝まして、不図眼ふとを覚して見ると、お瀧が竈へつの下を焚たき附
 けて居て、もう夜が白んで、松五郎は居りませんから、ア、失策しま
 ったと思ひ、

茂「お瀧く」

瀧「あい」

茂「松さんは何うしたえ」

瀧「あの誠になにだがお暇いとまご乞いをしなければ成りませんけれど

も、少し用が有ると云つて早アく帰りました、又四五日内に来ると云いましたよ」

茂「はアー然うか、少し頼みたい事が有つたのに……ア、ア眠い、何故此の頃は斯んなに眠いんだろう」

と瞞ごまかして居りましたが、何んでも己がトロリと寝た間まに逢引をしたに違いねえ、と疑心が晴れませんか、又一日隔おいて松五郎を呼び、酒を飲まして例いっもの通り蚊帳を釣つて三人の床を展のべ、茂之助は仰あおむけ臥ふになつて横目で二人の様子を見ながら、空そらいびき 軒き

を搔く中に、余の二人もグウー／＼と寝て居ます。時々細目に開いては見ますけれども、二人とも側へ寄る様子も有りません。お瀧は茂之助の方を向いて寝て居ります。

六

茂之助は、二人の様子に目を付けて居るが、何うしても知れない。何んでも是は明方人の起る時分に何うかするに違い無い、今夜こそは、と心を締めて居る中に、漸々眠くなつて来たから、腿を摘ツたり鼻を捻つたりして忍耐しても次第に眠くなる、酒を飲んで居るからいけません。明方になると、トロ／＼と寝ました。

……ア、失策しまつたと眼を開あいて見ると、お瀧は竈へツつの下を焚付けて居ますが松五郎は居りません。

茂「お瀧く」

たき「あい」

茂「松公は何うした」

たき「早く帰りました」

茂「少し用が有るんだツけ……ア、ーまた明日あした呼ぼう」

と云つて同じく遣つて見たがいけません。口惜くやしいくと思つて不図考え付いてお瀧を呼び、

茂「お瀧、己は東京へ金策に往つて事に寄ると横浜へ廻つて来る」
と宅うちを出しまして、直近じき村の太田の知己しるべの家に居て、日の暮れる

を待つて、ソツと土手伝いに我家へ忍んで来ました。畠には桐を
 作り、大樹が何十本となく植込んで有り、下は一杯の畠に成つて
 居ります。裏手の灰小屋へ身を潜め、耳を引立て宅の様子を聞いて
 居りますると、お瀧が爪弾つめびきで何か弾いて居ります。此の爪弾
 が合図に相違ないと思つて居る中に、夜は次第に更けわたり、し
 んと致すと、何処どこの寺の鐘か幽かすかにボーンと聞え、もう十二時少
 し廻つたかと思う時刻に、這入つて来たのは村上松五郎と云うお
 瀧いろおとこの情夫で、其の時分は未だ鬻かすが有りました。細かい縞の足
 利織では有りますが、一寸ちよつと氣の利いた糸入の単物ひとえものに、紺献
 上の帯を締め、表おもてつき附つのノメリの駒下駄はを穿き、手拭を一寸頭
 の上へ載せ、垣根くねの処から這入つて往いく後うしろすがた姿を見て、

茂「むう松五郎か、来たな汝うぬ」

と息を屏こらして中へ這入る様子を見て居りますると、ガラ／＼
と上総戸かずさどを開けると、土間口へお瀧が出迎い、

たき「お這入りなさいよ」

と坐敷へ上げました。お瀧は情夫に逢うのだから嬉しい、夜よに入れば少し寒うございますなれども五月上旬はじめと云うので、南部の藍あゐの子持縞こもちしまの袷あわせを素すで着て、頭は達磨返だるまがえしと云う結び髪かみに、*
平らとの金簪きんかんを差し、斑紋ぼらんふの斑ふの切れた鬢びんぐし櫛しを横の方へ差し、
年齢としは廿一でクツキリと灰汁あくぬけ抜しの為よた美しい女で、
たき「何うしたえ、私の手紙が往いきちが違ちがいにもなりやアしないか
と思つて何んなにか心配したよ」

松「宜い塩梅あんばいに僕の手に入つたが、家主やだま了東京へ往つたじやアねえか」

たき「宜いよ。私は本当に案じたよ、お前の来ようが遅いから待ちぼけは詰らないと思つてたが能く来たね、何ね少しお金の出来る事が有つて東京へ往つたんだが、一体才覚はたらきの無い人だから出来る氣遣きづかいは無いよ、誰がおいそれと金を貸す奴があるものかね、屹度きつと出来やア為しないが、二百両借りて来ると云つたから十日や十五日は帰るまいと思うよ、□□□□、□□□□□□□□□□」

松「だつて体裁きまりが悪くて成らねえんだ、親指ここれが感附きやア為しねえか知ら」

たき「大丈夫だよ、彼あんなでれすけだから氣の附く氣遣は有りや

ア為ませんよ」

と云うひそく話を窓の下で聞いて居りました茂之助は腹を立て、

茂「己の事をでれすけ呼わりをしてえやアがる、罰当り奴、前橋の藤本で手を合せて、私を請出して素人にしておくんなさる此の御恩は忘れないと云やアがった事を忘れたか」

とグーツと癩が高ぶつて来ると、額に青筋を現わし、唇を慄わし、踏込もうかと思つたが、いやく二人枕を並べて居る処へ踏込まなければ遣り損うと思ひましたから、尚おそつと窓の下に茫然立って居ると、藪蚊と毒虫に螫れるので癢くて堪りませんから、搔きながら様子を立聞をして居ました。

* そろばんがたの、すかしのあるかんざし、この頃流行せしもの。

七

たき「何んにも無いが、魚屋に頼んで置いたら些ちつとばかり赤貝を持って来たからお食あがりな」

松「何んだか何うも心配だなア」

たき「大丈夫だよ、お前が前橋へ来た時には私は貧乏して居たが、縁と云うものは妙だね、私が芝居町で芸げいしや妓ぢをして居た時分に、まだ私が十五六で雛したじっこ妓ぢで居た時分からお前さんに岡惚おかぼをして

居て、皆に黜みなななぶられて居る中に、一度が二度逢引をすると、其の時は幾ら私が惚れたツてお前さんは未だ殿様株で、立派な氣の詰るような人でありましたが、思う念も遂げられたけれども、それがため借金が出来て、此様な田舎へ出稼でかせぎするようになつて、前橋に居た時にもお前さんに逢いたいばかりで、厭だけれども茂之助を金持だと思つて来て見れば、矢張り金は有りやアしな
いんだアな、彼の時は有る振りをしていたから、此の人に取つかつ
まつて居たら、またお前さんに逢える時節も有ろうかと来て見ると、立派な女房も有るんだよ、是まで余り道楽をしたとか云うので、実家へも帰られないので此様な汚ない空家を借りて世帯しよたいを持たして、爺むさいたツてお前さん茅葺かやぶき屋根から虫が落ちるだ

ろうじやアないか、本当に私を退ひかしたって亭主振って、小憎らしいのだよ、此間こないだの晩も種々いろく話したいことが有るんだけれども出来ないと云うのはね、茂之助が、寝て居て鼾は掻くが時々動いたリバタ／＼したりして気味が悪いから、じつと我慢をして居たが、本当に松さん居い難にくいと思っておくれ、お前に逢あつて斯う云う訳に成つたら、茂之助が厭あに成つて何か彼奴あいつに云われると、本当に身の毛立つほど厭あなんだよ、併しかし大金を出して、私の身を請出してくれた恩が有るから、黙って居るけれども、実は厭あなんだよ、私は半年でもお前さんと夫婦に成らなけりやア置かないよ、若もし夫婦に成れなければ寧いっそ死んで仕舞う積りだよ」

と話して居るを聞き、茂之助は一層怒りを増し、

茂「畜生めく／＼芝居町にもと居た時分からくつついて居やアがつ

たんだ、己と口をきくのも厭だてえやアがる、うーむ彼奴に逢い

てえばツかりに己をお客にして騙しやアがつて、畜生めむうー」

と余り腹が立つと鼻がフー／＼鳴るから、自分で鼻を押え、猶なお

も身を寄せて立聞くとも知らず、

たき「ちよいとこれを喰べて御覧よ、

お前に逢うと、

何んだか私は我儘になつて変になつちまうんだよ、と云つて此家こゝ

を出る訳にも往かず、
 何うかして茂之助が死ねば宜いと思つて居

るのに、中々悪達者で死なゝいのだよ、
 此間もお腹が甚く痛む

と云うから、宜い塩梅だ、コレラに成るのかと思つたと云うは、

悪いお刺身の少しベトつくのを喰べたから、ちようずば便所へ二度も往いきやア大丈夫だと思つてると一日経つとサバ／＼熱が取れて薩張さつぱり癒なつて仕舞つたから、私はがっかりして仕舞つたのさ」

茂「畜生、亭主の病気が癒つてがっかりする奴が有るものか」

ともう耐こらえ兼ねて、短い脇差へ手を掛けて抜き掛けて土間口から這入つて来るとも知らず、奥では一盃飲みながら松五郎の膝へもたれ掛り、

たき「□□□□□□□□□□□□□□□□」

と、一盃の酒を飲み合い、もたついて居るのを見たから堪りません。平素温和ふだんおとなしい善よい人の怒おこつたのは甚ひどいもので、物をも云わずがらりと戸を開けて中へ飛込み、片手に拔身ぬきみを提さげて這入ると、

未だ寝は致しません、お膳の前でピツタリ寄添って酒を飲んで居る処へ飛込んだから、少し間合が早かつたけれども、我慢が出来ませんから松五郎を目懸けて斬り込むと云う、此の事が騒動の始まりでございます。

八

東京でも他県でも色恋の道では随分自分の身を果します、間男をされて腹を立てぬものは、一人もございません、男同士でも交情が善くつて手を曳合つて歩いて、他の人とこそく耳こすりでもされますと男同士でも嫉妬を起して、彼は茂山氏の傍へ

ばかり往つて居る、一体彼奴は心掛けが宜くない、輕薄を以て彼の方へ取附こうと云う考えだろう、などと詰らない事を云つて怒ります。同じようなお膳が生まれて鯛の浜焼が名々皿に附いて出ましても、隣席の人の鯛は少し大きいと腹を立て、此家の亭主は甚だ不注意極まる、鯛などは同じように揃つたのを出せば宜いんだ、と云つても然う揃つたのは有りません。また隣で蔵でも立派に建てますと、何うだえ此の頃は忌にぎすついて来たが、成上りてえものは宜けねえ者だ、旦那然とした面を為やアがって、朝湯で逢つても厭に肩で風を切つて、彼奴が蔵を建つたので丁度南から風の這入る処を、蔵の為に坐敷が暗くなつていけません、何彼だつて好い蔵じゃア有りません、毀しか何か買つて来たんでし

よう、火事でも有りやア直じきに火が這入ります、など、自分で建てる事が出来んとグツと込上げて参りますが、誰も此の嫉妬しつとしん心は離れる事は出来ませんものと見えます。況ましてや大金を出しまして連れて来たお瀧が、松五郎の膝へしなだれ寄つて亭主の事を悪あっこ口うを云うのだから腹の立つのも道理、茂之助は無茶苦茶に斬込んで来ましたから二人は驚き、お瀧は慌て、逃げ出いだす。松五郎は旧もとは士族だけに腕に覚えの有る奴、素もとより剛胆の奴ゆえ左さのみに驚きませんで、一歩退さがつて後あとに有りました烟草盆を取つてポカリと投げ附けると、茂之助の肩をかすつてパチリと柱へ当たると、灰は八方へ散乱致す、其の中うちにお瀧は一生懸命だから四巾布団よのぶとんを取つて後うしろから茂之助を抱き締めましたが、女の事で身丈せいが低いいから

羽がい締めと云う訳には参りません、脇の下をお瀧に押えられたが、茂之助は無茶苦茶に刀を振り舞しながら、

茂「間男見附けた、さア二人重ねて置いて四つにしようと八つに為しようと己の了簡次第だ、間男見付けた」

と死物狂いの声で唵どな鳴り立て、ピン／＼と鼻へ抜けて出る調子で、精たましい神はもう頭のぼへ上つて居ます。松五郎は何か無いかと四あ辺たりをキョロ／＼探すと、巻手まきてと申しまする何か機織道具で、長二尺ばかり厚み一寸も有ります巻手と云うものを取つて打つて掛る。とき「誰か来ておくんないよ、家うちの良人ひとが大変でございますよ、
人ひと殺ころイ」

と云つても田舎の事ゆえ誰有つて来るものは有りません。する

と一軒隔おいて隣に川村三八郎かわむらと云う者が居ますが、妙な堅とほいよ
うな耄とほけたような変な人でございまして、早く開化の道理を少し
覚え、開化は宜よいもんだと考えを起して居りますが、未だちよん
鬻うが有りまして、一体何うも此の人は聞覚えの分らぬ漢語を交ぜ
て妙な言ことを云います、漢語と昔のお家流の御座り奉るを一つに混
ぜて人を諭したり口を利くのが嗜すきな人でございます。処が今茂
之助の家で女の声で、キイーキイー人殺しうちいと云うを聞き付け、
捨置き難いと存じましたから飛び込んで見ると、茂之助が抜ぬき刀を
振廻して居ます。松五郎を目懸けて打って掛るを抱き留め、

三「先ず待ち給え」

と云いながら茂之助の手を押え、

三「聊いさぐか待ち給え、急せいては事を為し損そんずるから、宜たましく精神しんを臍さい下か丹田たんに納いめて以もて、即すなはち貴方あなたよろしく脳髓のうずいを鎮おさめずんばあるべからず、怒ど然ぜんとして心を静しずめ給え」

茂「へえ有難ありがたう……ございませうが、どうか放はなして下さい」と云いう。

九

茂「三八さん、誠まことにお恥はかしい事ことでございませうが、此こゝのお瀧たきの畜ちく生め奴め、間男まおとこを引摺ひきず込んで貴方あなた私の事ことを悪あつ口こうして居ゐるのを私わたしが聞きくとも知らず、大それた枕まくらを並ならべて寝ねに掛かつたから助けちやア置あ

かれません、私だつて素は御領主さまの家来で、聊か御扶持も戴いた者ゆえ親父に聞えても私が顔が立ちません、名義が廢ります、へエ」

三「いや、御尤もの事だが、能く爰の道理を君肯かんと宜しく無いて、何のような事が有ろうとも僕が斯う遣つて此処へ仲来して、今君だちの困難を發明することは公然たる処を得たりと雖も、お瀧どのが一体逃去つたる義で御座り奉つり候、茂之助さんが大金を出して身請に及び、斯る処の一軒の家まで求め、即ち何不足なく驚愕安然として居られるのを有難く存じ奉る義と心得あるべからんに、密夫を引入れてからに、何うも酒肴をとり引証をするのみならず、安眠たる事は有るまからんと存

てまつりてそろう
 奉 候、其処の道理を推測おしはかつて見ますと、尊公の腹ふくりゆう立
 致さるゝ処は至極何うも是は沈黙千万たるの理合りあいにあらずんば有
 るべからず」

と何んだか云う事は些ちつとも分りません、可笑いのも上のぼせて居り
 ますから気が付かず茂之助は夢中で居ります。

茂「お前さんの云う事は何んだか薩張さつぱり分りませんが、男女なんによと
 も此の儘何うも捨置く事は出来ません、御意見に背くようですが
 親父の前へ対しても打棄うっちゃつちやア置かれませんか、私は彼奴あいつ
 を斬らずにやア置きません、何うぞお手をお引き下さいまし」

松「さア斬れ、二人並べて置いて斬れ……何なにイ当然あたりめえよ、密通す
 れば何どれだけと処分は極つて居るんだ、仮令たとえ間男をしても亭主が

無闇に斬るような世の中じゃア無えや、さア何処へでも勝手に持
出せ、一年の間赤い筒袖つゝぽを着て苦役くえきをする事は素もとより承知の上
だが、何も二人で枕を並べて寝てえた訳じゃアなし、交際酒つきええざけを
一盃飲んで居ただけで、何も証拠の無え事を間男呼よぼわりを為しやア
がツて、何処が間男だえ」

たき「静かにしておくんなさい、三さん八ぱつさんにまで御苦勞を掛け
て済みませんが、申し茂之助さん、何う為たんだよ、お前さん能よう
く気を落着けておくれよ、大金を出して私を身請えしたと云とこう処
を恩に掛けて居なさるけれども、丸で私をおさんどん同様にこき
遣つて居るじゃアないか、請出されて来て見ればお前には立派な
お内儀かみさんも有つて子供まで出来て居るじゃアないか、だから実

家へ這入る事も出来ないで斯んな裏家住居の所へ人を入れて、妾てかけと云つても公おもてむき然むき届けた訳でもなし、碌なものも着せず、いまに時節が来ると本妻つまにすると私を騙だまかして置くじやアないか、間男を為たと云われた義理かえ、何うにもお前さんから然そんな事を云われる訳は有りませんよ、若もしおくのさんが松さんと一緒に寝てゝも居たら、それは斬るとも叩はるとも勝手にするが宜いいけれども、私は斬られちやア詰らないから立派に出しておくんなさいよ」

茂「えゝ―出すも退ひくも有るものか」

と打ちに掛るをやつと押え留め、

三「まあ―それでは即ち人民たるものゝ権利を蔑ないがしろにすると云うものだから、先ず心を静め給え、一体当県は申すに及ばず全国

一般の幸福たるをおしはかつて見れば、そのエー男なんによ女同権たる
 処の道を心得ずんば有るべからず、姑しばらく男女同権はなしと雖も、
 此事これは五十把ば百把の論で、先ず之たきぎを薪みなと見做さんければならんよ、
 貴方の方に薪たきぎが五十把あると松五郎殿の方には薪まきが一把も無ねえか
 ら、君が方に薪まきが有らば己おらの方へ二十把ばか許り分けて貰いてえ、い
 や分ける事はなんねえと云う場合に於てからに、松五郎殿が其の
 薪まきを窃ぬすんで焚たくような次第と云わざるべからざる義だから、恐入
 り奉る訳ではない、なれど白はくじん刃ふを揮かつて政府かみお役人の御集ご会を
 蒙まもむるような事に於ては愍びんぜん然たる処の訳じやア無いか、先ず即
 ち僕も斯う遣こつて爰こゝへ這入こつた事だから、兎に角僕に預け給わん
 ければ相成らんと心得有らずんば有るべからず」

と何んだか訳の分らん事を云いながら無理遣りに押別けて、お瀧、松五郎の二人を自分の宅へ連れて参りました。

十

三八郎は再び茂之助の処へ来て、段々茂之助の胸を聞いて見ると、彼奴には愛想が尽きたから何処までも離縁をする気だが、身請の金を取返さんければならんと云い、おたきの方では手切を遣せといつので掛合が面倒に成り、終にはお瀧の方へ遣るような都合になりましたが、其の金が有りませんから、三八郎が茂之助の親奥木佐十郎の処へ参り、

三「え、御免を蒙ります」

くの「おや、おいでなさいまし……お父さま、栄町の三八さまがおいでなさいましたよ」

佐「まあ、此方へ、これは好うこそ、さア何うぞ此方へ」

三「御免なさいまし……え、追々気候も相当致しまして自然暑氣が増します事で、かるが故に御壮健の処は確と承知致し罷りあれども、存外寸間を得ず自然御無沙汰に相成りました」

佐「拙者方よりも誠に御無沙汰……好うこそ、さアくもつと此方へ……貴方はお若いに能く人の世話をなさると聞いて居りま

すが、誠に感心な事です」

三「いえ何う致しまして、併し貴方は何時も御壮健で」

佐「いえ最ういけません、年を老とつたので何も手伝いが出来ん事に成りました」

三「恐入ります、尊君さまの御令貌ごれいぼうの処は中々御壮健な事で：
 …え、おくのさん、誠に御無沙汰を致しました、此の間はまた何よりの物を戴き誠に有難う…：…つい離れて居りますから存じながら御無沙汰に相成ります…：…え、今こんにち日は少々御内談を願う義が有つて態々わざわざ推参致したる理合と云うは内々ないくの事で、何うも御尊父さまの御腹立ごふくりゆうの処は予て承知致し罷り有るが、実は茂之助殿の儀に就いて奈何いかにとも詮術せんすべ有る可からざる処の次第柄に至りまして、何とも申し様も有りません」

佐「え、彼あれは魔がさして居りますから頓うちと宅へは寄せ附けません、

子は無い昔と諦めて居りますなれども、嫁に至っては如何にも孝心な者でござつて、少しも悪い顔を致さず、誠に私を眞実の親のように大切にしてくれまますから、彼んな白痴者は要りません、最うおくの一人で沢山でござる、孫も追々成人しますから、田地其他所持の財産は皆孫等に譲り与えて奥木の相続を致させますから、貴方決して彼には構わんで下さい、金円の儀は聊かたりとも御用立下さらんが宜しい、お心得のため申上げ置きます」

三「へえ……さて何うも此処に於て謝せずんば有るべからざる事件が発して、如何とも恐入り奉ります儀で」

佐「ムー何んで、何事でござるか」

三「誠に何うも申し悪いが、何時までぐず／＼／＼匿しても居られ

ませんかいちぶしじゆうから一伍一什申上げる儀でござるが、実は彼の婦人の手を切るに三十円と云う訳で、段々先方せんぼうへ掛合つた処が、間男を為た覚えはないから出る処へ出ると云うのだが、出る処へ出れば第一尊君のお名前に障り、当人の耻にも成る訳で悪い、女の方から先方むこうへついて三十円遣せよこしと云う次第で、誠に恐入りますが三十円此の川村三八郎へ下さると思おぼしめし召て、御腹立では御座いますようけれども願いたい」

と云われて見れば捨て、置けず。然そうもして遣つたら茂之助も家へ帰ろうかと思ひまして、右の金子を川村に渡しました。是れでお瀧は茂之助へ面つらあて当ケ間ましく、わざとつい一里と隔たぬ猿やえん田村だむらの取附とりつきに山王さんのうさまの森が有ります、其の鎮守の正面むこうに

空家が有りましたからこれを借り、よしずばり葎簧張の掛茶店かけぢややを出し、
かたわき片わき傍へ草履草鞋を吊して高い、村上松五郎は八木八名田辺へ参
 つては天下御禁制の賭博てなぐさみを致してぶらく暮して居ります。
 茂之助は三八郎の計はからいで、手切金を出しお瀧を離縁しましたが、
 面当しよたいに近所へ世帯しよたいを持ったので口惜くやしくつて、寝ても覚めても忘
 られず、残念に心得て居りました。

十一

丁度盆の事でございます。茂之助は少し用が有つて町へ買物に
 出ますると、足利地方では立派な家うちのお内儀かみさんが風呂敷包しを脊

負よつて買物に往ゆきます。日傘を指さし包を十文字に脊せ負おい、ガラノ
下駄はを穿はいて豪家ものもちのお内儀さんでも買物に出ますくらいだ
から、お瀧も小包を提ひげて買物を致し、自分の家へ這入りに掛る
処を茂之助が見付け、

茂「おい、お瀧く」

たき「あい……びつく悔なりしたよ、何んですえ」

茂「何んですとは何んだ、何んですもねえもんだ」

たき「何を云うんだよ、何うしたんだねえ」

茂「何うもしねえのよ、お前めえに少し云う事が有つて己は来たんだ、
お前と云うものは何うも実まことに不実な女だぜ、己に済むけえ、前橋
に居た時に何卒どうぞして東京へ帰りたい、何時までも此処こゝに芸者をし

て居ても堅くして居ちやア衆人の用いが悪うございます、此の節は厭な官員さんが這入つて来て御冗談を仰しやる事が有るから困ります、私も旧は武もと士さむらいの娘ですから然んな真似も為したくないと言うから、己が可愛相だと思えばこそ無理才覚をして、藤本へ掛合つて、手前てめえの身請をして遣つた時にやア手を合せて拜んだじやアねえか、その恩を忘却して何んだ、松公に逢いたいから請出されて来たとは何んの云い草だ、何うも然ういう了簡とも知らず騙されたのは僕が愚だから仕方ねも無あまつえが、剩あまつさえ三十金手切を取つて、これ見よがしに此の猿田村へ世帯しよたいを持ち、二人仲好く暮して居られた義理かえ」

たき「然んな事を今云つたツて仕方が無いじやアないか、然んな

ら何故彼の時出さないようにおしなさない、一旦得心ずくで離縁に成つて仕舞えば仕方が無いじゃア有りませんか、もう書付まで取交して悉すつかり皆極りが付いて仕舞つて、今の私の亭主は松五郎ですよ、成程それは旧もとお前さんのお世話に成つた事も有りますけれども、今に成つて然んなぐずくした事を云うと、今度はしつぺえ返しに松五郎さんの方から理不尽に喧嘩でも仕掛けるといけないから、後生ですから早く帰つて下さい、お前さんより松さんの方が余程よっぽどやきもちやきで困るんだよ、ちよいと他の男と差向いで話でもして居ると、直ぐ嫉妬やきもちを焦やいて、訝おかしい処置振りをするつて怒るんだよ」

茂「誰だつてそれは怒るのが夫婦の情だ、お互に情が有れば夫婦

の情だが、お前の方では夫婦の情を尽す事が無えんだ、何う考え
 てもお前に出られちやア己の顔が立たねえんだ、聞けば松公は賭
 んでばかり居る……賭んで居る……そうだそうだが、行先の認
 めの無い松公を慕って居ても未始終お前の身の上が覺束無えよ、
 縁有つて一度でも二度でも苦勞をした間柄だから、少しの金で松
 公の手が切れる事なら、何うか金の才覚はするから旧通りに話
 が附くめえものでも無えから、帰る腹なら帰ってくれねえか」
 たき「厭だよ、シト何うしたんだね、私は素よりお前さんに惚れ
 て来たんじやア無いよ、前橋のような知りもしない処へ芸者に往
 つて、逢う人もく馴染めないやぼな人ばかりで、厭でく堪ら
 ない処で松さんに逢ったんだが、彼の人は私が東京に居た時分か

らの馴染だが、お金が無くって気儘に成れないから困って居ると、お前さんが舌の長い事を云ってポン／＼法螺をお吹きだから、宜い金持の旦那様と思ひ違えて、請出されて来て見ると、宅うちではお内儀さんが機を織って働いて居るような人だから、然んな人の傍に何時までくつ附いて居ても仕方が無いから、私も斯う云う訳に成つたんだから、何もお前さんに未練を残して帰りたいなんてえ了簡は無ないよ、然んな未練な事を云うと気障きざが見えて耐たまらないよ」

茂「耐らないとは何んだ…」

たき「私はもう縁が切れて見れば赤の他人だよ、その他人へ失敬な事を云うと肯きかないよ」

茂「失敬も何も有るものか」

と腹立紛れに突然お瀧の髻を取って引倒す。

たき「何をするんだえ、お前」

茂「何もねえもんだ、殺して仕舞うのだ」

と互いに揉み合つて居たが、やがて茂之助はお瀧を組み伏せ、
乗し掛つて拳を振り揚げ、五つ六つ打つて居る処へ村上松五郎が
歸つて参りました。

十二

村上松五郎は此の体を見るより飛掛り、茂之助の髻を取って仰
向けに引倒し、表附の駒下駄で額の辺を蹴ったからダラくと血

が流れるを、

松「やい手前も愛想の尽きた女だから金まで付けて手を切つたんだらう、何をてめえするんでえ、僕の妻に對して失敬な事をするゆると免さんぞ、僕の妻を捕まえて無闇に打擲ちようちやくする事が有るかえ」

茂「僕の妻も無ねえもんだ……やア己の頭を割りやアがつたなア」

と口惜しいから松五郎に喰かぶり附きに掛ると、松五郎は少しく柔や術わらの手を心得て居りますから、茂之助の胸倉を捕とらえて押して往ゆきますと、彼のあ辺には所々ところ／＼に沼のような溜り水が有ります。これは水溜みずためで、早魃かんばつの時の用意でございませう。茂之助は其の水溜の沼のような処へポンと仰向けに突き落され、もんどりを打つて転がり落ち、ガブ／＼やうて居るを見て、二人とも嘲笑あざわらいな

がら歸つて参り、

たき「私を厭という程五つ打ちやアがつたよ」

松「打たれながら勘定をする奴もねえもんだ、今度来やアがると

只ア置かねえ、本当に彼奴は狂人だ、ピッタリ表を締めて置け」

と云う。此方は茂之助が泥ぼつけになつて沼から這上りました

が、松五郎に踏んだり蹴たりされたので、身体も思うように利かず、

茂「あゝー残念だが何うする事も出来ねえか」

と善い人だけに逆せ上り、ずぶ濡れたるまゝ栄町の宅へ歸り、

何うやら斯うやら身体を洗い、着物を着替えたが、袂から鱒が飛

出したり、鬚の間から田螺が落ちたり致しました。

茂「もう只ア置かねえ、彼奴等あいつらを殺して己も其の場で腹を切つて死ぬより他にし為ようは無ない」

と無分別にも善い人だけに左様な心得違ちがいを思い起しましたが、差料の脇差を親父が渡しませんから、何うかして取りたい、是は女房を頼んで取るより外ほかに仕方が無いと、往ゆき難にくいけれども勘忍して、丁度午後三時少し廻まつた時分ときでございましょう、恐々ながら江川村へ這入りました、此処こゝから我家わがやに近いから、寺の門の下に立つて居たら子供でも出て来やアしないかと思つて居ります処へ、布卷吉と云う七歳になる、色の白い、下膨ふくれな可愛らしい子供が学校から帰りでチヨコくと向うから出て来たのを見附け、茂「おい布卷吉」

布「いやアお父さんとつ能く来たねえ、お母さんつかがね案じて居るよ」

茂「あい……誠にお父さんは面目ないから、お前からお母さんに詫言わびことを云つてくれ、お祖父さんおじいは何うした」

布「アノ祖父ちゃんおじいはね、恐ろしく怒ってるよ、お祖父ちゃんはね、アノ彼あんなやくぎな者は無い、駄目だつて、アノ芸妓げいしやや何かに、アノ迷つて、アノ此だいじんな大切なお金を費つかうようなものは愚を極きわめたんだつて、それだから逆とても此の身代は譲れないから、汝てまえの親父は寄せ附けないつて、アノ坊んなが大きくなると此の身代は悉み皆坊んなにやるから、彼奴を親と思うじやア無い、お母つかあばかり親と思つて勉強しろつてね、それから学校へ往いくの」

茂「私わしはお前のお祖父さんにもお母つかあにも面目無い、私はもう縁が

切れて居るから他人のようなものだが、只た一目お前のお母に逢つて詫言わびごとを為したくつて、お父さんは態々わざく忍んで来たんだが、ちよいと内証ないしよでお母を呼び出してくんな」

布「呼び出せつてお母は来やアしないよ、お父さんに内証で逢うと、然そうするとアノ誰も彼も家うちに置かないとお祖父ちゃんちゃんが然う云つてるのだから、お母さんに来いたつて、お父さんには逢えないよ」

茂「それは然うでも有ろうけれども、お祖父さんに内証ないしよでお母に逢い、一言詫がしたいんだ、お父さんは最すつかりう悉皆眼が覚めて、本当に辛抱人に成つたと然う云つて、ちよいとお母さんさんを呼んで来てくれ」

布「だつてお祖父ちゃんに叱られるもの、愚を極めた者に逢うと此方も愚になるから逢うなと然う云つたもの」

十三

茂「お前は俄かに伶俐りこうに成つたの、年が往いかなくつて頑是がんぜが無くつても、己が馬鹿氣て見えるよ、ハア―衆人みんなに笑われるも無理は無ない」

と差俯さしうつむ向むき暫らく涙に沈み居たるが、漸く氣を取直して面おもてを擡あげ、袂から錢入を取出し、

茂「こゝにお錢ぜいが有るからお前に遣る、もう私は要らないから是

だけ悉すつかり皆お前に遣るから、これをお父さんの形見だと思つて、

これでお母さんに何か買つて貰いな」

布「イヤー大變にくれたね、今までは何処へ往つてもお土産みやを買つて来てくれた事は無いが、そのお錢は皆みんなな芸妓げいしやに入り揚げちまつて、女郎買の糠味ぬかみそ噌が何うとか為したつて然そう云つたよ、今度坊にお錢をくれるようではお父さんも辛抱人に成つたんだらう」

茂「お祖父さんに然う云つてはいけないよ、お父さんの来た事が知れると、あの通りやかましいから、お祖父さんに内証ないしよでお母を呼んでくれ、私わしに逢つたと云うではないよ、あのざまの処から、内証ないしよで呼んでくれ」

布「じゃア内証で往つて来るよ」

何心なく頑是なしに走つて参り、織場へ往つて見ますと、おくのは夜は灯火あかりを点つけて夜業よなべを為しようと思ひ、襷たすき掛けに成つて居うしろる後へ参り、

布「お母さんく」

くの「何んだよ、昨日きのうも学校から帰ると日暮方まで遊んでいたが、余あんまり表へ出ねえようにしな、何んだよ」

布「あのね、お父さんが来たよ」

くの「え……何処へ」

布「あのね内証ないしょうでお母さんに逢つて詫言をした、辛抱人に成つたてえが、本當に成つたかも知れないよ、内証でお母さんに逢いたいつて坊こんなに斯様にお錢をくれたよ、お錢をくれるくらいだから

辛抱人に成つたかも知れないから、お前逢つてお遣りな」

くの「逢いたいってお祖父さんがに知れると、でけえ小言が出るが……決して云うじゃアねえよ、黙つて居なよ、然うして少し此の機を氣イ附けて居ろ、蚊遣火くすべが仕掛けて有るから」

と夫婦の情で逢いたいから、直すぐに飛出して往いこうかとは思つたが、一歳ひとつになるお定の顔さだを見せたいと思ひまして、これを抱起して飛んで参り、

くの「おやまア貴方あんたは何うしておいでなせえました」

茂「あい誠に面目次第も有りません」

くの「お父さまが物堅くつて家うちへ寄せ附けないと云つても、おくのが附いて居ながら、事の済んだ暁には何とか詫言をして家へ出

這入りの出来るように為しそうなものだ、それとも私がお父さんに悪く取とり做なしでもして居や為ないかと、貴方あんたが腹でもたてゝいやアしないかと、そればかり心配して居やしたよ」

と云われて、流石さすがの茂之助もおくこのの貞実に感動され、暫く泣き沈しみました。

茂「アノー誠まことに何うも面目次第しどころもない、もう此処こゝが辛抱しんぱうの仕し処ところだから、私わしは一生懸命いっしょうけんめいに稼かせいで親父おやに確しかとした辛抱しんぱうの証しょうを見せてうち家うちへ帰かえる積たくわりだが、もうあの女おんなには懲こり々くしたから真面目まじめになつて夫婦仲善おとこめかけく可愛かわいいゝ子の顔かほを見て暮くそうと云う心こゝろになつたよ、併しかし只辛抱しんぱうするつたつて親父おやが中々得心ちゅうちゅうとくしんしまいから、横浜よこはまへ往いつて、少し商売しょうばいの取引とりひきの事が有あるから往いく積たくわりだ、これまで私は馬

鹿を為して拵えた借財をお前ないが内証しょうで払つてくれた借金の極りも附みけなければならぬから、是非横浜へ往きたいのだが、何うも身なり装なりが悪いと衆人ひとの用いが悪いから、羽織だけは他わきで才覚したが、短かい脇差を一本お父さんに内証で持つて来てくれねえか」

十四

くの「脇差なんぞを差さねえでも宜いじやア有りませんか」
 茂「脇差を差さねえと人の用いが悪いのだから持つて来てくんなくの「お定でかがこんなでかに大く成りやしたよ、ちよつくら抱でえて遣つておくんなせえ」

茂「じゃア己が抱いて居るから持つて来ておくれ」

くの「あんた、大分顔の色が悪いが、詰らねえ心に成つてはいけませんよ、一人のお父さまを見送らねえ中は貴方の身体では無えから、譬え何んなに厳ましいたつて、お父さまが塩梅が悪くなつて、眼を引附ける時に来て死水を取れば、誰が何と云つても貴方の家に極つて居るから、腹の立つ事も有りませうが、子供や私に免じて何うぞ軽躁な事を為ねえようにしてお呉んなせいよ」

茂「はいく……決して軽躁は為ない、是までは殺して仕舞おうかと思つた事も度々有つたが、お瀧の畜生に騙されて、子供の傍へ来る事も出来ねえ身の上になつたが、彼ん畜生余りと云えば悪い奴だけでも、さつぱり縁を切つて仕舞つたから、彼奴は松

五郎と夫婦になつたし、もう何も彼奴に念は無いから其処そこに心配は有りません」

くの「それでも能く思い切つたね、勘弁する時にしねえばなんねえが、それも是も子供や私わしに免じて勘忍したで有りませうが……おや貴方あなたの頭つむりに疵が出来てるのは何う為しやした」

茂「此の間中ひとりもの独身者で居るから、棚から物を卸そうとすると、砂鉢すなぼちが落つておっこ此様こんなに疵が付いたのさ」

くの「あらまア然そうかね、危ねえ、定めて不自由だろうと思つても、近い処とこだが往いく事も出来ないんだ、……然わしんなら私わしが脇差を持つて来るからお定を抱いて居ておくんなさいよ」

茂「泣くといけねえから成なるたけ早く」

くの「はい、直じきに往ゆつて参めえりますよ」

と是こゝから家うちへ歸り、親父おやに知れぬように脇差をこつそり持つて来て茂之助に渡わたしました。

茂「有難ありがたう〜…：…さア、お定は少し泣いたよ」

くの「誠に御方便なもので…：…布卷吉は何うやら一人学校へ参めえりますし、私わしはお定を寝かし付けて、出来ない手で機を織おつて些ちつとずつ借金を埋めて置くように為します、悪わりい跡あとは善よいだアから貴あ方んたも氣を落さずに身体を大切でいじにして下せえまし、何事も子供と年寄としよりに免じて勘忍かんしのうしておくんなさいよ」

茂「あい…：…あいお前まへのような貞実な女房を余所よそにして悪党女あくどうめに騙だまされて迷まよつたのは、己おのれの身に罰ばちが當つたのだが、何うぞ私わしの留とどめ

守中親父を頼みます、宜いかえ、私は是から一旦栄町へ歸つて直すぐに立つ積りだ」

くの「お茶でも上げたいが往来中なかで」

茂「なに、お茶も何も飲みたくはない、留守中おくの身体を大だいじ切にしなよ」

くの「はい、貴方あんたが横浜から歸つて来たらば、ちよつくら栄町の家うちを訪ねますから」

茂「あいよ、子供を頼むよ」

と何も彼かも人情が分つて居ながら、諦めの附かんと云うものは因縁しんげんの然しからしむる処でもございませうが、茂之助は松五郎お瀧の二人を殺し、自分も腹を切つて死ぬ決心故、是がもうおくの、

顔の見納めかと、後あとを振返りく脇差を腰に差して帰って往ゆく後姿を見送つて、

くの「はてな、彼あの顔色は……うっかり脇差を渡したのは悪かつたが、事に寄つたらお瀧さんを殺す心でも有りやアし為しないか、私わしが猿田へ先へ往つて此の由をお瀧に知らせようか」

と心配して居ります。斯かくとも知らず茂之助は猿田村の取付なる彼かの松五郎の掛茶屋へ斬り込むと云う、大間違になりまする処のお話でございます。

え、久しく上方へ参りまして大分御無沙汰を致しました。新聞にも僅か出しまして中絶いたしました霧隠伊香保湯煙のお話で、^{なかば}央からお聴きに入れまする事でございますが、細かい処ところを申上げると、前々よりお読み遊ばしたお方は御退屈になりますから、直すぐに続きを申上げます、足利の江川村で茂之助が女房に別れるとき、横浜へ行くゆからお父さんないししょうに内証で脇差を持つて来てくれと頼みました。これは恨み累かさなるお瀧と松五郎を殺して、自分は腹でも切つて死のうと云う無分別、七歳ななつになります男の子と生れて間もない乳呑児ちのみごを残し、年取つた親父や亭主思いの女房をも棄すてて死のうと云う心になりましたが、これは全く思案ほかの外、色情から起りました事で、此の色情では随分怜悧りこうなお方も斯様になりますことが

間々あります。女房おくのは夫茂之助に別れる時に、何うも様子が変で、氣になつてなりませんから、万ひよつと一として軽かるはずみ躁あせな事をしてはならぬと、貞女なおくのでございますから、一歳ひとつになりま
すおさだと申す赤あかんぼ児こを十文字おぶに負おぶい、鼠ねずみと紺くろの子持こもち縞しまの足利あしき織おり
の単ひとえもの物ものに幅あしの狭せまい帯おびをひっかけに結び、番下駄ばんげだを穿はいて暮方くれがた
から江川村えがわむらを出でまして、猿田さるだの松五郎まつごろうの宅たくへ参まゐりました。見世みよは
片付けて仕舞しまい、縁台えんたいも内うちへ入れて一かた方かたへ腰障子こしざしが建たつて居ゐり
ます、なれども暑い時分ときでございますから、表うらは片々かた／＼を明あけ放はな
し、此処こゝに竹たけすだれを掛かけ、お瀧たきが一人留守ひとり留守をして居ゐりますと、
門口かどぐちから、

おくの「はい、御免ごめんなさいまし」

お瀧 「何方どなたでございますか」

くの 「松五郎さんのお宅は此方こちらさま様でございますか」

瀧 「はい手前てまいでございますが、何方いずれからお出でゞす」

くの 「はい貴方あなたがお瀧さんでござりますか」

瀧 「はい私が瀧でございますが何方どちらからおいでゞすか」

くの 「はいお初にお目にかゝりまして、お噂には毎度承知いたして居りやんしたけれども、是迄はおかしな訳で、染しみ々々 お目に

束者でござんして、何うかお見知り置かれましてお心安う願います」

瀧 「おや然そうですか、私もおかしなわけで、かけ違つてお目にかゝ

りませんでした。能くまア斯んな処へお出で下すつて、まア此方こちらへお上んなさい、何だか暗くつていけませんから、今灯あかりを点けます、這入口は蚊が刺していませんから、まア此方へ」

くの「はい有難うよなべございます、まア是ア詰らん物もんでございませけれども、私が夜業よなべに燃揚よりあげて置いたので、使うには丈夫一式に丹誠した糸でございませ、染めた方は沢山たんとね無えで、白と二色ふたいろ燃つて来ました、誠に少しばいで、ほんのお前めえさん様のお使い料になさるだけの事でござります」

瀧「はいそれはまア何よりの品を有難うよなべございます、さアずつと此方こちらへお出でなさいまし、おや子供衆しゅを負おんぶで、其処は蚊が刺しますから団扇をお遣いなすつて」

くの「はい、団扇は持つて居ります、私わしや貴方あんたに少しお目にかゝつてお願い申したいと存じまして」

と是からおくのが話し出します事は明日みょうにち

十六

くの「家うちへはちよつくら買物に往いくつて嘘を吐ついて参めえりましたが、わしうちのひと私が良人の茂之助もまア御縁があつて、あんたを前橋から呼ばつて栄町に世しよ帯たいを持たせて置いた事は聞いて居ましたけれども、男の働はたらきで当あたりまえ前まへのこと、思おもえましても、年寄てえ者は取越苦勞して、私にあんた義理もあるだから、やかましく云いますし、

やかましく云えば意故地いこじになつて家へも帰んねえようにする彼れあが氣象でござりまして、あんな我儘な氣象、あんたも知つての通り誠しんぺえに心配して、まア縁が切れても男の未練で、ひよつとして貴方あんたのとけえでも来て、詰らねえ事でもハア言い出せば、貴方だつても、まア松五郎さんでも黙つては居なさらねえ、縁の切れた所とけえ来て、たわいもねえ事をいえば合点しねえぞと云えば、売言葉に買言葉、何どんなえらい事になるかも知れねえとまア、女の狭せめえ心で誠に案じることでござります、年寄子供ひかを扣ひかえて軽躁かるはずみな事がなければ宜よいがと思つて居ます処とけの、昨日私きのうが処とけえねえ：：少し家へ来られねえだけでも、逢いてえツて来た様子が誠に案じられますから、それからまア何うかしてと思つて居ましたけ

れども、太田へ参つたことを聞きましたから、また此方へでも来
めえか、ひよつとして軽躁な事がありはすめえかと心配して、
栄町へ参りましたら栄町の世帯は仕舞つて、太田の方へ行つたて
えから、気になつてなんねえで、此方へ参りましたが、若し茂之
助が此処へ参りまして、どんなハア詰らねえことを言いかけても、
あんた取合わずにまア柳に受けて居て下さると、荒えことも為め
えから、打遣らかして居て下さつて、其の時云つた事が貴方の
お気に障れば、其の時はどんなに胆がいれる事があつても、後で
また気の静まるときに意見をすれば聴入れてくれる人でござりま
すから、何うか若し参りましたらば、何卒あんた逆らわずに柳に
受けてお置き下さるようにお願え申してえもので」

瀧「はい、それで御座いますか、困りますねえどうも、まア貴方^{あんた}には初めてお目にかゝりましたが、茂之助さんは前橋の六斎の市のたんびにお出でなすつたが、お前さんという立派なお内儀^{かみさん}や子供のある事は存じません、当人も隠して女房はないから斯うもしてやると仰しやつて下さるから、頼り少い身体で、そんならばと云つて来て見ると、子供衆^{しゅ}もあり、お内儀さんも在^あつて、手前^{てめえ}は家に置かれ^{うち}ないからと栄町へ裏店^{うらだな}同様な所^{ところ}へ世帯^{しよたい}を持たして、何だか雇^ぼい婆^あとも妾^{めかけ}ともつかぬ様な仕合^{しあわせ}で、私も詰らねえから、何しろ身を固めるには夫を持たなければ心細いからと思ひまして、それで浮気をしたてえ訳じやアありませんが、今の松さんが前橋へ来なすつたが、私も東京^{とうけい}に居た時分からねえ馴染のお方で、

恩になつた事もあり、それに少しハイ約束をした事もありました、
 それが縁でちよく／＼遊びに来たのを茂之助さんが嫉妬やきもちをやいて、
 むずかしい事を言つたから話も破ぼれて仕舞つて、まア示はなし談あいで
 離縁になつたのですよ、それから斯うやつて夫婦になつて居ると、
 未練らしく此の間も来て酷ひどい事を言つて、私の髻たぶさを把とつて引摺り
 倒し、散々に殴ぶちましたから、私も口惜くやしいから了簡りょうかんしませんでし
 たが、それは兎も角もまた茂之助さんが来て種いろん々な事をいうのを
 ハイ／＼と柳に受けて居おれば、また増長して手出しをする、そう
 なれば良人うちのひとも腹を立て、茂之助さんを手込てごみに打擲うちしまいいものでも
 ない……まアあるかないか知れませんが、他人ひとの家うちへ来て、縁の
 切れた人が刃物三昧でもすれば聴きません、松さんも元は武士さむらい

だから黙つては居りません、お互いに男同士で切り合つて、松さんがまた茂之助さんに傷でも付けまいものでも有りませんから、それだけはお断り申して置きます」

十七

くの「はい、それが心しんぺえ配でござります、そんだから苦勞でござりますから、斯うやつて此処こけえ参めえつたのです、どうか軽かるはずみ躁さみな事をして参めえるような事がござりましたら、松五郎さんも腹も立ちましようけれども私わしや年寄子供に免じて下すつて、私らを可愛相と思つて、そこだけ御勘弁なすつて……時経つてまた意見を致す

事もござりますから、何うぞお願で、お瀧さん」

と田舎氣質かたぎの正直に手を突き、涙ぐんで頼むので、流石の悪婦も気の毒に思い、

瀧「まあ私の一了簡にも往ゆきませんから、福井町の店受たなうけの処ところへ往つて松さんが遊んで居ますから、私は是から行つて呼んで来ましようから、松さんにお前さんが逢つて頼んで下さい、ね、そうして相談ずくに致しましょう、私も気味が悪い、松さんは留守勝だから無闇な事をして刃物三昧でもされると困りますから」

くの「私わたしもお目にかゝつて是非お頼み申しやすが、貴方あんたからも能くお話なすつて……年寄も居りますが、私わたしも機織奉公めえに参りまして、それが縁になつて嫁かたづきましたのだから、誠まことに私わたしが中へ這入へえつ

て困りやすから、どうかお願いで」

瀧「宜うございます、私が往つて来ます……アノ明けツ放して置きますから、貴方あんたさん少し留守居をして下さい」

くの「はい、宜しゅうござります、お留守いたします、帰つてお茶でも上る様にお湯をかけて置きます」

瀧「じゃア私は一寸往つて来るから、アノ子供衆ちよつとに乳でも呑ましてゆっ緩くりしておいでなさい」

と台所へ立つて、ぶら提灯を提げて、福井町までは近い処でございますから出て往ゆきました。すると秋の空の変り易く、ドードーと一迅じん吹いて来ます風が冷たい風、「夕立や風から先に濡れて来る」と云う雨気あまけで、頓やがてポツリくとやツて来ました、日覆ひよけ

になつた葦簣よしずに雨が当るかと思つううちに、バラ／＼と大粒が降つて来ました。あゝ降出して来て困るだらうと思つて居ると、ドーと吹込む風に灯取虫あかりとりでも来たか行灯あんどうの火を消して真暗まつくらになりましたから、おくのは手探りで火打箱は何処にあるかと台所へ探しに参つた。其の頃はまだマッチは田舎では用いませぬ、火ほくち口箱くちを探しに参りますると、雨は益々ますます烈しくドツ／＼と吹降りに降出して来る。赤城の方から雷鳴かみなりがゴロ／＼雷光いなびかりがピカ／＼その降る中へ手拭でスツトコ冠かむりをした奥木茂之助は、裏と表の目釘しめを湿しめして、逆のほせ上つて人を殺そうと思つるので眼も暗くらんで居おる。裏手へそつと忍んで来て見ると、ピカ／＼とさし込む雷光に女の姿が見えたから、お瀧が彼処あそこに居おると心得、現在我が

女房とも知らず、引抜いた一刀を持って飛掛かった。おくのは真暗闇に人が飛掛かったから驚き、

くの「何方か」どなた

と云う声も雷鳴らいめいの烈しいので聞えませんが。素もとより逆せ上った茂之助ゆえ無慚にも我が女房おくのが負おぶつて居おる乳呑児の上から突通したから堪りません。おくのは

「アツ」

といて倒れた。茂之助は乗つかゝつて、

茂「此の悪党思い知ったか」

と力に任して二ツ三ツ抉こじりましたから、無慚にもおくのは、一ひ歳とつになるお定を負ったなり殺されました。

茂「あゝ……畜生め……あゝ能くもく己に耻をかゝしたな、足利ばかりの耻ツかきじやアねえぞ前橋の友達までに耻をかい居るぞ、畜生め、此の位の事はあたりまえ当然だ……松五郎は居るか」

と探したが他に人も居りません。

茂「松五郎は居ないかくやし口惜い」

とガタ／＼ふる慄えながら血だらけの脇差を提げて探りながら、柄ひやく杓で水を一杯飲みました。

十八

茂之助が柄杓で水を飲んで居るうち、夕立も霽はれて忽たちまちに雲が

切れると、十七日の月影が在々ありくと映さします。

茂「畜生め、能くも己に耻をかゝせやアがつたな」

と髻たぶさを把とつて引起し、窓から映します月影にて見ると、我が女

房おくのでございますから茂之助は恟びつくりして、これは己の家うちじゃ

アないか知らんと四辺あたりをキョトト〜見て死骸へ眼を着けると、お

くのが子供を負おぶつたなりに死んで居ります。あゝ、おさだ迄かと

思うとペタ〜と髻しりもち餅を搗ついて、ただ夢のような心持で、呆ぼんや

然りとして四辺を見まわし、頓やがて気が付いたと見えて、

茂「おくの……堪忍してくんねえよ……ア、何うしてお前は此処

へ来た……間違いだよ、お前を殺すのじゃアない、お瀧松五郎の

畜生を二人諸共殺そうと思つて来たに、何うしてお前此処に居た

のか、お前を殺そうと思つたのじゃアない……あゝ済まねえ、腹一杯苦勞をさせて、お前を殺して済まねえ、己は罰ばちがあたつて此様な事になつたのだ……あゝお前ばかり殺しやアしねえ……おくの確しつかりして呉れ、おくのくく」

と呼ぶ声が耳へ這入つたか、我に回かえつて片手を漸よう々出して茂之助の手へ纏すがつて、

くの「茂之助さん間違いだらうね」

茂「ウム間違えだ、お瀧を殺そうと思つてお前を殺したのだ、堪忍してくれよ」

くの「はい然そうだらうと思つて……知つて居りやす、私わしはもう迎とても助からぬ、こんな事もあるかと思つたから、私は此家こけえ間違

の出来でかさねえように頼みに来ただけでも、最早仕様がねえが、おさだが可愛相だよ……お父さんの身を貴方あんた、心にかけて大切でえしに
しなんしよ」

茂「あゝ己も生きては居ない……堪忍してくれ、あゝ済まねえ事をした」

と云つている内こときにおくのは絶命こときれましたから、茂之助は只呆ぼんや
然りして暫く考えて居ましたが、ふらくツと起たちあが上あがつて、自分
の帯を解へいて竈への角ついかどから釜の蓋へ足を掛けて、梁はりへ二つ三つ巻き
つけ、頸くびへかけて向うへポンと飛んで遂ついに縊くびれて死にました。誠
に情ないことで。処へ提灯を点けて松五郎とお瀧は雨も止みまし
たから帰つて来て見ると此の始末。さア何うしたのだらう鮮血ちみどり

淋漓ちがい、一人は吊下ぶらさがつて居るから驚きまして、隣と云つても遠うございますから駈出して人を聚あつめて来ましたが、此の儘に棄て置く訳にも行きません、此の段を直ぐ訴えて宜かろうと云うので、それから警察署へ訴える事に相成りまして、検死の査官が来られてお調べになりました、直ぐ奥木佐十郎の処へお呼出しでござい
ます。佐十郎も一通りならん驚きで、布卷吉を連れて飛んで参りまして、段々お調べになつて、尚お松五郎夫婦の者を調べると、茂之助が軽かるはずみ躁あせりな事を為しはしないかと案じて来たから、どうか其そん様な事のないようにと存じて頼まれても、一存で挨拶も出来ませんから、夫を福井町へ呼びに往いきますると、大雨に雷鳴かみなり、是々の間手間を取つて帰つて見ますると、留守中に斯様な次第と云

う。段々調べると、成程店受の処に居りました時間もありませんし、江川村から出た時間もありませんから全く間違えて女房を殺し、て転んどう倒して縊くびれて死んだ事であると分つたので事果てましたから、死骸はまず佐十郎方へ引取らせて、野辺送りをいたしました。初めは少しむずかしかつたが、松五郎お瀧も別に処分もありませんで、それなりに事済みになりましたが、松五郎お瀧は此の辺の村の者に憎まれて居いられませんから、早々世帯しよたいを仕舞つて、信州へと云うので旅立ちました。

十九

お話二つに分れました、これは明治七年六月の末のお話でございます。夏になると湯治場が流行りますが、明治七年あたりは湯治場がまだそろそろ是から流行って来ようと云う端緒でございます。熱海、修善寺、箱根などは古い温泉場でございますが、近年は流行いたして、また塩原の温泉が出来、或は湯河原でございます。又は上州に名高い草津の温泉などがございます。先達て私は或るお方のお供をいたして、堀越團十郎と二人で草津へ参つて、彼の温泉に居りましたが、彼処は山へ登るので車が利きません。矢張り昔のように開けません、近郷の人が入浴に参りますが、当今は外国人が大分参りまして入浴いたします。温泉場でもやり尽しまして、斯うしたらお客様のお意に入るか、斯う

云う風に家を建てようかなどと心配いたして、追々開けて参る様
 子でございます、其の中にも丁度近くつて伊香保と云う処は宜い
 処で、海面から二千五百尺高いと云う、空気は誠によく流通いた
 して、それから湯が諸病に利くと云う宜しい処で、脚氣に宜しく、
 産前産後血の道に宜しく、子宮病に宜しく、肺病に宜しく、癩麻
 質斯は素よりの事、これは私が申す訳ではございません、独逸の
 お医者様が仰しやつたので、日本温泉論にありますそうで、随分
 大臣方がお出向になります。何う云うものか、俚諺に、旅籠屋
 のことを大屋おおやくと申します。此の大屋の勢いは大したもので、
 伊香保には結構なのが沢山ございますが、中にも名高いのは木
 暮金太夫、木暮武太夫、永井喜八郎、木暮八郎と云うのが一等

宜いと彼地あちらで申します。木暮八郎の三階へ参つて居ます客は、靈れい
岸島川いがんじまかわ口町くちちようで橋はし本幸三郎ほんしやくざうと申して、お邸やしきへお出入を致し
て、昔からお大名の旗はたもと下の御用を達したもので、只今でも御用
を達す処もござりますが、まア下した質じちを取つて金貸と云うのだから
金満家でございます。お父とつさんは亡なくなつて、当人は相続人になり
ました。只たつ一人のお母つかさんがありまして、幸三郎に嫁を貰つた
処が、三年目に肺病かに罹かりまして、佐藤先生さとうと橋はし本先生ほんにも診み
て貰つたが、思うようでなく、到頭みまか死かりました。今は独ひとり身みで
嫁を探して居おる身体、まだ年が三十七と云うので盛んでございま
する。箱根へ湯治に行つたが面白くない、今度は伊香保へ行つて
見よう、一人では淋しい、連れをと云うので、是れは木挽町こびきちよう三

丁目の 岡村由兵衛おかむらよしべえと云う袋物商ふくろものやと云うと体が宜しいが、仲買ていをしてお出入先から何品なにしなをと云うと、直じきに宮川みやがわへ駈付けると
 いうおたいこ幫間おたいこ半分で面白い人で、また一人は伴廻ともまわり、これは渋川の車夫で、車に乗って来た処が、正直で能く働き、氣の利いた男
 で、しまいには馴染こちらになつて、正直者だから次の間に居れ、帰途かえり
 は又乗ると云う、此方こちらも居得いどくだから小用こようを達して茶をいれたり何
 かする。年はまだ二十八だが、車夫には似合よわぬ好い男でござい
 ます。今日は昼飯を食つてから少し運動をしようとぶら〜出か
 けました。

只今では彼処あそこは変りまして湯本へ行きゆます道がつき、あれから二ツ嶽ふただけの方へ参る新道も出来ましたが、其の頃はそう云う処はありませんか、まず伊香保神社へ行くゆより外に道はございません。石坂を上あがつて行くと二軒茶屋があります、遠眼鏡が出て居ります。が曇つて、些ちつとも見えません、却かえつて只見る方が見えるくらいで、ほんの景気に並んで居るのでございます。お婆さんが茶を売つて居る処へ三人連で浴衣に兵子帯へこおびの形姿なりで這入ろうとすると、何を思つたか掛茶屋の方を見て、車夫の峯松が石坂をトン／＼駈下りました。

幸「おい……峯公何うしたのだ、駈下りたじゃアねえか」

由「其^{そこ}処^こまで来て駈下りしましたが、何か忘れ物でもしたのですしよ
う、貴方がカバンを提げて居らっしゃるとキョト／＼して居ます、
初めて伊香保へ来たから華族さんや官員さんの奥様や、お嬢さん
達の衣装が綺麗で、日に二三度も着替えて御運動だから、彼^{あいつ}奴^つは
安物買が勧^{かん}業^{こう}場^ばへ来たようにキョト／＼して、危い石坂を駈下
りたりなにかするので、今は何で行ったか分りませんが、時々能
く物を買って食う男で、随分意地^{きたな}の穢^{きた}い男で」

幸「何^どしろ何^ど処^こかへ休もうじゃアねえか」

と傍^{かたわら}の茶見世へ這入ると、其^{そこ}処^こに四十八九になる婦人が居りま
す。髪は小さい丸髷に結い、姿^{なり}も堅^こい拵^{しら}えで柔^{おと}和^なしい内儀^{かみ}さんで
ございます、尾張焼の湯呑の怪しいのへ桜を入れて汲んで出す。

其のお盆は伊香保で出来ます括盆くりほんで。

女「此方こちらへお掛けなさいまし」

幸「好いい景色だな、ちようど今頃は好いい景色に向う時だ」

女「はい、御緩ゆるりとお休みなさいまし……おや、貴方あんたは橋本の幸

さんじゃアございませんか」

幸「おや、これは御新造ごしんぞさん……何うして貴方あなたが此処に」

女「誠にどうもお珍めづらしいたつて久しくお目に懸りませんが、ま

ア御承知の通りお上かみも亡なくなりました、私も此様こんな処で、お茶を売

るまでに零落おちぶれましたが貴方あなたはまア大層お立派におなりなすつて、

見違まちいますようで……おや由兵衛さん」

由「これは御新造ごしんぞさん……これはどうも村上の御新造ごしんぞうさん、此処

でお茶を売って居らっしゃるとは何様探報者どんなたんぼうしゃでも気が付きませ
ん……どうしてまあ」

女「どうもお恥かしくって……実は貴方あんたさんも御存じの通り、且
那樣も彼あア云う訳になりましたねえ、仕方なく私ももう段々身体
も悪し、微禄よわりましてしまつたから、何を内職にするにも身体もとが本
だから、其様そんなにくよくよせずこつちに湯治に行つたら宜かろうと勧め
くれる者もありまして、此方こつちの方に縁の家来筋の者が居りました
から、これへ参つて湯治をすると、湯中ゆあたりがしてドツと悪くなり、
五週間ばかり居るうちにお恥かしいお話でございませうが、金を使
い果してしまい、何うする事も出来なくなつたのを、木暮武太夫
と申す大家さまが眞実な人で、種々いろく云つてくれましたから、お

前さん此処へ参ると、望月もちづきと云う書画なぞの世話をする人が在あつて、其の人に道具を東京で買ってもらい、此処へ茶見世を出して居りますのも、大家さん方に願つてお話をして、とうとうまあ此の五月の末からこんな事をして居りますが、ほんの湯治かた／＼やつて居りますので、初めは間が悪くつて知つた方に逢いますと顔から火が出るようで、茶を汲んで出す事も出来ませんでしたが漸く此の頃は馴れて参りました……お懐しい東京の方を見ると、思い出して、東京のようすも大層違つたろうと思ひますが、浅草の観音様は相変らず彼処あそこにありましようねえ」

由「えゝ、ありますとも、外ほかに地面がありませんから」

二十一

由「御新造様、私は余計な事を申すようでございますが、岡野三
太夫様なぞは、以前は殿様くくと申上げたお方だが、拙宅へお手
紙で無心をなさるとは、どのくらいの御苦労か知れませんが、私に
手を突いて御無心をなさる有様にお成りなすつたかと、少し恵む
と云う程な訳ではござりませんが、それから見ると御新造様なん
ぞは御氣楽で、何んだって朝夕斯様な好い景色を庭のように見て
居る、此のくらしいな御養生はありません、お氣楽でげしよう」
女「皆来る方は其様ことを云いますが、お前さん方は偶に来るか
らで、朝夕のべつづけに山を見ると山に倦々しますよ」

由「そうでしょう、こりやアそうでしょう、私の懇意な者が高たかな
 輪わに茶店を出して、旧幕時分で、可笑しかった、帆かけ船は見
 えるし、二十六夜の月やを見て結構でしょうと云うと、左様そうでない、
 通るものは牛馬うしうまばかりで、島流しに遇あつたようだと云つたが、
 これは左様でげしよう、併しかし男子山おのこやまと子持山こもちやまの間から足尾あしおこ
 庚申山うしんざんが見える、男子子持の両山の景色などは好よいねえ……あゝ
 子持で思い出したが、お嬢さんはお身大きくおなりでしょうね」
 女「あれも十九になります、お耻かしい事ではありますが、詮せんかた方
 なしに身過世渡よすぎ、下しもの福田屋龍藏ふくだやりゆうぞう親分さんの処で抱えもすると
 云うので、行立ゆきたたぬから、今では小峰こみねと云つて芸妓げいしやになつて居
 ります」

由「お嬢様が……だからねえ、もうお鼻などは垂れやアしますま
い、お少ちいさい時分にお馴染の方が芸妓に出て、お座敷でお客様に
世辞を云うようになるのだから、此方こつちはベコと禿げるのは当あたりま

前まえで、左様そうでげすか……旦那ちようど好いいのでげす」

幸「御新造様、旧来のお馴染である旦那様にも種いろく々御懇命ごこんめいを

蒙あむつたこともありますから、またお力になるお話もありましよ
う、またお嬢様にも久し振でお目にかゝりたい、事に寄つたら明あ
日したの晩むこう向山へお嬢様を連れておいでなさい、あなたは是非連れ
て来てください」

女「有難うございます、どんなに悦ぶか知れませんが、東京の知つ
た方がお出でになると帰りたいと涙ぐんで話すので、中には連れ

て行こうと云う人もありますが、私があるから行く訳にも行きません、私も行きたいと云うと、婆が一緒じゃア困ると仰しやる、それゆえまア此処に居ります……お前さんは相変らずお元気で」幸「何うも仕方がありません、親父が死んでからは何も為ません、只遊び一方で仕様がな、怠惰者になつて仕様がありません」由「御苦勞なすつた御様子ですが、まだ御新造さんなどは宜しいので、先刻木暮へ漬物を売りに来た方は五百石取つたとか云う、ソレ彼の色の白い伊香保の木瓜見たいな人で、彼の人が元はお旗下だてえから、人間の行末は分りません……じゃア御新造さん私も種々お話もありますから翌の晩」

女「屹度見世を仕舞うと参ります、もう仕舞いませうと思いま

す」

由「翌の晩ですよ、左様なら」

と其^{そこ}処を出て暗くなって帰つて来ましたが、木暮八郎の三階の八畳と六畳の座敷を借りて居る二人連れ、婦人の若い^{かた}方の女中が癩^{しやく}が起つて、お附の女中が落着^{おちつ}く様に押し居^おるが、一人では間に合^あいません、次の間に居た車夫の峰松が手伝つてバタ／＼して居^おる処へ歸つて来ました。

二十二

峰「由さん、今手こずつたよ」

由「何うした」

峰「今お癩で困りますから、早々障子を開けて這入っておくんなせえ」

由「なにを」

峰「癩が起つたので」

由「男が癩を起すのは珍らしいじやアねえか」

峰「私じやアねえ、隣座敷の御新造様が起したので」

由「なに御新造がお癩」

とガラリ障子を明けて見ると、御新造は齒を噛み《くいし》め反つて居るを女中が押して居るが力の強いもので男の二三人ぐらい跳かえしますから、由兵衛が飛込んで押えます。

女「有難うございます、此方様こなたさまで助かります、女一人では仕様が
 ございませぬ」

由「宜しゆうございます、此方こなたへ首をおかけなさいまして、脊割せわり
 を脛すねで押せば宜しいので、何しろお薬を……旦那お薬を」

幸「ナニ薬……峰公、床の間に己のカバンがあるから、あれを持
 つて来な」

峰「カバン」

幸「早く〜」

峰「カバンはございませぬ……貴方そこが其処そこに持って居らっしゃる」
 幸「お、そうか……神薬しんやくがある、早く水を」

というので薬を飲ませると好塩梅いゝに薬も通さつて下さる様子

「反らしちやアいけない……」

由「あ痛^{いて}え石頭^{ぶつつ}を打付けて……旦那^{まじな}ナニを……咒^{まじな}いでげすから貴方^きの下帯^{した}を外して貸して下さい下帯^{した}で釣^つりを掛^かけると好^いいので、私^{わたし}のは越^こ中でいけません、貴^{あなた}君^{きみ}のは絹^{きぬ}でげしよう」

幸「失^し礼^れな、僕^{わが}の下帯^{した}で奥^{おく}様^{さま}方^{かた}を……」

由「だッて御^ご病^{びやう}氣^きの時^{とき}は、そんなことを云^いつたつて仕^し方^{かた}がありま^ません、咒^{まじ}いでげすから、失^し礼^れだつて構^{かま}いません」

幸「じゃアまだ締^しめ^めないのがあるからあれを」

由「締^しめ^めないのはいけません、締^しめ^めたのが宜^いしいので」

幸「だつて此^こ処^こで脱^とれるものか」

とやがて新しい絹^{きぬ}の下帯^{した}を持^もつて来^きて釣^つりをかけ漸^しくに治^ちまり

も着きました。

女「なに好よいよ、もう宜しい、岩いわや治いまつたから心配せんで宜いいよ」

岩「貴方あなたどんなに心配したか知れませんが、お隣のお客様お三方がお出で下すつて、結構なお薬を戴き治まりが着いたのでございませ、確しつかり遊あそばせ」

女「宜よいよ、あゝ……有難うございます、皆さんもう宜よしゆうござります」

由「恐れ入りました、お癩は治あまると後あとはケロく致いたします……中々お強つよいお癩で」

峰「私の拇おやゆび指ゆびはこんなになりました……随分強つよいお癩で」

幸「お薬はまだ私の方にありますから、これは此処へ置いて参り
ます、お構いなくおあがりなすつて」

岩「誠に有難う存じます、おわかいしゆさま若衆様に一と通りならんお世話
になりましたして恐れ入ります……貴方能くお礼を仰しやいな」

女「有難うございます」

幸「左様にお礼では痛み入ります」

と是から自分の座敷へ帰りまして、

幸「強ひどいお癩だねえ」

由「強いたつて癩の起るような身体つきであるよ、瘦せぎすで、
齒を嚙くいメめて居る処は人情本にあるようです、好よい女でげす
な、伊香保で運動して居る奥様方や御新造さん方を見るに一番別

嬪はお隣の御新造で、彼のくれえ品が宜くつて、あのくれえ身体
つきの好いのはありません、外のは随分お形装なりは結構で、出るた
んびにvari、でこくの姿で居ても感心しない、起たつて歩く処を
見ると、丈せいがづんづら低かつたり、お臀しりが大きかつたりするが、
お隣の御新造は別で」

幸「峰公ひどかつたろう」

由「だけれども奥様のお癪を押すのは嬉しかったろう」

峰「そうさ、初めは嬉しかったが、段々ひどくなつて来て、仕舞
には一人で、押し切れず困りました」

由「そこへ私が後押あと押しで、旦那の下帯で綱びきツ引と来たら水沢山も
かるく引上げました」

幸「悪いよ、静かにしろ」

二十三

由「何でもあれは後家様さんだねえ……：：：好よい女だ」

幸「止しねえ、何だか知れるものか」

由「いゝえ後家なりさんだ、姿の拵なりえが野暮でござえます、お屋敷さ
んで殿様が逝おかくれ去なりになつて仕舞つたので、何でも許いいなすけ嫁なりの殿様
が戦争いくさで討うちじに死なりをして、それから貞操みさおを立てるに髪を切ろうと云
うのを、年が若いからお止しなさいとお附の女中がとめて、再縁
をさせようと云うが、御夫人は貞操を立て、生涯尼になつてと云

うのでげしよう……形なり装も宜し、金側の時計に鎖は小さな珊瑚珠が間に這入つて、それからこう頸くびへかける、パチンなどはこんな幅の広いので、竜が珠をこうやって居おる処が着いて居いるのは妙で」

幸「止しねえ」

由「大變に旦那に惚れて居ますぜ、初め私が話をして、彼あれは東京の方だが、お家は川口町うちてえんで」

幸「下らねえことを云うな」

由「なにたゞ川口町と云つたので番地は云いません」

幸「番地など云つてはいかん」

由「どうも本当に品と云い人柄と云い、あんな方はないとお附の

女中に云いましたら、本当に左様そうですと云つて、お附の女中が横眼で見たが、これはどうも只ならんと思います」

幸「止しねえ、詰らんことを云つて、聞えるぜ……峰公、止しな、覗いては悪い」

峰「覗きやアしません」

と次の間で火鉢 火を起して居た車夫の峰松は、火鉢へ火を取つて湯を沸しながら耳を寄せると、此方こちらは癩も治まったと見えて。

岩「どんなにか怖びっくりいたしましたろう」

女「私は久しく起らなかつたが、今日は強く起つて………お湯に動ずると云うが動じたのだろうか」

岩「貴方のようにくよくよして、斯う云う処へ入らっしゃつても

頓とお宅のことをお忘れ遊ばさんからいけません、斯う云う処へ入らしたらすつかり悉皆お宅の事はお忘れ遊ばせ」

女「思うまいと思つてもそうは行くまいじやないか」

岩「そうでございりますが、其の替りには貴方いくか幾日何十日お宅を明けて居らっしゃつても宜しいので、貴方のはきじやく氣癩でございます

よ、それをなお癒さなければならぬと旦那様が仰しやつて、私を附

けて此処にいっか幾日何十日入らっしゃつても何とも御意遊ばさないじ

やアありませんか、それで貴方どんな我儘を仰しやつても、柳に

受けて入らっしゃる、貴方はお仕しあわせ合じやアありませんか、他家よそ

にはかんしゃく疝癩を起して、随分御新造様方を手込てこみになさるお宅うちさえ

有りますじやアございせんか」

女「それは、御自分様に悪い事があるから、私へも優しく遊ばさなければお義理が悪いだろう」

岩「だけれども男は仕方がありませんよ」

女「それは男の働きで、偶たまに芸妓げいしやを買うか、お楽しみに外妾かこいめをなさるとも、何とも云やアしないけれども、旦那様ばかりは余りと思うのは、現在私の血を分けた妹いもとじゃアないか」

岩「それだから斯うやって長く居ても、何とも仰しやらない、今年一杯居てもお小言は出ませんよ」

女「それは早く帰ればお邪魔になるから、たんと居ろと仰しやるので」

岩「貴方はそうお思召ほしめすからいけません」

二十四

岩「貴方木暮武太夫へ菊五郎きくごろうが湯治に来て居ります、家内を連れて来て居ります、松助まつすけも連れて居おるそうです」

女「私は俳優やくしやは嫌い」

岩「落語家はなしかも来て居ります」

女「落語家は饒舌おしやべりで嫌い」

岩「それでは貴方琴をお調べなさいな、どうせ借物かりもので悪うございませ、何か一つお浚さらい遊あそばせ」

女「私は厭だよ……芝居と云えば何なんじやアないか、前橋へ東京の

芝居が来て居るつて」

岩「左様さようで、慥たしか左團次さだんじが来たそうで」

女「左團次と云えば、お隣の旦那様は左團次に能く似て居らつしやるねえ」

岩「左様そうでございますよ、好男子いいおとこで人柄で、そうしてお隣のお

方ぐらい本当に御親切なお方はございませぬ………そしてアノ若い氣の利いた車を引く人、あんな身分に似合わぬ親切な人は有りませぬ、まア一生懸命に汗を掻いて貴方のお癩を押してねえ、それにもう一人の方かたはとぼけて居て、あの方は本当に可笑しい方で、何か仰なんしやって居るといつかお洒落になつて居て、私は分りませぬから御挨拶をすると、洒落に挨拶は驚くと仰しやってねえ、皆みんな

な気が揃って面白いお方で、本当に親切な方ですねえ」

と噂をすればさす影の障子を明けて這入って来たのは車夫の峰松。

峰「先刻は」

岩「おや今お噂をして居りました」

峰「旦那が大変案じておいでなすって、それからお薬がお入いりよう用なら、もつと上げたい、お丸薬の良いのがあるから上げたいと申すので、なんなら持って参りましょうか」

岩「有難うございます、奥様ももう大丈夫で……まアお茶を一つ召上こちられ、まア此方へ」

峰「有難うございます……これは結構なお菓子で……大変ですね

え、お宅から参るので、此方にはごさいません、伊香保饅頭あつたは温かいうちは旨いが冷ひえると往生で、今いま坂さかなんざア食える訳のものではありません……へえー藤村ので、東とう京けいから来るお菓子で、へえ」

岩「今日のは一つ目の越後屋のお菓子で、一つ召上れ」

峰「有難うございます……此方はお二人切りだからお淋しからうって旦那が心配して居ります」

岩「誠に好よい旦那さまで、結構なお薬を頂き有難う存じました、只今お返し申しに上ろうと思つて居ました」

峰「なに返さなくつても宜しゆうございます、幾らも持つておいでになるので、カバンを開けると用意に腹はら痛いたの薬だの頭痛の薬

だの、是れは何んだとかつて幾つもあるのだから、何処が悪いつても大丈夫で、ゆっ緩くり御養生なさい」

岩「あなたの旦那さまは川口町とかで何御商売で」

峰「なにかねかし金貸で、したじち下質を取つてお屋敷へお出入りがあるので」

岩「彼のあ方様今度は御新造様はお連れ遊ばさずに」

峰「なに御新造さまはないので、段々聞くとおなくな死亡になつて仕

舞つたので、是から探すので、伊香保へ探しに来たと云うわけで

はないので、これは湯治でげすが、へえ此方こちらの奥様見たいなあ、

云う御様子のい好い方を女房に持ちたいなどと仰しやいました」

女「あれまア冥加至極な事を仰しやる」

峰「茗みょうが荷がどうしました」

女「いゝえ貴方そんな御冗談ばかり」

二十五

峰「本当でげす、貴方のお癪を押ししたのは誠に有難いと云つていました」

女「恐れ入った事で、まだ癪を押し下すつた御親切のお礼にも上りませんで、本当に貴方方の御親切で助かつたと思つて居ります」

峰「あの由兵衛という男は助平だからお前さんのことも種いろんなことを云つて居ましたよ」

岩「御冗談ばかり」

峰「貴方お癩にはなんでげすねえ四万しまてえ処がありますが、是から九里ばかりありますが、これは子供の虫と癩には覲てきめん面効きくつてえので皆みんなな行きます、これは三日居ればどんな癩でも癒るてえますから入らっしゃいましたな」

女「そう云うお話を聞きました、勧めた方もございますが、初めて知らない処でねえ」

峰「なに車が利くし、道は出来て直じきに往ゆかれます、天狗坂てんぐざかてえのが少し淋しいが、それから先は訳はねえ、私の処とこの旦那も往いくがの」

女「貴方の処とこの旦那さまが、そう何い日」

峰 「明日あすか明後日あさって往ゆくてえます、へえ」

岩 「折角お馴染なじみになつたに、残らずで往いくのですか」

峰 「へえ私も往いくので」

岩 「心細うございますねえ、本当にねえ、お隣へ厭いやな者でも来るといけないと思つて居たが、飛んだ好いいお方が入らしたと喜んで居たのに、四万へ入らつしやるつて、淋しいねえ」

峰 「じゃアあなた方も入らつしやいな、また四万へ往つて隣合つて居ますから入らつしやいましな」

女 「でも貴方、男衆しゆばかりの処とこへ女二人一緒に参るのは、また知れでもしますと」

峰 「知れたつて宜うがす、別れくに往つても一方道で、四万へ

往つたら又お隣り座敷に居れば知れやアしません、そうして襖を明ければ一緒になります、へえ一緒にお出でなさい、旦那も是非お連れ申したいといつて居ましたからお出でなさい」

女「本当に御一緒に参りたいがねえ、宅から郵便でも来て此家に居ないとまた……」

峰「それは此方へ頼めば宜うございます、四万の關善と云うこれは善い宿屋で、郵便も直に來ます、一日遅れぐらいで届きます」
女「参りたい事は参りたいのでございますが」

峰「入らっしゃいまし、入らっしゃいよ、それに貴方明日ね向山へ往くので、私は留守居ですが、向山へ往つて芸妓を聘ぶので、あなた方なら御一緒に入らして月見を成すつては如何

です、向山の玉兔庵ぎよくとあんでえので、御迷惑でございませうか

女「何ういたしまして、迷惑ではございませうか」

峰「由兵衛さんは大変喜んで居りますよ、坂をお手を曳いて歩くのは大変合せだつて云つて居りますが、手が硬こわいと云つて気を揉んで、種いろく々の物を付けて居りました」

女「御冗談ばかり、そんなら明晩月見にお供をいたしても宜しゆうございませうか」

峰「宜しいのなんて、入らつしやい、それから四万へ入らつしやいまし、旦那はねえ駕籠と云うが、由兵衛さんはポコ／＼歩くかも知れねえ、此方こちらは遅れて渋川まで私の車で往つて、渋川で車を一挺雇つて貴方が乗つて追つかけりやア直じきで、一日で往いかれます、

届けものがあれば当家へ言付けて置けば堅え家で屹度届けます」
女「なんだかお別れ申すのが否ですか、じゃアそう云うことに願います」

峯「左様ならそうして入らっしゃいまし」

と妙な処に幫間を叩き、此方も心淋しいから往く了簡になりまして、是れから玉兔庵という料理屋へ参り、図らずも此の奥様の身の上が分ると云うお話でございます。

二十六

橋本幸三郎と岡村由兵衛は、向山の玉兔庵と申します料理屋へ

参りましたが、只今では岩崎いわさきさんがお買入れになりました彼あすこ処が御別荘になりましたが、以前まえには伊香保から榛名山はるなさんへ参詣いたしましたするに、二ツ嶽ふただけへ出ます新道しんみちが開けません時でございませから、一方道では是非彼処を参らなければなりません、彼処に福田屋龍藏親分が住居致して居りまして通ります人の休み処どこで飴菓子あまを売って居ましたのが初はじめで、伊香保が盛つたに付いて料理屋を始めましたが、連藏れんぞうと云う息子が居て、その息子が一寸料理心があつて胡麻豆腐と胡瓜きゅうり揉もみという物が当所の名物でございませ。一寸鮎あゆいか或は鯉いけすなぞを活洲いけすにいたしましたから、活きたのが食べられます。現今たゞいまでは伊香保に西洋料理も出来ました。その玉兎庵へ参つて、広間の方で橋本幸三郎が一杯やつて居ります

と、後あとから連れて来たのは隣り座敷に居ります処の御新造でござ
 います。年が未だ二十四と云う実に品の好よい別嬪でござりまする。
 世間を余り見ない人と見えます。お附の女中はお岩と云つて四十
 二三でございます。是は品の好いい訳で、出が宜しい。旧幕の折に
 は駿河台胸突坂むねつきざかに居まして、二千五百石頂戴致した小栗上おぐりこうずけ
 野介のすけと云う人の妾の子でござりまする。この小栗と申す人は米あ
 めりか
 国へ洋行した初めで外国奉行を兼ね御勘定奉行で飛鳥とぶとりを落す
 程の勢い、其の人の娘で、私わたくしどもは深い事は心得ませんが、三さん
 倉くらで小栗様は討たれ、又また市様いちと云う若殿様は上州高崎へ引取
 られ、大音龍太郎おおおとりゆうたろうと云う人のため故なく越度おちどもなきに断罪で、
 あとで調べて見ると斬らぬでも宜かつたそうであります。飛んだ

災難でございました。それから散々ちり／＼になつて奥方は会津に落
 ちて、会津から上方へ落ちて、只今駿府にお在いでと聞きましたが、
 何う成行きましたか。此のお藤ふじと申す婦人は小栗様の娘で、幼年
 の折久留島様くるしまと云うお旗下へ御養女ごようにょにおいでなすつたお方で、維
 新になりましてからお旗下様は御商法を始めて結構なお暮しでご
 ざいまして、何処か以前のお癖くせがありますから、どうも御身代
 のお為に悪いそうでございまして、殿様育ちのお癖くせかお冗費むだが立
 ちだすような事がありますから、商法なすつても思うようには儲
 けもないが、段々開けて来まして、皆みな殿様方も商法は御上ご手に
 おなり遊あそばしました。出が良よいから品と云い応対おうたいと云い蓮葉はすっぱな
 処ところは少しもありません、落着いて居て、盃を一つ受けるにも整然ちやん

と正しいので、

幸「そう貴方お堅くなすつてはいけません、どうか私どもはぞんざい者で、お屋敷様へお出入りをいたした者でも、町人の癖おんもりとした事は云えないので……こんな饒舌おしゃべりも付いて居りますが、此の通りずぼらなことは云うが堅いことは云えませんか、お打解けなすつて召上りました」

由「こんにち今日は私は奥様の前は堅くやろうと思つたが、堅くやると云いそこない、漢語などを使おうとすると、時々変なことを云いますから、矢張天保時代昔者でげすから、昔の言葉でなければいけません、殿様方もお戦いくさに往つて入らつしつて命がけを度々たびくなされた方が、段々商あきんど人におなり遊ばして、世の中の人と同等

の御交際をされますが、昔を知つて居りますから貴くとうと思ひまして」
 など、話のうちに追々肴が真中まんなかへおし並びますので、

幸「由兵衛一猪口……」

由「有難う……、胡麻豆腐は冷えませんうち召上ると云うことは
 出来ません、先から冷たいからこれも温かあつたゝつたら旨かろうと思
 います……瓜揉は感心で、少し甘つたるいのは酢が少し足らない
 ……今日きょうは小峰こみねさんと云う芸妓げいしやが参りますが、是も昔は長刀ながなた
 の、ぞうりをはいてと伊左衛門いざえもんではありませんが大層なお身の上
 の人で」

と話のうち小峰が参りましたから、

由「ヤア来た〜……あゝ来た、どうも綺麗だ」

二十七

幸「さア〜此方こつちへ、貴方大きくおんななすつて」

由「御覧なさい、お小さいうちに逢ぎつた限で、昔馴染と云うものはねえ旦那」

幸「お上りなすつて、さア……どうもお美しくお成りなすつた」

由「上等〜……さア〜大変先刻さつきからお待ち申して居りました」

やま「誠に遅うなりました……御免下さい、貴方ねえ昼間のうちから上りたいと申してはそわ〜して居りまして、早く行つてお目に懸すりたいと申して、直すぐに木暮さんへ行こうと申して居りまし

だが、大屋さまへ行つても運動にでもお出で留守だといけまいから、それより暮れてからのお約束だからと申してね貴方」

由「へえ大変に待つて居たので……イヤこれはどうも誠に」

小峯「昨日は母が誠に失礼を致しまして」

幸「どうも暫く、実にお見違い申して、往来で逢つては知れませんよ」

由「実にお見外れ申します……え、貴方のお少さい時分に私はお屋敷へ上つたことがございます、あの時はそれ両方のお手に大きな金平糖と小さい金平糖、赤いのが這入った袋を二つ持つて入らして、私が頂戴と云うと貴方一つ下すつた、お気象がよくつて入らして、もう一つと云うと、また袋の中から、もう一つく

と皆みんなな貰もらつて仕舞しまつて、終しまいにはもう一つもないから、袋を覗のぞいてお泣なきなすつたことがありましたが、彼あの時分からお馴染なじみでげすから」

小峯「有難ありがたうございます、お母つかさんが帰かえつて来てまア、由兵衛さんがお出いでなすつたから早くお目めにかゝれと申まをして……また昨日は有難ありがたうございます」

幸「どう致いたして」

やま「あんなにお茶代ちやだいを頂き濟たまないと申まをして、お茶代ちやだいなぞ頂く簡かんではないと申まをして」

由「貴方あなたそう思召おもしますからいけないのです、茶見世ちやみよを出したら茶代ちやだいは沢山たんと取る方が宜よろしゆうございます、料理屋ちやうりやなら料理ちやうりを無闇むぐみ

に売るのが徳で、由兵衛などはたばこ入いれなら少々ぐらい破れて居ても売って仕舞います、それが商売で……これはお隣りの座敷

においでの方で」

やま「おやお嬢様どなたさまも……」

女「誠に……おや思いがけない、お前やまじやアないか」

やま「おやお嬢様……お岩さまがお供でございますか」

由「おや、これはく御存じで」

やま「御存じだってお少ちいさい時分お乳を上げたのでございませう
の」

幸「不思議でげすねえ、これはどうも、へえー」

やま「誠に御無沙汰申上げましたが、もう実にお見違い申すよう

におなり遊ばして、只今ではお尋ね申すことも出来ませんで……左様で、小石川へ入らしたと承わりました……お岩様誠に貴方いつもお変りもなく」

岩「誠に久しくお目にかゝりませんで、ついでねえ貴方種々いろくな事があつて、申すにも申されぬことがございまして、小石川へお引込ひっこみになつて、何も彼も御存じでありませうが、此の節のお身の上、実においとしい事でございますが、お少さい時分御案内の通り彼の事あが決りませんで、私わたくしが只一人でじゃく張つてお側にお付き申して居りますから、お心丈夫に入らつしやいと申して、種々深い理由わけがあつて今度は当地へ湯治が宜かろうと仰しやるので、三週間の休暇を頂き、私もお蔭様で保養いたしますが、

実にどうもねえ、貴方にお目に懸ろうとは思いませんでした」

やま「お嬉しゅうございますわ、わたくし私も此の橋本にお目に懸ったの

ですが、昔のことを仰しやると面目次第もない、どうもねえ……

娘がこれ芸妓げいしやをして、娘は貴方それ七歳ななつの時に御覧なすった峰と申

す娘で、誠にこれが芸妓をして私は誠にもう面目ないよしずつぱり葎簀張よしずつぱりの

茶見世を出して、お茶を売るまでにおちぶ零落れました、それから見れ

ばお岩様などは此方こなたさま様のお側だから何も御不足はないので、まア

結構でございます」

岩「はい実に苦勞しても貴方お屋敷と違つてね、それに殿様があゝ

云う訳にお成りなすつたから、何うすることも出来ませんで、思

いがけないまた外に苦勞がございまして」

由「これは妙でげす貴方、此方こなたは」

やま「はい此方さまは駿河台のソレ胸突坂に入らつしやつた殿様のお二方ふたかため目のお嬢さまでございます」

二十八

幸「どうも思い掛けない、不思議な御縁付で」

やま「御縁付はまだお極りにはなりませんので」

岩「へ、まだ御婚礼は済まないのです、誠に生涯お一人で暮したい

なぞと心細い事を仰しやるから、私わたくしがお附き申しては居りますが、

そんならつて御姉妹ごきょうだいでありますので、宅うちの方の極りが着けば何

うでも斯うでも此方様はお姉さまの事ですから、極りが着こうと思つて、只今はお一方ひとかたで入らつしやるので」

由「不思議でげすねえ……だから私わたくしが申したので、御様子が違うてえので……お屋敷はやはり駿河台の胸突坂で、旧幕時代二千五百石もお取り遊ばしたのでげす……違いますなア……え、お癩の起し振もどうも違います、二千五百石だけのお癩をお起しなさる……これはどうも」

やま「何しろお嬢様にお目に懸りますのは尽きせぬ御縁と申すもので」

由「ごまをするといふので瓜揉を一つ頂戴」

と由兵衛が頻しきりに喋つて居ると、向うの四畳半の離れに二人連

の客、一人は土岐とぎ様の藩中のございまして、岡山五長太おかやまごちようたと云う土族さん、酒の上の悪い人、此の人は三十七八になり未だ道楽も止まぬと見える。今一人は三十六七で小粋な人でございますなれども、田舎の通り者、桑原治兵衛じへえと云う渋川の糸商人いとあきんどでございまして、折々此の地へ参つて遊んでばかり居ります。頻りにポン／＼手を敲きますが、余り返辞を致しません。人が出て来ませんのは、沢山奉公人も居りませんから出ないと、癩癩を起して国会の演説が始まった様にピシヤ／＼手を敲きます。

岡山「誰も来ねえのか、これ／＼」

男「へえ／＼」

と黄色い声で、

男「此方様で」

とチヨコくと来た者は妙な男で、もと東京の向両国の軍雞屋しやもやの重吉じゆうきちと云う、体軀なりの小さい人でございます。身の丈は二尺五寸しかないが、首は大人程ありまして、小さいたつて彼の位小さい人はありますまい。形なりに応じて手足の節々も短かい。まるで子供のようであります。反物を一反買いますと、自分の着物に、半纏はんてんに、女房の前掛みづとんに、子供のちゃんくが取れるというのでございます、三布蒲団みのぶとんを横に着て足の方へあんかを入れて、まだ二寸ばかりたれているというから、余程小さい男であります。割合ふとに肥ふつて居て頭かぶが大きいから、駈よろけると躡ひつくりかえけてひつくりかえ覆かえる事があります、一寸ちよつと見ると写し画えの口上云い見たいで、なんだ

か化物屋敷へ出る一ツ目小僧の茶給仕のようではありますが、妙に気が利いて居て、なか／＼発明な人であります。

重「へえ、お呼びなすつたのは此方こちらでげすか」

というを見ると二人は驚きました。

岡山「なんだ化物か、ア、何んだ」

重「お呼びなすつたから参めえりました」

岡山「何んだ、エ何んだ」

重「エへ、お手が鳴りましたから参めえりました」

岡山「お手が鳴ったつて、何んだ、ウン……亭主は居らんか、総体当家ではなんだ僕たちを愚弄して居おるな、なんだ胆きもを潰す薄暗い処へピョコと出て驚く、真人間をよこせ、五体不具かたわなる者を挨

擲に出すべきものでない、退さがつて普通なみの人間を出せ、なんだ」
 重「へえ五体不具ふぐ、かたわと仰しやるは甚だ失敬で、何処かたわが不具
 で、足も二本手も二本眼も二つあります」

岡山「それで一つ眼なら全まるで化物だ、こんな山の中で猫かりゆうど人が
 居るから追掛けるぞ、そんな姿なりでピヨコ／＼やって来るな、亭主
 を呼べ」

重「亭主は前橋へ往つて居りませんから私わたくしが代りに出たので」

岡山「じゃア家内が居るだろう、家内を呼べ……これ先刻さつき小峯に
 口をかけた処が、小峯は病気で出られぬと其の方が申した、其の
 小峯がどう云う理由わけで向うの座敷へ参つて居おるか、さアそれを聞
 こう」

重「えい、病気で居たのでございりますが、ながらく旧来のお馴染で、お客様へ一寸御挨拶と云うので参つたので」

岡山「なに馴染だと、これ僕等は馴染でないから大病であるか、

立聞はせんが誠に静かであれば、馴染の客であれば忽ちたちま大病が全

快すると申すか、口をかけても偽にせやまい病いを起して参らぬのは何う

云う理由か、さアそれを聞こうと云うのだ、来なければ来ないで

よい、早く申せば旨くもねえものをこんなに数々とりはせぬぞ、

長居をして時間ときを費し、食いたくもない物を取り、むだな飲食のみくい

をしたゆえ代は払わんぞ」

重「誠にどうも仕様がございません、向うは馴染で御挨拶だけで」

岡山「挨拶だけという事があるか……」

桑原「まあ、君、待ちたまえ、僕も度々来ては厄介になるけ

れども、能く考えて見ろ、此の旦那様を此処へ連れて来て、芸

妓を呼ばつても来ず、その小峯が向うへ来て此処へ来ねえで見

れば、己が呼ぶたんびに祝儀でも遣らぬよう、朋友に対しても

外聞の至り赤面の至りじゃアねえか、来ねえば来ねえで宜いが、

どうも此方へは病気で参られませんかと云うて向うに居るのは奇

怪じゃアねえか、どう云う次第であるか、胸を聞こう、向うへ

挨拶なら此方へも挨拶だけ来て貰わねえばなんねえ」

重「あれはお母^{つか}さんが堅いから出しません」

岡山「愚弄いたすな、来^きなければ来^こんで宜^よい、此の方の酒食いたした代価は払わぬから左様心得ろ」

重「それは困ります」

岡山「困るたつて、何故べんく〜と待たした、来るかく〜と思つて要らんものまで取つた」

重「貴方が召上つたので」

岡山「それは出たから些^{ちっ}とは食う、食つたけれども代は払わぬ：

…」

桑原「いや、それは代は払つても宜^よいが、能く積つても見なんし、どう考えてもいやに釣られて、小峯が来るかく〜と思つて、長い

間時間を費し、それ／＼要用のある身の上、どう云う理由か我々どもを人力車夫同様に取扱われては迷惑だから、親方を此方へ呼ばつて貰おう、どれほど此の家に借りでもあるか、芸妓に祝儀でも遣らぬ事があるか、どう云う次第か、さアそれを聞こう、呼ばつて来い」

重「前橋へ往つて居ないと申しますのに」

岡山「前橋へ往つた……帰るまで待とう」

重「何時帰るかどうも知れませんが」

岡山「帰るまで泊つて居る」

と云いながら突然重吉の頭をポカン。

重「おや何で打つのです」

岡山「打ったがどうした、大きな頭を敲き込んで遣ろうと思つて打った」

重「無暗むやみに打つて失敬ではございませんか」

岡山「何がどうした、コレなんだ、化物見たいなものを遣しやアがつて」

と云いながら其処にありました又タの皿を把とつて投ほうりましたか

ら、皿小鉢は粉々になりましたが、他に若い衆しゅが居ないから中へ

這入る人もない。すると上り端あがに腰はなを掛けて居たのは、吾妻あがつまごお

郡りで市城村いちしろむらと云う処の、これは筏いかだ乗のりで市四郎いちしろろうと云う誠

に田舎者で骨太な人でございますが、弱い者は何処までも助けよ

うと云う うまれつき 天 稟の氣象で、さん 三の倉の産で、今は市城村に しよたい 世帯
 を持つて筏乗をして母を養う じつめい 実銘な人。此の人は力がある尤も
 筏乗は力がなければ材木を取扱いますから出来ません。市四郎は
おとこだて 狭客の氣質でございます故見兼ねて中へ飛込み、
 市「あなた 貴方待つてくんなせえ、困った人だ皿を投ほうつちやア困ります
 よ、よえ 弱え者虐めして貴方困るじやアねえか、ていげえ 大概にしてくんな
 せえ、こゝ 此家な連藏れんぞうさんは居ねえが、かみさん 内儀は料理して居る、奉公
 人は少ねえに皿小鉢を打投ぶつぼうつて毀こわれます、三百や四百で買える
 物じやアねえ、てえげえ 大概にするが宜よい」
 岡山「てめえ 手前何んだ」
 市「おら己ア此処へ用が有つて来合せていたのだ」

岡山「手前てめえ仲へ這入るなら僕らの顔を立てるのが仲裁のあたりまえ当あ前まへだ」

市「お前方の顔を立て、上げてえが立てようががんしなえ、相手が悪いならば、あんた方の顔も立て、上げやしようが、弱よええ者いじめをするにも程がある、此こ様なかたはナニ子供のような重さんの頭をぶちなぐる事はハアねえだ」

岡山「そんな不具かたわもん者の顔を立てんでも宜よい、拙者どもは芸妓げいしや小峯を呼びに遣わしたる処、病氣と欺き参らんのみか、向うへ来て居るのは甚きつだ奇怪きつかいに心得るから申すのだ」

市「それが奇怪だつて、そりや無理だ、芸妓だつても厭とこな処へは来きなえ、貴方あんたの方は厭だから来なえのだろう」

岡山「コレ甚だ失敬な事申すな」

市「失敬たつて、芸妓だつて、酒飲さけのみで小理窟をいう客は誰たれでも嫌きらえだ、向うは柔やさしい客で好いい座敷だ、向うへ往いくのは当り前めえの話で貴方あんた御扶持を出して抱えて置くじやアなえし、仕様ねえから早く帰つておくんなさえ……なにする、己胸倉おれ捉とつてどうする」

と市四郎の胸倉を捉つた岡山の手を握ると市四郎は大力だいきでありますから。

市「何をする」

と逆さかに取つて岡山の胸をポーンと突くとコロ／＼／＼／＼ツと彼のあのどうも深い谷川へ逆蜻蛉さかとんぼをうつて五長太が落ちますと、桑原治平はこれを見て驚き駈下りたが、嶮けわしい坂でありますから踏

み外してこれもころが転り落ちました。

三十

岡山五長太と桑原治平の二人がゴロ／＼落る騒ぎに、一人奥に働いて居た人が何時のまにか伊香保の派出所へ訴えたから、巡査さんが官棒たずさを携え靴はを穿はいて、彼かの高い処とこをお役とは云いながら、駈上つてお出でになり、

巡査「これ、どうか、え、お前じゃアなえか、此の谷川へ二人とも打落うちおとしたは何故か」

市「はい、私打落わひちおとしたつて、私を打殴ぶちなぐるから私も先の相手を打

落しやした」

巡「コラ、仮令たと其いの方ぶちを撲ちよう打ちやく擲やくを致したにもせよ人を打擲す

るのみならず、此の谷川へ投落すと云う理由わけはあるまい、乱暴な事をして、えゝこれ、派出へ来なさい」

市「私わしそんなとけえ往いくのは厭だねえ」

巡「これ、厭と云うて済もうか、直すぐにさア来なさい」

市「私わしは派出などへ何の科とががあつて私参めえるのだね」

巡「コラ分らぬ奴じゃ、これへ二人の者を打込んだではないか」

市「打ぶち込んだと云つて、先で己おらに打ぶつて掛るから己だつて黙つて

は居おられねえから、手工てひん捻ねじつて突いたら、向うの野郎逆蜻蛉

を打うつて落おつちたので、私わしが打落ぶちしたのではねえ」

巡「じゃアから分らぬ事を云わんで派出へ参れ」

市「派出てえ何処どけえ」

巡「屯とんしょ所へ参れ」

市「屯所たつてお屯たむろさま様へ呼ばれる私罪わしはなえ」

巡「分らん奴であるぞ、罪と云うは今の事じゃ、二人を打落ぶちおとした

のが罪じゃ」

市「己おらを先へ打ぶつ奴の方が罪があると思いやんすが、どうだえ」

巡「分らん事を申すな、お前は布告を知らんなア」

市「へい知りません、私わしの方へ布告が廻つた事もありやんすが、

読めねえだ、手てなれえ習なした事がねえから何だか分らねえから印形つ捺

いて段々廻すだ、時々聞きに來いなんど云うが、郡役所だつて一

里半もあるので、其処まで参るにはしょうべえ商業を休まなければなん
ねえだから、聞きに往いく訳にはめえりませんよ」

巡「どうもはや分らぬ奴……参れ」

市「めえ参れませんよ」

巡「なぜ参らぬか」

市「なぜめえ参らぬだつて、あんたわし貴方私が悪くアねえのだに、先に打ぶちや
した奴を先へ連れて往ゆくがいのだ、私ばかり悪いからつて連れ
て行くてえなア無理な話で」

巡「どう云う理由わけで此の谷へ打ぶ込んだか、それを申せ」

市「はい打込んだつてえ、私わしを打うつたゞからよ」

巡「じゃが理由わけなく貴様を打つという事もあるまい、貴様に悪い

事があるから向うでも打擲したのだろうから隠さず云え」

市「隠すも何もねえ、此処うちな家へ来て芸妓げいしやが来きねえつて皿小鉢

を投ほうつて暴れるので、仕方がねえから、私用わしがあつて此家こけえ来て

居りやんしたが、見兼て仲へ這入つた処が、私胸倉わしア捉とるから、

仲ちゆうにん 人だと云うのに聞入れず私を打ちに掛つたから、まごご

すると打たれるから引外ひっぱはずしたら躑よろけたので」

巡「また左様そう云う悪い者があつたら手込てごみに谷川へ打込む事はなら

ぬ、すぐ派出所あも在るものじやから訴えなければならんに、手込てごめに

する事はない、なぜ届け出いでんのじや」

市「だつて此の谷を下りて、貴方あんたの方へ訴えて此処こけえ来る時分に

は逃げてしまうから、打たれ損にならねえ先に、貴方だつて間に

合いませんから、私は貴方の代りに打ぶち殴なぐつて、谷へ投り込んだので、早く云えば貴方の代りにしたので、大きに御苦勞ぐれえ仰しやつても宜かろうと思いやんす」

巡「えゝ、僕を愚弄致すか」

市「愚弄てえ何か」

巡「えゝ分らぬチユウものじゃ、まア参れよ」

市「参まいりませんよ」

巡「参らぬと云う事があるものか」

と分らぬ奴もあるもので、田舎育ちでも今は開けましたが、其の頃は無学文盲の無法者がありまして、強情を張つてお困りでございませうが、これを丹誠して引張ひっぱつて行くゆ、実に御難儀なお役で。

巡「参れ〜」

と手を捉とつて引こうとしたが大力無双の市四郎が少しも動かず、引く途端に官棒でお打ちなすつたのではありませんが、グツと引く機はずみに市四郎の手先へ棒が当たると、市四郎が怒おこつて、市「や私わしを打ぶつたな、貴方あんたなんで打うつた、無暗むやみに打うつて済むか、お役人ひとが人民ぶんなぐを打うつて済むか、貴方あんたでは分わらねえから、もつと鼻の下に髯たんとの沢山たん生なえた方なたにお目めにかゝり、掛合かいいたしやす、さア一緒いっしょに行いきましょう」

と反あべこべ対たいに巡査あべこべさんの手を捉とつて向山の坂を下くだりましたが、世の中よには理不あべこべ尽つな奴やつもあれば有あるもので、是こゝからお調あべこべべに相成あべこべります。

三十一

さて引続きまする伊香保の湯煙のお話でございます。向山の玉
兔庵で五長太という士族を谷へ投込みました者は、大力無双の筏
乗市四郎という者であります。此の人は誠にうまれつき天稟ようかく侠客の志
がございまして、弱い者を助け、強い者は飽くまでも向うを張り
まするので、村方で困る百姓があれば、自分も困る身みじょう上でござ
います。惜し気もなく恵むという極ごく義堅い気質でございます。
三の倉に居ります中うちは御領主の小栗上野介様が討たれました時其
の村方を御支配なさるお方が彼様あんなお死しに様ようをなすつて誠にお気

の毒の事というので、其の人に附いて居りました忠義の御家来、老人であるからというので自分方へ引取つて三ヶ年介抱を致して、此の人が此の市四郎のお蔭で見送りをされますなどという細かきお話は後あとで申し上げますが、中々聞かない氣質で、其の代り此の市四郎は学問がございませぬから開化の事は頓と心得ませぬが、巡查様さんでも何でも見境なく無暗むやみに強情を張つて巡查様の手を取つて向山の坂を降り、また登つて派出所に参りました。巡查様もお驚きで、左様な暴な奴に逢つては仕方がないもので、此の事を警部様さんへお伝えなされた事でございますから、警部公お出向きなされたが、恐れる気色けしきもなく仁王立に突立つて居ります。

警「これ、手前か向山の玉兎庵で口論の末士族てい体の者を谷川へ打ぶ

込ちこんじやというが、それは何うも宜しくない、どういふ訳でそう
 いう乱暴な事を致すか」

市「先刻さつきも私わしが云います通り、乱暴でねえで、何方どっちが乱暴だかね
 え、貴方あんたの方で能く調べねえで無闇に來こうくと云つて此処まで
 連れて來て、私もコレ用のある人間で、一日幾許いくらつて手間を取つ
 て居る者が、暇つぶア消して此処まで引張られるは難儀だから、参めえら
 ねえというものを何んでもという、私わしア暇を消して参めえつたが、私
 が悪わりいか向うな士族とかいふが悪いか見定めて人を引張つたら宜
 かろう」

警「そうじやが、其の方は谷川へその士族体の者を打込んだとい
 う、巡查が確しかと是を見届け、又福田連藏方からも届けがあつた故

に出張した処とこが、全く其の方が投込んだという、其の方住所姓名は何と申すか、え、其の方の住所姓名を申せ」

市「何も私わしア……住持あくてえに悪あくてえ体を清兵衛せいべえが吐ついたという訳でねえが、ありやア三の倉の間違えでしょう」

警「いや其の方の住んで居おる所は何と申す」

市「私わしの居いる処とこか、私の居る処は吾妻郡の市城村で」

警「其の方は姓名は何と申すか」

市「姓名てえ何か」

警「其の方の名」

市「己おらア名か、己ア市四郎と云います」

警「営業は何か」

市「えゝ」

警「営業」

市「なに」

警「分らん奴じや、ウーン営業を知らんてえ事があるか」

市「知りません、其様な事どうして、只の字せえ知らねえで習わねえに英語なぞ何なに知る訳がねえ、それは外国げえこくじん人のいうことだ」

警「英語ではない、営業というは其の方の渡なりわい世商売じや」

市「商しょうべえ売か商売は市四郎てえ筏乗でがんす」

警「何なにゆえ故あつて向山へ今こんにち日参ったか」

市「何をたつて連藏さんとは心安もんい者で、茸きのこを些ちつとばかり採つたから商売の種に遣りてえと思つて持つて来て、縁側やで一服喫つて

居ると、向うの離座敷で暴れ廻る客があるだ、若い衆を擲なぐつてい
 けえこともねえ皿を打ぶちこわ壊したりして見兼ねたから、仲へ這入へえつ
 て何故なぜ此様こんな事をすると段々尋ねた処とこが、仲ちゆうにん人の私わしがに悪あつこ
 口吐うっいて打ぶつて掛るから、打たれては間に合あいませぬから胸を
 衝つくと逆蜻蛉ひつくりけえを打ぶつて顛ひつくりけえ覆ひつたゞ、ねえまア向うが弱よええから
 だ」

警なげ「何故なぜ其その様な暴な事をするか」

市いち「するツたつて向うで打ぶつから己おちア方でも打ぶつたゞ、黙もくつて見
 ては居いられねえから打ちやした」

警「たとえ仮令そういう者があるにもせよ、何故左様な暴な事を士族体の者が致したら、此の方へ届けん、自身手てごみ込に打擲するという事はない、人を打ぶつてえ事はない、殴打そうしやう創傷の罪と申して刑法第二百九十九条に照して其の方処分を受けんければならんじやないか」

市「えゝ、あれはナニ二百五十銭ばかりの銭で腹ア立てゝ、あれは根が太おおた田宗長そうちやうという医者が悪いので、薬礼しろというが、銭ねえならお前二百五十銭に負けて遣つてくれというが、負けられねえつていうから喧嘩になつたゞ」

警「ナニ……そんな事を尋ねるのじやアない、ウーン誠に困るナ

…其の方は人の身体を無闇に打つものではない、人の身体は大切のものじゃ、分らんか、この肉体というものは容易なものではない造物主より賜わる処の此の肉体は大切なものじゃ」

市「誰が呉れやした、虚言ばかり吐いて、此の体は木彫じゃアねえし仏師屋が造つたなんてえ」

警「仏師屋じゃアない造物主、早く言えば神から下すつた身体、無闇と殴ち打擲して、殊に谷川へ投込むなどは以ての外であるぞ」

市「じゃア先方の体ばかり神様から貰つて、己ア体は粗末にしても構わねえと云わつしやるのか」

警「粗末にするという事があるか、先方の身体も貴様の身体も同

じじや、それじやに依つて喧嘩口論して、粗暴に人を打擲する事はならん」

市「何だか貴方あんたの云うことは明瞭はつきり分らねえ、だがねえ己おらア身体は大事、先方むこうな身体も大事と一つにいうなら、何故己ア身体を先方な奴が打ぶつたか、打たれては腹が立つ、先方で打つて此方こつちで手出しが出来ねえといつて、此方の坂を下りて亦登つて貴方へ打ちやしたと届けて出て、それから又坂ア下つて又登つて向山まで往いく間まにやア向うの奴は逃げて仕舞うから打ぶれ損で、此の体に創きずを出来でかしたら貴方其の創を癒す事は出来ねえだろうが、先方で打ちやアがつたから己が打ぶ返かへしたので、謂いわばあんたの代りだ」

警「代りという事があるか、全く先方せんぼうから先に手出しをした証拠

があるか」

市「ナニ……」

警「先方から先に手出しをした証しやうがあるか」

市「えゝ、すりア有りやんす、此処こゝに居る重吉という者、主人あるじが

居りやせんからソノ番頭役を致しやす、此の人が証あかし拠だ、のう出で

來助くすけどん」

警「出來助……其の方か」

重「へえ、それはへエ私が申します、乱暴をして、毎日くお酒を飲たべて無闇に皿小鉢なげうを抛なつて打ぶつたりして、殊に私の頭を二つ打つたので、へえ、見兼ねて此の親方が仲へ這入つて下すつたので、二言三言云いやってねえ：親方に打つて掛つたねえ、証あかし拠は

親方の頭に少々ソノ創がございます、へえ」

市「ねえ此の人が証拠で、神様から貰った私が身体を打つたから打返しただ、ねえ、だから貴方の些たア手助かりをしたゞ」

警「なに手助かりと云うがあるか……先方で先に打つたとあれば……まアよいわ……ふろんざい不論罪じゃ、それでは宜しい、宜しいに依

つて向後は左様な粗暴な事をしてはならんぞ、もう其の方も三十を越えて血気な若い者とも違うから、以後は喧嘩口論をして人を打擲することは相成らぬ、能く弁えろわきま」

市「それから」

警「それからということはない、宜いからもう参れ」

市「へえ、そうか、もう宜いのか、あんたも骨が折れるねえ、あ

んたも早く云えば 仲ちゆうにん 人だ、己おらアも仲人にべえ頼まれて、能く
 村で仲人に這入へえつて人の事を捌さばくだが、中々骨え折れる役だねえ、
 あんた方もなア」
 警「早く往いけ」

と巡査様もお困りで、分らん者でございませうけれども、別に悪
 い事をしないのに、近村で問いましたも 正しやうとう 当潔白という事、
 是は巡査様も御存じだから先ず軽かろく済みました、向山に居りま
 した橋本幸三郎、岡村由兵衛は混雑ごたすたが出来て面白くもない、殊に
 女連というので一とまず木暮八郎方へ帰りまして、翌日になりま
 すと、朝飯を食べると誂あつらえて置いたから山駕籠が一挺来ましたか
 ら、是へ幸三郎が乗り、衣類の這入へえつた大きな鞆が駕籠の上に付

き、手提てさげが前に付きまして、其の他葡萄酒びんの壺びんが這入り、又東京
 から持つて参つた風月堂ふうげつどうの菓子なども這入り、すっぱり支度を
 して四万の温泉場へ参る事になりました。岡村由兵衛は昔風でご
 ざいますから、一寸ちよつと致したくすんだ縞の浴衣に、小紋のこつく
 りと致した山やまなし無の脚絆かぎに紺足袋、麻裏草履に蝙蝠傘をさして靴
 を提げて駕籠の側につきまして、これから出まして、後あとの事は車くるま
 夫おまひきの峰松に残らず頼みましたから、

峯「万事心得ました、遅くも参ります、由兵衛さん旦那を何分宜
 しゅうお願い申します」
 由「よろしい、頼む」

と是から出しましたが、前ぜん申上げて置きました隣座敷のお藤とい

う別嬪は、お附の女中岩と峰松が供をして、一緒に出るも極りが悪いから、後あとから出る約束に成つて居ります。

三十三

橋本幸三郎、岡村由兵衛の兩人は伊香保を下おりまして、御案内の湯中子村ゆなかごむらへ出ます。彼れあから岡崎新田五町田おかざきしんでんの峠ちようだを越し、五町田しゆくの宿を出まして右へ付いて這入つて、是から川を渡ります。が、吾妻川には大きな橋が架つて居る、これは橋はし銭ぜにを取ります、これを渡ると後あとはもう楽な道で、吾妻川べり辺に付いて村上山むらかみやまを横よこに見て、市城村青山村あおやまむらに出まして、伊勢町いせまちより中なかの条じようという所ところ

に掛つた時はもう二時少々廻つた頃、木村屋と申す中、食場所
 がございます。表には馬を五六匹繋ぎ、人足が来てガア〜と云
 つて居る処へ駕籠をズツと着けました。

女中「入らつしやいませ」

由「大きに若衆御苦労、今後で飯を食わせるが、何しろ休み
 ねえ……おい〜女中さん、おい女中彼処の畳の上に何だ……黒
 豆が干してあるようだが、彼処を片付けておくれよ」

女「豆じゃアござえませんが、あれは蠅が群つて居りやすので」

由「蠅か……私は黒豆かと思つた、大層居るねえ真黒で……

旦那御覧なさい、此の蠅はどうも酷いじゃアございませんか、ハ
 ツ〜ハツとたちますとまた直ぐに來ます、大變だ」

幸「大ていへん変だねえ、蠅の中へ大きなものが飛込んで来るが、なん

だい姉ねえさん」

女「あれは虻あぶでねえ」

幸「虻……大層居るぜ、螫されると血が出ますからねえ……女中

さん何かあるかえ」

女「左様そうでがんす、何も無ねえでがんすけれども、玉子焼どじょうに鱒

汁じるに、それに蒸松魚なまりの餡掛あんかけが出来やす」

由「え、鱒や蒸松魚のプーンと来るのア困ります、矢張無事に玉

子焼が宜うがす……鱒のお汁それは宜かろう、鱒のお汁に玉子焼

で……貴方召上らぬが一猪口酒いちちよこをつけて持って来て……アハ、一

猪口が分らねえな可笑しい……尤も千万だ……何しろね若衆わかいしが来

て居るからお飯喫まんまべさせて、お酒を飲ましておくれ、若衆は是から山道へ掛るから、酔うとまたいけねえから気を付けて」

女「ヒエーかしこま畏りました」

由「閑静でげすねえ……あんたが駕籠で、私わしが歩くのでお話もできませんが、あの村上山の景色はありませんねえ、どうも山が連つながって居て、あの間にチョイく松が、どうも大きな盆栽でげす、あれから吾妻川の真まんなか中の所ところへずうと一体に平坦な岩つきだが突出して居て、彼処あそこの上へずつとフランケットを敷いて、月の時に一猪口やったら宜うがしよう、なんぼ地税が出ねえたって、一杯に彼あの大岩が押出している様子は好よい景色でどうも……だけれども五町田の橋はし銭ぜにの七厘は二ツ嶽だけより高いじゃありませんか」

幸「だけれども、あのくらいの橋を架けるのだから、どの位の入費だか知れねえ、だが景色は段々離れる方が由さん、好いたつて、実にどうもないねえ、有難い：女中さん早くしておくれよ……えゝ、これから四里八町というから」

由「私わしは馬むまをいたゞきたいが、馬のつかに乗つかつて捉つかまつてヒヨコいく往いくなア好い心持で、馬をねえ……女中さん」

女「ヒエ」

由「馬を一匹、四万まで行くゆのだから帰り馬の安いのがあつたら頼たのんでおくれ」

女「毎めえにちなん日何かえりも行つたり来たりして居りやすから、もう直ねが極いつて居いるでがす、六十五せね銭でがんす」

由「六十五銭せんは高いねえ」

女「高たけえたつて極つて居るのでがんすから、その代り楽でねえ、坂へ廻つてはハア道がハアえらいでねえ、急の坂ががんすから、此処おりましたから折田へ出る道が極つて居て楽でがんす」

由「じゃア姉ねえさん、馬は暴あれねえのを頼んでおくれ、いゝかえ馬てえへんに附ける物があるから、間違まちげえちやアいけねえよ……何しろ虻まっしろが大變で……あゝ玉子焼が出来た、おゝ真白まっしろだ」

幸「白身ばかりは感心だ」

由「じア喫やつてみましょう……これは恐入つたね、中々柔かです末にいきません、姉さん、此の玉子焼は真白だねえ」

女「ヒエ」

由「玉子は沢山入れねえで豆腐が九分で……これは恐れ入ったねえ、豆腐入の玉子焼は恐れ入った、道理で真白だと思つた、豆腐焼、これはないねえ、面白い、これは乙でげす、何うも閑静過ぎますねえ」

三十四

由「いゝや鰯汁の中に人参が這入つて居る、これは感心でげす、牛蒡ごぼうで無い処が感心で、斯ういう処が閑静……旦那何しろ旨い、貴方あんた駕籠の上の葡萄酒をおろ下しましょうか、まア此方こつちを飲やつて御覽なさい、話の種で丹誠なもので、此の徳利の太さ、私が握るに骨

が折れるが女中は苦もなく掴む、感心で、どうもこれは不思議で、表に馬うまが一杯というのは面白い、それで中はお客が只ただ二人、閑静なことじゃアございませんかね……女中さん、これは驚くねえ人參が牛蒡に成りますくらい蠅がたかります、玉子焼へ群たかると豆腐入が今度は胡摩入り豆腐に成ります、何うも宜うがす」

その内に、

幸「女中さんお膳をさげて勘定しておくれよ」

由「女中さん勘定、いゝかえ……旦那あんたは駕籠で私が馬で、

ぶらく、お出かけは何うです、先刻後の伊勢町あとしという処とこに二三軒

女郎屋じょうろやがあつて、いやな島田に結つて、鬢びんのほつれ毛を搔かいて、

色の白いような青いような、眼の大きな、一寸ちよつと見ると若いよう

だが年を取つて居りませ、三十二三には見えたが……女中さん
伊勢町には女郎屋が何軒あるえ」

女「え、御座えやす、もと達磨でがんす」

由「あれは二軒切りかえ」

女「へえ只一軒で、女郎が一人居りやんす」

由「閑静なものだね……やア勘定は幾許になるえ」

女「ヒエ、九十銭若衆が十二せねで、金一円二銭になりやす」

由「申し旦那銭々というのはどうも面白い……六十五せねの馬
はこれかえ」

馬「はいはい」

由「コウ馬士さんどうだい、馬は暴れはせんかえ」

馬「えゝ起ちもしねえが噛いもしねえ」

由「起つたり噛われたりして耐るものか、大丈夫かえ」

馬「大丈夫で、なに牝馬で、大概往復して居るから大丈夫で、へエ」

由「いゝかえ」

馬「さア其処え足イ踏掛けちやア馬の口が打裂けて仕舞う、踏
台持つて来てあげよう……尻をおツペすぞ」

由「おツペしちやア危え、動くよ」

馬「動きやすよ生きて居るから……さア貴方確りと、荷鞍へそ
つか
捉まると馬ア窮屈だから動きやすよ」

由「若衆いゝかえ大丈夫かえ、氣を付けて」

馬「大丈夫だえじょうぶで、此の道は馴れて居りやんすからね、もうハア一

日には何なんかえ返りも往いくだからねえ、此の頃は馬まなこア眼を煩まらつて居

るから、はつきり道が分らねえから静しずかにあるきやんす」

由「冗談じゃアねえ、盲目馬めくらうまでは困るねえ」

馬「盲目でも歩くよ、此の道は一筋道だから心配はがんしねえで」

由「驚いたねえ、盲目馬の杖なし、大丈夫かねえ」

馬「大丈夫だえじょうぶだが、只牛が来ると困るねえ」

由「おいおい牛が何処どっから来るえ」

馬「なアに牛がねえ、米工積んだり鹿そだ朶た積んだりして大概たえげえ信州

から草津さわたり沢さわたり渡あたりを引廻して、四万の方へ牽ひいて行くだが、

その牛けえが帰かえつて来る、牛を見ると馬てえものは馬鹿に怖がるで、

崖へ駈込んだりしやす、たまげて此の間もお客さんを乗せたなり
 で前まえだに谷へ駈込みやアがつた」

由「冗談云つて、人間を乗せたなりで谷川へ駈込まれて耐たまるもの
 か」

馬「なに貴方あんた、滅多にはねえ大丈夫だいじょうぶだが、先月谷川へ客一人打ぶ
 込んだが、あの客は何うしたか」

由「コウ冗談云つちやアいけねえ」

馬「ハイくくく」

と中の条を降りまする、左方ひだりへ曲ると沢渡右方みぎへ這入ると彼かの
 四方の道でございます。是から折田へ一里、折田を離れて下沢渡しも
 へ参ると、是迄中の条から二里でございます。六七年以前より新

道が開け、道も大きに樂になりましたが、其の折は未だ道幅狭く、なだれ登りに掛ると、四方どちらを見ても山また山でございまして、中を流るゝ山田川、其の川上は日向見川ひなたみがわより四万川に落る水で有りますから、トツ／＼と岩に当つて碎ける水の色は真青まつさおにして、山の峰には松柏かしわの大木と／＼に見えて、草の花の盛りで、いうにいわれぬ景色でございます。到頭四万の山口へ参りましたが、只今は車道くるまみちが開けましたので西の方の山岸へ橋をかけまして下道しもみちを参りますが、以前は上かみの方を廻りましたもので中々難所なんじよでございました。

此の山口と申す処にも五六軒温泉宿が有ります、其の他餅ほかを売
つたり或は鮭蕎麦などを売る店屋が六七軒もあります。小坂こさかへかゝ
ると馬士まごが、

馬「もし旦那さん誠にねえお待まちどお遠だろうが、少しねえ荷におろ
して往ゆかなければなんねえ、貴方あなたおりて下さい、おりて何もねえ
が麦湯むぎゆがあるから緩ゆっくりと休んで、煙草一服吸つてまア些ちっとべい
待つて居ておくなんしよ」

由「宜しい、じゃア下りるから、さア」

馬士「さアおりられやすか、腰こし抱かかいてやるから待ちなせえ」

由「大變たいへんだ、まるで病人の始末だねえ、あゝ腰こしがすくんである

けません……やア大層立派な家だが……おかしい、坂下から這入るとまるで二階下で、往来から真に二階へ入る家は妙で、手摺が付いてある……」

馬「嗅ア麦湯でも茶でも一杯上げろよ、中の条から打積んで来たお客様だ……」

由「打積んだは恐れ入った、まるで荷物の取扱いだ」

幸「向に土蔵があつて、此の手摺などの構えはてえしたものだ……」

：驚いたねえ、馬方さんが斯ういう蔵持の馬方さんとは、此……

方は知らぬからねえ、失礼な事をいいましたが、実に大したお住……

居で、二階などが斯うお神楽でもなさるように妙に欄干が付いて……

居りますねえ」

馬「えゝ、是からねえほんすぎ益過になると、近村ちかの者が湯治めえに参りま
 すので、四方の方へ行くいと錢もかゝつて東京のお客様がえらいと
 いうので、大概ていげい山口へ来て這入へえる、此処こゝが廿年前さきには繁昌したも
 のだアね、今じゃア在のものばかりのお客しますからねえ」
 由「驚いた、それじゃア大屋さんだ大屋さんで、馬方むまかたは恐入つ
 た……そう精出したら銀行へ預けきれめえが、金持だろうねえ、
 是から關善といううちまで八丁かえ」

馬「えゝ是から八丁は山道でがंस、關善まで送つて、それから
 歸けえるのでがंसが、御用があるなら關善おらから己の方までそう云つ
 て来れば、中の条の方へ出る用があるから、用を聞きに毎日往ゆき
 ますから、入いる物があるなら四方で買いうと高たけえから、中の条で買

えは砂糖でも酒でも何でも安いものがあるからねえ、買つて来や
 んす、また退屈なら己おらほう方で蕎麦ひいて、又麦こがしも出来るか
 らねえ私わしイ持つて往きやすから、どうせ毎日往くだからねえ駄賃
 はいりやしねえ、馬むまの上へ積えつけていくから、彼処あすこで貴方あんた買わねえ
 でねえ己が持つて来て上げやんすからねえ」

幸「そりやアどうも御親切に馬むま方かたさん何分願います、どうも感
 心なもので、是は少しだがお茶代だよ」

馬「へえ、これは有難うがんす……」

由「もし旦那……内儀かみさんでしようが、結すき髪あげに手織木綿ひとえものの単衣ひとえもの
 に、前掛細帯ちよつとでげすが、一寸品の好よい女あなで……貴方あなた彼処あすこに糸いとを
 くつて、こんな事をして居るのは女房の妹でしよう、好く肖にて居

る、鼻が高くつて眼がクツキリとして、眉毛が濃くつて好い女で
 す、斯ういう処くすぶに燻くすぶらして置くからいけねえが、これが東京の水
 で洗つて垢あかが抜けた時分に、南部の藍あいまん万あわせの袷あわせを着せて、黒の唐と
うじゆす繻子の帯を締めて、黒縮緬の羽織なら何処へ出しても立派な奥
 さん、また商人あきんどの内儀にも好し、権妻てかけにも、新造だつて西洋げ
 んぶく大丸鬚おおまるまげでも好し、束髪そくはつにして薔薇かんざしの簪かんざしでも挿さしたら
 お嬢さま然としたものです、何しろ此の山の中に居て冷飯ひやめしを喫く
 つて、中の条のお祭に滝縞ひとえものの単物たもとに、唐天鷲絨とうびろうどの半襟たもとに、袂たもと
 に仕付しつけの掛つた着物で、縮緬ちりめんごろ呉縞あかゆまきの赤あか禪ぜんで伊香保の今坂見た
 ように白く粉このふいた顔で、ポン／＼はだし跣足はだしで歩いて居てはいけま
 せんが、洗い上げるとよっぱど好い」

幸「悪口わるくちをきゝなさんな」

由「そうですが、妙なもので、山の中にも斯ういう別嬪があるの
でございませうからねえ」

馬「へえ、身支度が出来ました」

由「おゝ来たゝ、馬方さんいゝかえ」

馬「さア乗のかつてくんなせえ、山道だから荷鞍しへ確しかりとつらま
つて、えゝかえ」

と是れからまた馬むまに乗り、駕籠を先に立たせ馬も続き、
平方へいへ着ききました。 關善せきぜん

幸三郎と由兵衛が關善の玄關に着くと、皆迎いに出ます。昨年
わたくほりこしだんしゅうし
 私が堀越團洲子とともに或る御大臣様お供で關善へ参りまし
 たが、只今では三階造りの結構な新築でございますが、その以前
 は帳場より西の方が玄關でございまして、此処に確か十畳の座敷、
いりがわ
 入側付きで折曲おりまがつて十二畳敷であります、ひしかけまど
みおろ
 見下せる様になつて、山を前にして好い景色でございませう。二階
 家で幾間も座敷つぼがございます。其処へ着きますと直ぐ湯を汲んで
 来たから、足を洗つて上り、
 幸「あゝ好い心持だ、おい由兵衛さん、何か忘れ物のないように」
 由「万事心得ました」

幸「若い衆、湯にも這入るだろうが、緩くり今夜泊つて、旨い物でも食わせるから彼方の座敷に居ねえ」

由「よし／＼心得ました、葡萄酒の瓶が毀れるかと心配した、斯ういう処へ来ては何もないからねえ……」

甲女「へえ叶屋でございます、なんぞ御入用なら通を置いて往きますから」

由「なにを」

甲女「叶屋で鰯玉子軍雞も出来ます、醤油味淋もございます」

由「そりやア何か」

甲女「叶屋でございます」

乙女「へえ鈴木屋でございます、何んぞ御用はございませんか、

これへお通かよを上げて置きますから、どうかお取付けになります様、誠に有難いことで、え、鈴木屋でございます」

由「今這入ったばかりで、まア仕様がな」

甲女「叶屋でございます」

幸「そう大勢いくたり幾人も来たつて仕様がな、困りますねえ」

甲女「叶屋で」

由「叶屋でも稻いなも本でも角海老かどえびでも今こんにち日が初しよかい会だ、これから馴染が付いてから本ほん価ねを吐くから、まだ飯も食わねえ、湯へも這入らねえうち種いろく々の物売りに来るのは困るねえ」

幸「私わしは話わに聞いて居るが、料理屋のようなものがあるので、取付けにして貰おうというのだろうよ」

由「もし、また豆腐入の玉子焼などが出来るので……どうも旦那
お茶代を其様そんなに遣らねえでもようございます、此処ですから」

幸「それでも出したものだから……おい姉さんねえ」

女「ヒエー」

由「可笑しな返辞だねえ、面白い……もし旦那でも番頭さんでも呼
んでおくれ、用があるから一寸ちよつと」

女「ヒエー」

由「早くして」

という、やがて番頭がそれへ参りまして、

番「ヒエー」

幸「お前さん御亭主かえ」

番「手前は当家の番頭でござりやす」

幸「はア番頭さんか、当家は何というえ」

番「關善平と申しやす」

由「番頭さんの名は」

番頭「ヒエー與^{よへえ}兵衛と申しやす」

由「成程關善の家に與兵衛ありというのは面白い」

番「左様でございます、皆様がそう仰しやるので、旧来居りやすから」

由「ハ、ハ、……これはいけません、洒落を云つても通じませぬ、

皆様がそう仰しやるなどはこれは妙だ……これはお茶代で、これ

は雇^{やといにんじゆう}人中へ」

番「え、有難うございます、主人あるじが直ぐお礼に出ますので、有難いことで、ヒエ」

幸「何しろお前さん初めて来たので馴れませぬから、また後あとから連つれも来るから宜しく頼みます」

番「ヒエ、明日あすから世帯しよたいをお持ちなさるのでございますか」

由「何処へ世帯を」

番「え、一週間ひとまわりなり二週間ふたまわりなりお席をおきまして、お座敷つぼの

内へつへ竈ついでも炭すみ斗火鉢とりすべて取寄せまして、三週間みまわりもお在いでになれ

ば、また賄まかないの婆ばあも置きました、世帯をお持ちなさいますなら、

炭薪米たきぎなども運びますから」

由「ハ、ア此の座敷つぼへ世帯を：成程疾とうから持ちたいと思つたが、

今迄店請たなうけが無いから食客いそうろうでいたが、是から持ちますからお前店請まへだんせうになつておくんなせえ」

番「御冗談ごじだんばかり、宜しゆうございます」

幸「何卒どうぞお頼み申します、賄まわいの婆さんも頼みますよ、給金きんなどはようがすか」

由「此こ様な処ところへ来て洒落しやれなぞを云つても通じませんので、むだです」

幸「少し口を休めな」

由「只もう私は好い心持で……旦那湯へ一杯這入つて」

幸「己は少し駕籠かごで腰こしが痛いたえからまア先へ這入んねえ」

由「左様ですか、此の温泉はどうしたツてそばからぶくく出る

湯ですから、私が先へ這入ったって汚れるというわけではなし、
他の者も這入るのですから」

と喋りながら由兵衛は湯へ這入りに往きました。

三十七

岡村由兵衛は湯に這入って来まして

由「どうも宜いお湯で、どうもあり難いく、だがねえ少し熱う
ございます、此処の湯は大変熱い様で、一棟の中へ湯櫃が幾つ
もあるのです、向うへまた下駄を穿いて往くと、着物を入れる棚が
あつて、それからしごを三段ばかり下りて這入るのです、心配

なし、気が詰らず、残らず東京の人なし、皆田舎の人ばかりで鬚
があります、男ばかり、女は子供を抱いて這入って居りますが、
芝居の話などはごさいません、只畑の話で、お前さんの処とこの胡摩
は何時蒔きましたか、私わしの処とこでは茄子なすを何時作った、今年は出来
が悪いとか菜漬なづけがどうだとかいう話ばかりして居るので面白いわ
けで東京の人は居ないから話はない、隅の方へ往って湯のはねな
い処ところへ這入って、小さくなって洗うのです」

幸「是は恐れ入ったねえ」

由「だが好よい湯で、塩気があつて透すきとお通とおるようで、極ごく綺麗です、
玉子をゆでて居る奴があるので、手拭てふきに包んで玉子を湯に浸ひめて
置くと、心しんが温ぬまるといふ、どういふ訳わけかと皆みんなに聞くと、黄身きみか

ら先にゆだつて白身が後あとからゆだるといふ、嘘だろうといふと本
 当だと番頭も云つたが、白身はなんともない、きみが温まるので、
 上の方が温あつたまらねえで、心がちゃんと臍へその下が温あつたまるので、心臓
 肺臓などが温あつたまるので、こんな嬉しいことはありません、時にお
 茶代の礼に来ましたか」

幸「未だ来ない」

由「へえ腰あつたが温まり草くたぶれ臥ぬが脱ぬけます、這入つてお出でなさい」

幸「初めてで勝手が知れぬから、代りばんこに氣を付けて、湯場ゆば
 は危けん険のんだから」

由「そう湯場ゆば働たらきといふのがありません、湯場を働くに姿を変えて
 といふのは河竹かわたけさんに聞いた訳ではありませんが、芝居せりふの台詞

にもありますから氣を付けて、何かゞ面白いからうっかり致しま
す……」

婆「こゝな処に世帯しよたいをお持ちなせえやんすか」

幸「びつく悔りした、何んだえ」

婆「こゝな所とけえ炭斗すみとりを置きやすが、あんた方又洗あらいもん物でもあ

れば洗めえつて参りやすから、浴衣でも汚れて居おれば己が洗濯せんたくをしま
す」

幸「お前何だえ」

婆「賄ばっアいの婆で、あんた方のお世話せわアするからお頼み申しやんす」

幸「頼みやんすは面白い、勝手を知りませんから万事お前まかに委せ

るからよ、お前何歳いくつだえ」

婆「私わしは六十一になりやんす」

由「フウ田舎の人は丈夫だから此の年で働けるのです、これから見ると富とみぞう藏ぼアの婆ばアさんなどは五十八で身体が利かねえつて、ヨボくして時々漏もらしますから、彼あの人の事を思えば達者だ……是は汚きらいいが茶碗は清潔きれいなのと取換えておくれよ、汚きらいい物は見ぬ方が宜うございます、見ぬ事清してえから……お湯へ這へえ入つてお出でなさい」

幸「忙せわしいね、お前茶を入れる様ようにしておくれよ……」

由「婆ばアさん湯沸ゆわかしを借りて」

婆「なに」

由「湯沸」

婆「ええ」

由「ゆわかしだよ、分らねえなア、鉄瓶でも薬罐でも宜いから小さいのを借りて、急須へお湯をさす様に、宜いかえ分つたかえ、どうも……一寸ちよつとも通じねえのは酷ひどいな……それから菓子を入れる皿でも蓋が出来るような蓋物ふたものを持って来て、宜いかえ、菓子器をお願いだから……宜しく万事此処へこう置いて……お茶は鞆うちの中にあります、茶が変わるといきませんから……ハツくくく面白面白いどうも……もう御膳ごぜんが来るよ、早いねえ、もうそろく灯あ火かりが点つく、早いものです、膳が来ました……旦那だんなに何か」

番頭「これは主人おやかたが左様そう申しました、今日こんにち日つきお着つきの事ことでございませから、折角せきやく世帯せたいを持って是これ彼あれとお取り遊あそばしても、もう好こい

お肴もございませんから、今晚だけはこれで御辛抱なすつて、明み
ようにち

日 は又宜しいお肴をお取り遊ばして」

由「宜しい」

三十八

由「あなた湯へ這入つても一いちどき度に這入つちやアいけません、私

が伊香保で何度も這入つて逆のぼ上せてね困りました、初めは面白い

から日に七度も這入つて鼻血が出ました」

幸「左そん様なに這入るから悪いや……お平ひら腕に奇妙な物が這入つて

るぜ」

由「へえ、お平椀の下に青物が這入つて麩ふが切つてある、これは分つた蕨わらびだ、鳥肉とりが這入つて居る……お汁つけに丸まツちい茄子のお汁は変だ……これは何んで」

幸「なにを」

由「皿に切つてありますが、これは東京で云えば鯛の浜焼が付くとか何とか云うので、何もなければ玉子焼だ、何だろうか、薄く切つたものが並んであるが、東京の者と見て気取りやがったんだ、何だかこれを一つ食やつて見よう……婆さん灯火あかりを早く此処へ持つて来て……何だ奈良漬の香物かうこか、これは妙だ、奈良漬の焼魚やきもの代りは不思議、ずーツと並べたのは好いいな」

幸「此処は大層てえそう香の物たつとを貴たつとむてえから、奈良漬を出すのは東京

の者へ対しての天狗なんだよ」

由「何だか御法事の気味がありますからね、奈良漬にお汁つけの油あぶら

揚げは恐れ入った」

女「え、鈴木屋で」

由「また来た、何んだ」

女「え、枕を持って来やした、何卒どうぞお買いなすつて」

由「枕をどうする」

女「枕、あなたがた貴方方がなさる枕」

由「此の宿屋では枕がないのかえ、新しい枕をかうのかえ」

女「へえ」

由「幾らだね」

女「左様です、二ツで十四銭せねに致しやす」

由「高いねえ、此の枕は一寸縁日ちよつとで買うと安いが、これは小枕が小さくツて、これじゃア出来やしねえが、何うしてもこれは買わなければならねえのかえ」

女「十四銭せねは高たかかアござえやせん」

由「この小枕は高たかまがはらはらに紙が一枚は酷ひどいねえ、これは酷ひどいが、まあいゝ、これを買つても宿屋で夜具を出すから枕も付ききそうなものだ」

女「えゝ宿屋のは古うございますから、若もし又お帰りの時お邪魔なら私が方ひけへ引を立て取りますから」

由「幾らに取るえ」

女「左様でがんです、一つまア七厘宛に取りやす」

由「じゃアまア買つて置きますよ……七厘ばかり取つてお前の方へ売つても詰らねえから……申し旦那、これを買つて東京へ土産に持つて歸つて、是は四万の名物くびいたまくら首痛枕とか何とか云つて提ゆげて行くのは洒落です」

とこれから酒を飲み御膳を食べにかゝる。其のうち又由兵衛がおしやべりをして居ると、しとやかに障子を明けて、

女「御免なさい、私は鈴木屋でございます」

由「鈴木屋さんか、先刻さつきから」

と見ると前の女とは大違い、年の頃は廿一二でございましょう、色のくつきりと白い、品の好いい愛敬のあります、何うして此こ様な

山の中に斯ういう美人が住すまうかと思おもうくらいで、左様そんな処へ参ると又尚更目に付きますから二人とも見惚みとれて居ります。

女「お通かよをこれへ置きますから、若しも御用がございますなら仰しやり付けて下さいまし、度々たびく出ますでございますから」

由「へえ宜しゆうございます、是非戴きます、貴方のなら何でも戴きます、何がございます」

女「はい、鳥と鱒鍋ができますので」

由「それもよし」

女「玉子焼」

由「それもよし」

女「鯉こくもございます」

由「それも」

幸「其そんな様に逃えてどうする」

由「まあ逃えやアしませんかねえ……何か外に肴が出来ますか」

女「アノ鰯やまめが出来ます」

由「寡婦やもめ、それは有難い、やもめの好よいのはないかと心掛けて居いるので」

幸「お前の隣のは寡婦じゃアねえか」

由「ありやア西洋洗濯を此の頃覚えた六十八歳という寡婦の大博士、毛が生えて天上する、ありやアいけません……」

幸「じゃアお前さんあと後でその鰯を持って来ておくれ」

女「へえ誠に有難うございます……」

と云いながら静かに障子をしめて出て往く。

由「旦那何でしょう、どうもお辞儀の丁寧だつてえないねえ、様子がずっとどうも、あのお辞儀の仕方は此方が自然に頭が下るくらいで、丁寧で、何でしょう」

幸「何だか知れねえが只者じやアねえ」

由「山の中へ逃げて来たのでげしよう」

幸「何か仔細がある事だろう、關善の親類でもありはしないか、鈴木屋の身寄か、士族さんのお嬢さんの果だろう」

と云つて居る。二度目に鰯と鯉こくが出来たというので岡持へ入れて持つて来る、是から酒をつけて橋本幸三郎が此の婦人の身の上を問います、これは後に申上げます。

三十九

さて岡村由兵衛は頻りに幫間口でお酒が流行つて居ります。

由「え、旦那唯今見た女は何うしても東京の言葉で、女は滅法好くつて、旅出稼と云つて湯治をしながら稼ぎに来る女は夥い事あります、彼の位えなのは珍らしい女で、丁寧で口が利けねえのは余程出が宜いんですねえ」

幸「余程品が好いが、どういふ身上か彼の位の女は沢山無い」由「有りません、東京を立つて伊香保へ来て、伊香保から此方へ来るまでにありません、伊香保のお隣室の奥様ねえ、彼れは又品

が違いますが、此方はあれよりもまだ年が往かないようで、伊香保の奥様も明日あした来るか、又今夜来るかも知れませんよ」

幸「お前又な何とか云つたのか」

由「え、云つたので、峰公にちゃんと話したので」

幸「お前悪いよ、此方こつちがお母様つかさまと一緒に宜しいが、男ばかり

の処へ女を呼ぶのは悪いから止しねえ、奥様然として居るが、殿様でもある者で知れでもすると悪いよ」

由「あれはもう何もございせんよ、主は無い、主なしの栄太えいたろ楼う、彼の女あは無いので」

幸「無い、だつて分りやアしめえ」

由「何んだつてお付の女中と伊香保の茶見世でお茶を売って居た

村上の御新造が、お嬢様〜と申すのでしよう」

幸「あれは、お少いちいさ時分に一つお屋敷に居てお乳を上げたので」

由「お乳は松でも笹巻でも此方こつちは構わねえ、彼りかやアもう確かに亭主はありませんよ、御婚礼は済みませんが、是から追々御婚礼にもなりかゝると、其処に苦情があつて、何うとか斯うとか話したと聞きました、向山の玉兔庵で申しました」

幸「だけれどもお前無理に呼んでは悪いよ」

由「悪いたつて後あとから峰公が引張つて来るので、お付の女中は忠義者でしょう、一緒にゆ往きたいが、女二人であなた方と一緒に参つては、ひよつと人が訝おかしく思うといけませんから、後から参ると云うので、病身で時々癩おこが発ると云うが、その持病を癒そう為

に伊香保へ来て居たのだが、貴方に一寸岡惚れでしよう、彼あの新造しんぞうがサ」

幸「止しねえ」

由「そこは僕が心得て居ますよちゃんと認めを付けて居ます、貴方の傍そばに……居ると気分がいゝので、貴方のお顔を見るとお癩も紛れて居るので、くよ〜と思うが病の根で、病気だから何うかお邪魔ながらお連れ申したいと云う忠義の心から、堅い女中だけれども側に連れて来たい念が一杯あるから来ますよ」

幸「悪いよ」

由「悪いたって構やアしません、あれが来て今の別嬪が来て落合ごてえしつたら面白いございましょう、だが御亭主ごてえしが無ければ町人だつて

身分が宜ければ縁付かたづくという、其処は又相談ずくでねえ、もし奥様が貴方の処へ嫁に来ると云つたら何うなさるえ、それとも鯉こくを持って来る女が好うがすか」

幸「ウ、そんな事を云つても分りやアしねえよ」

由「分らないたつて向うが奥様で此方こつちは丁度ごん権かたの方で」

幸「止しねえよ、詰らねえ事を云つて、まア湯へ這入つて寝ようと云うのだが、腹が北山になつて草臥くたびれたから酔つたよ」

由「貴方を酔わしたい、貴方は酔わないと真面目でいけません、ズーと酔つたつて正氣になつて、助平根性を出してお仕舞いなさい、旅では構やアしません」

幸「止しねえ……まアくそんなにいいはいけねえよ」

由「だがねえ、唯後からくつついて来るなア可笑しいねえ」

幸「可笑しいたつて悪いよ」

由「だがね真面目で一生懸命に来るので、変な事があるもので」

幸「旧^{もと}お出入りをしたお屋敷の御妾^{ごしやうふく}腹と云うが、けれどもお眼

に懸った事もねえが、何んだかお可愛そうな様な筋^{すじ}合^{あい}があるの

だよ」

由「お可愛そうだつて何んだか知れませんが、姑^{しゆうとめ}の意地の悪い奴、

叔母さんか御隠居さんが在^あつて、拗^{ひね}った事を云つて、そうお茶

をつぐからいけねえの、そうお菓子^{かし}を盛てはいけねえ、赤いのは

上へ乗つけて又其上へ乗つけては赤いのが染^つくからいかねえと

か、種^{いろく}々な事を云う奴があるので、それが種になつて段々お癩

になつたのだから、お癩を癒そうてえので……お癩てえば今来た娘も癩持に違えねえ」

幸「何故」

由「なぜつたつて此処の湯は癩に宜しいから、癩を癒しながら働きて来て居るので、働きと云うような身分じゃアないが、只病氣には敵わぬから余儀なく働き、運動かた／＼斯うして居ると云うのではありませんか」

幸「そんな奴があるものか、鯉こくを持って来るぐらいに運動てえ事があるものか」

由「けれども……オヤ是れはお出でなさい」

女「誠に遅くなりました」

四十

由「おや先刻さつぎから待つて居ました、遅くつても結構、鯉ここく結構、これは不思議で」

女「これは誠においしくは御座いませんが、召上るように」

由「此方こちらの家うちからかえ」

女「いゝえ鈴木屋からで」

由「それで、鉄火煮は恐れ入った……貴方の様な別嬪にお酌をして貰うのを楽しみにして来たので、貴方の居るのを知つて来たので、貴方が居ないと伊香保から此処まで来はしません……貴方苦に

がわらい

笑「してはいけません、何うもお品が好うがすな、何か云うと

こう苦笑いなどは恐れ入りますねえ」

幸「姉ねえさん、此の人はお饒舌しゃべりで失敬な事を言うから腹ア立つちや

アいけません」

女「どう致しまして」

由「いや何うも此の鯉こくなどは……中々どうも恐れ入りましたね」

幸「鯉こくなどは此処へは良いのが来る、信州から来るのは不いけね

良えのがあるという……これは結構……ウム鯉こけの鱗こけなどを引いた

のア不思議で、鱗ちっが些ちっとも無いねえ」

女「へえ、これは鱗こけは引いてありますから」

由「鯉の鱗なしは軟やわらかい、羊羹ようかんをしゃぶったようで、鯉の鱗なしは不思議で、こりやア頂戴……鉄火煮は好ようがす……ウム、ゴソくするのは何んです」

女「あの鯉の鱗を煮ましたので」

由「へえ、鯉の鱗を引いて鱗ばかり煮たの……へエこりやアどうもないね、へエこりやア不思議で、鱗ばかりの鉄火煮、舐しゃぶって居ると旨いが、醤油したじツ気が抜けると後はバサくして青貝を食って居るような心持で不思議な物で……姉ねえさん一寸ちよつと此処に居て遊んで」

女「はい有難うございますが、余り長く居りますと厳やかましゆうございますから、又御用がございましたら」

由「まあくく一寸おいでなさい、今旦那がね貴方のお身の上を酷く心配して、お品と云いお行儀と云い、裾捌きすそさばと云い何うも抜目の無い美しい嬢さんだが、どう云う訳で山の中へ来て居ると云うのでね、旦那が大変心配ですが、貴方は東京ですな」

女「はい東京でございます」

由「どういふ訳で」

女「はい、いえなにもう種々いろく深い訳があります」

由「へえ、こりやアどうも深い訳があるに違いないのでしよう、どうも此の鯉の鱗こけばかりを煮て出すなんてえのは恐れ入りました、不思議で、どういふ訳で、えゝ」

女「なにもう種々」

由「そこをお聞き申したいので、姉さん困りましたねえ」

幸「これは真ほんの心ばかりです」

由「旦那がこれを」

女「誠に恐入ります」

由「構わずお仕舞なさい、落すといけませんから、仕舞い悪いも
のですが帯の間へ……宜しい私が挟んで上げましょう」

女「いえ、いけません」

由「どうも恐入った、手を付けて帯の間へヒョイと云う、これは
遣りたがるからねえ、へエー、どうも有難い」

幸「姉さん東京は何処、私共も東京で」

女「はい、東京のお方と見ますと誠にお懐かしくって、つい何う

もお座敷へ参りましても、東京のお方だと、種々御様子を承わり
とうございますから、遂々長く居ります」

由「こりやアそうでげしよう、伊香保でも、東京は違ひはしませ
んか、観音様は矢張彼処あすこにありますかッて聞いた人がありました
が、あれだね、どうも妙なもので、此処は旅で、旅で会うのは親
類で無くつても落合うと親類のような気がして、懐かしいもので、
変なもので、伊香保なんぞへ往いつて居ると交際つきあいが殖ふえる、帰つて
見ると先達せんだつでは伊香保でと云うので、麻布あさぶの人が品川しながわ、品川
の人が根岸ねぎしへ来て段々縁つなが繋がり、お前さんの処へ娘を上げまし
よう養子に上げましようなどと云つて、親類がこんがらかる事が
あります、湯治場は一体親類殖ふやしの処で、貴方は東京は何方どちらで、

何か訳があるのでしよう、え、秘かくしたっていけません、何どんな山の中でも思う人と添そうならばと云う、これは当り前で、吾妻川で布などを晒さらして、合間に鯉さくらこくの骨を取って種々な事をなさるんでしよう」

女「そんな訳で来たのではございません」

由「どう云う訳で」

幸「止しねえよ：貴方お屋敷だねえ」

女「はい誠に不粹ぶいきもの者でございます」

四十一

幸「私もお屋敷へお出入をした者で、大概お屋敷は存じて居りますが、貴方の御様子は御家中でも無いようですが、御直参ごじきさんかね」
女「はい」

と段々聞かれ、ば聞かれるほど胸が迫ると見えて、彼かの女は下を向いて居りますと、膝へバラ／＼涙を落します。

由「旦那……少しお泣きのようだから、こんなことは深く聞かれませんが、此処で貴方癪でも起されると旦那が押すような事が出来ず、峰松は今こんにち日は居りませんから、二人で間に合えば宜しいが……御心配と見える」

幸「どう云う心配で」

女「はい……兄が放蕩で、私は田舎の事はさっぱり存じませんか

ら田舎へ連れて往つて、良い処へ奉公をさせる、却かえつて田舎には豪農や豪商があるのだからと申しまして、私も東京に居りまして知る人に顔を見られるも、恥かしゆう存じますから、そんなら田舎の奉公をしようと申しまして、宇都宮うつのみやへ参りますと、私わたくしは兄に欺だまされまして置去になりました」

由「酷ひどい兄あにさんで……旦那酷いじゃアございませんか、お兄様がどうも……原の中か何どつかでしょう」

女「いえ何、イエもうアノ……これで宜しゆうございます」

由「これで宜しいたつて、言いかけて止やめてはいけません、構かまわないから後あとをお聞かせなさい是非……まアお坐りなさい」

幸「お氣の毒なわけでねえ」

由「え、貴方、どう云う訳で」

幸「失礼ながら何んですか、お兄い様は矢張やっぱり士族様か、違つたお

兄い様かえ」

女「いえ眞実の兄でございます」

由「どうしてお妹いも御ごを宇都宮へ置去に、何ですか宿屋かえ」

女「いえ、私はさつぱり存じませんが、往來の方か

ら這入りませんで裏路うらみちから這入りますと、広い庭がございま

て、それから庭伝いに座敷へ通りまして、立派な席へ参つて居

ます中うちに、アノ表の方へ参つて掛合を致して、私をソノ或あるところ処

へ、なんで、質入れに致してお金を沢山借りて、兄は表から逃だしぬ

亡けを致したのでございます」

由「こりやアどうも酷うごすね、貴方を質に入いれて流す気ですね、酷いこと」

幸「どうも酷い事をしたものですねえ、そりやアまア貴方も恟びつくりなすつたろう、後あとで勝手も知れず」

女「段々聞きますと宇都宮で娼妓つとめをするだけの証文を貼つて、アノお前も得心の上で証文は是れ〜で、金も五十円兄様に渡したから何んでもと申されますから、私も恟そんり致しまして、其様な事は出来ません身の上でございまして、老体の母もございますから、母に相談の上に致さんければなりませんと云つて、十日のあいだに情を張りまして泣き明して居りました処こゝが、此家の關善さんが日光からお歸りに宇都宮へお泊りで、段々様子をお聞きなすつて、

気の毒な事と御親切に五十円を貰いで下すつて、關善さんに連れられて参つて、お手伝を致して居りますが、とても宿屋奉公では五十円と云うお金は返す事は出来ません、鈴木屋さんで人が足りないから御祝儀も貰えるし、そうしたが宜かろうと申されませんが、關善さんと鈴木屋さんと両方で稼ぎを致しても五十円のお金では幾年此処に奉公をして居りましたら返せますか、承われれば夏ばかり繁昌致しても、冬の中は遊んで居ると申しますから、中々お金の返しようもございません」

幸「それはどうも、で其の東京にお兄いさんが逃げてしまつても、お母様がお在なさるか、お母様はさぞお驚きで」

女「母はもう六十二になりました、母はアノ悔りいたしまして身

体も大分悪くなりましたが、此方より手紙を出しましても向から
 参ることも出来ませんで、此の頃は兄が諸方の借財方に責められ
 まして、僅かばかりの夜の物諸道具も取られまして、此の頃は煩
 つて」

由「へえ、どうもあるねえ、一度ね、私は伊豆の網代へ行つたこ
 とがある、其処に売られて来た芸妓は、矢張叔父さんに欺され
 て娼妓にされまして来たと言うので、涙を落しての話で有つたが、
 それはお気の毒な事だねえ、左様でげすか、お屋敷は何方でござ
 います」

女「屋敷の名前などは親共の耻になりますから、それだけは御免
 遊ばして」

幸「ハ、それじゃアお聞き申しますまい」

由「旦那、そんな遠慮をしてはいけません」

幸「それでも耻になると仰しやるから」

四十二

由「貴方、旦那が御親切だから貴方の身の上を心配して、お名前をお聞きなさるので、貴方は親の耻になると云うは御ごもつとも尤ただだけでも、何もこれは決して言いませんよ、誰が聞いても……私わたしは随分お饒舌しゃべりだが、旦那むかに対えわしば私だつて言わぬと云つたら決して言いませんから、仰しやい身の上を、旦那すがにす縊がれば何うにか成る

かも知れません」

女「有難うございます、屋敷は旧麻布もとあざぶの二一本榎にほんえのきでございます」

由「麻布二本榎え、何処、六本木と云うのはあるが、六本木の方でありますか」

女「いえ二本榎で、瀧川たきかわさきよう左京と申す者の娘で」

幸「え、アノお側を勤めた瀧川さん、千五百石も取った家のお嬢さん……」

由「え、これは恐れ入った、失礼でございます千五百石も取った方の、私などは前ぜんからいまだに貧乏だから些ちっとも変りませんが、只貧乏慣れている処が不思議で、少しも身代は開けないのだから、どうも恐れ入ったわけです」

幸「わたくし私は瀧川様へお出入をした事もあります、まこと真に貴方は瀧川様のお嬢さんでございますか」

女「はい、決して神かけて嘘は申しません、どうぞ此の事はくわ委しくまだ大屋様へは申しませんから、どうか内聞になすつて下さいまし、東京のお方で御親切に仰しやつて下さいまして、お懐かしから迂濶うっかり申したので、どうぞ御免なすつて」

と娘は胸一杯になりました口も利かれませんが、おろくくして居ります。

幸「お前さんは幾いくつ歳で」

女「はい、廿一でございます」

幸「お気の毒だねえ、どうか貴方を五十円で失敬ながら身請をし

て上げたいと存じます、お母さんが御病気でお在ないでさる事ならば、私が關善へ話をして五十円の金を出したら、東京へ連れて帰つてお母様に会わせる事も出来ましょう」

女「はい、それが出来ます事なら……」

由「旦那、私も少し助けますよ十分の一……一度にはどうも出来ませんから、日掛ひがけに追々入金をいたしますが、どうか身請をして上げて下さい」

幸「關善さんへは帰る時話をして、今パツと話すと面倒だから……それから貴方の身の上だけはお母様つかさんにお逢わせ申しますが、お母様つかさまは矢張東京にお在いででございますか」

女「はい唯今では小石川こいしかわ餌差町えさしまちに居ります」

幸「宜しい、屹度連れて往きます、身請を致します」

女「あの、本当で」

由「本当だつて心配なし、どんな事をしてても虚言は大嫌いの旦那さまで、十二時に此処へ来い、御膳を食べさせると云うと整然とお膳が出て居るので、御心配ない……此方も感じてホロリと来ますねえ」

女「有難うございます、私は夢のような心持で」

由「旦那……お手水ですか、直き突当つて右の方です……だがね姉さん、彼の旦那様と云うものは御新造様が無いのですよ……アレサ実は御新造さんは三年前に亡なつてお独身でおいでだが、貴方善いたつて金満家でありますから、貴方がお出でなさるよう

な事があればお母様ぐるみ引取って、生涯安樂でげすが、何うで
す」

女「其そん様な事は」

由「其様な事だつて、それが肝腎なので、ウンと仰しやい、男が
好よくつて、ちよいと錆声で一中節が出来る、それで揉むのが上手
でお灸を点すえたり何かするので……」

女「私は実に夢のようでございます」

由「夢見たいですが、是れがさめない夢です……後からまた夢が
来るので……今夜はねえ何うかして此処へ入らっしやいまし、寝ね
就ついた処へ私が周旋致しますから」

女「夜出ますと叱られます」

由「誰たれに」

女「あの大屋さんに知れると悪うございます、橋きわの際がの瓦斯がすが消えますと宿屋の女つぼが座敷へ参るはやかま厳かましゆうございます」

由「壺やかまツてえのは此処ですか、厳やかましいなんて生意気な事を云いますね、いゝじゃア御座いませんか、貴方を身請して往いくのですから、大屋が何んたつて構やアしません、大屋が云つても差配人が苦情を鳴らしても何うでもしますから宜しいではありませんか、貴方心配はございませんお出でなさい、ちよいと、まんざら醜わるい男でもございますまい、ようがしよう様子が、お厭かえ……ハア
くこれは恐れ入りました」

といつてゐる処へ幸三郎が便所から帰つて参り、

幸「何を掛合つて居るんだ」

由「フハア……掛合筋があつて誠にハヤ貴方、手水を長くして居らつしやると好いのに」

女「あの私は又参ります」

幸「貴方又入らつしやい、証拠でも何でも上げる、決して虚言は吐きませんよ」

女「有難う存じます、御機嫌宜しゆう」

と嬉しそうな様子で帰りました。

由「どうも御機嫌宜しゆうと云つて、手をついて小笠原流で、出這入に御機嫌宜しゆうなんてえ様子は無いねえ、此処の女中などは、ガラリピシヤ用はねえかなんてえ山家やまがの者で面白おもしれえが、彼あ

女れア且那何処へも行き処がないので、可愛相で、彼女はちよいと
 様子が好いい、貴方の傍へ置いて権妻ごんさいと云つても奥様と云つたつて
 も決して恥かしくございませぬね」

幸「そんな事を云つたつて年が違わア」

由「年が違うたつて何も構やアしません、此の間も六十七になる
としより老人が十七になる女房を貰つたが、世の中が開けたから構やア
 しません、貴方は堅過ぎるから」

幸「馬鹿を云え、可愛そうだからよ」

由「其処をなんして一寸可愛がつて、貴方の手生ていけの花にしてお
 遣りなさい」

幸「馬鹿ア云うな」

とはからはず機んでお酒を飲んで寝ましたが、さてお話あと後へ返りまして。

四十三

丁度其の日に峯松が万事都合好く話を致して、彼かのお藤と云う隣座敷のお客を車に乗せて引出しまして、伊香保の降り口から一挺車を雇いまして、女中を乗せて渋川へ下りて、金子へ出まして、金子から橋を渡り北きた牧へ出まして、角屋かどやで昼ひる食しょくをして、余程おく後ごれました。それから、男子村おのこむらへ出まして村上むらかみへかゝりまして、市城いちしろから青山伊勢町あおやまいせまち中の条へ掛ると日は暮れかゝりま

して、木村屋きむらやで小休みに成りますから十分手当をして遣り、車夫も疲れた様子だから車を取換えようと云うが、是非四万まで行きゆますと云うも十分手当をして遣りましたからでございませう。酒の機嫌で遅くはなつたが十時までには屹度引張るからと、峯松も疲れては居るが親切者、早く往つて逢わせようとガラ／＼／＼／＼／＼／＼車を挽ひいて折田村まで一里ばかりも参りますと、どつぷり日は暮れて、木の間隠れこまに田舎家の灯ひがちらく見えまして、幽かすかに右の方は五段田ごたんだの山続き、左は吾妻山、向うは草津から四万の筆山、中を流るゝ山田川の水勢は急でございまして、白さい茨かち瀑だきと字あざないたします、本名は花園はなぞのの瀑たきと云う巾の七八間もある大おお瀑おたがドードツと岩に当つて砕けちる水音。林の蔭に付いて下さが

る道があります。気味の悪い処にさいかち橋が架けてあります。これを渡ると直ぐ山田村、近道で其の小坂の処に庚申塚こうしんづかがあります。そこまで来ると車を下おろして、

峯「若わか衆いしゆ 大きに御苦労だのう、骨が折れても急いで遣つてく
んねえな、十時までに中の立場たてばまで往いこうじやアねえか」

車夫「何しろ昨日きのう沢渡までの仕事で、甚えらくバートルから、女客おんな
でも何うもとても挽けねえよ」

峯「挽けねえたつてお前どうするんだ」

車夫「此処わけえしゆで若衆わかしゆ暇ア貰いてえものだ」

峯「戯ふざけちやアいけねえじやアねえか、此処まで来て、此処じや
ア立場たてばも無ねえ、下沢渡へ別れ道の小口こぐちまで往いきねえな、彼あすこ処へ往い

けば又一人や二人帰り車も居るだろうから、此処じゃア何うもしようがねえやな」

車「どうもしようがねえたつて、挽けねえものア仕かたがねえ、今朝から渋川の達磨茶屋で疲れて寝て居たんだ、其処を帰つて又来たが、身体がバーテルでどうも……」

峯「馬鹿にしちやアいけねえ、そんなら何故中の条の木村屋で左様云わねえ、木村屋で挽けませんと云えば他の車を頼もうじやアねえか、からかつちやアいけねえぜ、東京者だつて東京ばかりの車を挽くんじやアねえ、此地え来て渋川で一円に一升の仲間入をして居る峯松だ、大概にしやアがれ、馬鹿にするな」

車「何だ峯松だか荒神松だか知んねえが、怖くもおつかなくもね

え、挽けねえんだ、何を云やアがる、なぐ撲るぜ」

峯「なに撲つて見ろえ……」

岩「まア峯さんお待ちよ、私ア歩くよ……怪けしからんよ、こんなものに構つては損だからお止しよ」

峯「構うたって、そんなら中の条で云やア何うにでもなるに、人を馬鹿にしやアがつて、女連だと思つて脚あしもと二元を見やアがつて」

岩「まアく好よいよ、鞆こつちを此方へ下してね」

峯「挽けなけりやアそうと早く云えば好いいに……」

岩「そんな事を云わずに、私が困るからよ……挽けなけりやアさつさとお出で」

車「お、往いかねえで何うする」

峯「なに、生意気な事を云やアがる」

車「何が生意気だ」

峯「なに」

岩「お止しよ、峰さんく」

と云う中うちに彼かの車夫は折田おりたの方へガラ／＼／＼／＼／＼と引

返しましたが、道中には悪い車夫くるまやが居ります。

車「容さまア見やアがれ」

峯「なに」

岩「お前おからかいでないよ」

峯「面ア覚えて置け」

岩「まあくお止しよ」

峯「詰らねえ事を云やアがって、脚元を見やアがって、此処まで来て挽けねえなんて、酒え飲まして置いて手当も遣つて居るので、中の条だけの賃は遣りましたが、それから先の賃は遣りません、あいつ彼奴もむだつびき無駄挽をしやアがって……どうも済みません」

岩「私だけは歩くから好よいよ……お前さまはさぞお厭でございましてらう」

藤「私びっくは恟りして、怖いから何うしたら宜かろうかと思つたが、岩や、お前歩けるかえ」

岩「え、私はもう宜しゆうございます、二里や三里は歩けますからお前様さえお乗せ申せば宜しゆうございます」

藤「山道だよ」

岩「いゝえ宜しゅうございます、歩けますから」

藤「お前疲れると」

岩「いえ大丈夫で」

峯「まア一服遣りましょうから、もう是からは遠くもねえ道でござえますから」

藤「峯松さん、さぞお疲れで私のような者二人を連れて来てお厭でしよう」

峯「私は^{わっち}心配な事はありませんが、まア早くお連れ申して旦那にお会わせ申そうと思つて、私も骨を折るのでどうか：へえ」

マツチを摺つてパクリ／＼と火をうつし烟草を喫^のんで居ながら、

峯「実はねえ草^{くたぶ}臥れました」

岩「さぞお疲れだったろう、貴方にも種々いろくお世話になったから、
どのようにもお前様に願ってお礼も致します、誠に御親切なお方
だと云ってお喜びで」

峯「いえ、もうお礼も何も入りません、旦那も待つてるものだから早くお会わせ申してえと思つて何したので……え、貴方、もしお岩様え、礼を為しようと仰しやるなら……」

岩「はい」

峯「私わっちは、あの誠に申し兼ねましたが、折入つて願いたい事がありません」

岩「どんな事か知らないが、草くたび臥れたらまた後あとへ戻つて車夫を雇つても宜しいよ」

峯「いえ、そんな事じゃアございません、私わしは誠にねえ身分に合わねえような事を申すようですが、伊香保にお在いでなさる時分から、お藤さまと云う此の奥様に属ぞっこん根惚れて居るのでがす、どうか□□□□云う事を聴いてお貰もらえ申したい」

と云われてお藤は恟びつくりして後うしろの方へ下りますと、お岩と云う女中は顔色を変えて、

岩「な、何を云うのだえ」

峯「え、正直なお話でございますが、此方こつちア高が車くるまひき挽ひで、元

は天下のお旗はたもと下御身分のあるお嬢様に何うの斯うのと云ったつ

て叶わねえ事と知つては居りやすがね、貴方も武士のお嬢さまで

みのじょう

身性みのじょうの正しい女なら又諦めもつけやすけれども、橋本幸三郎

と云う人に逢いてえと思えばこそ、夜道を掛けて四万村まで、此

の物すごい山の中をお出でなさるからにやア満更色気の無えお方

でもござえやすめえ、□□□□□□□□□□、其の美くしいお嬢

さまを□□□□□□□□□□樂しみに此の山道を来たのです、□□□□□

□□□□□□□□□□、もしお岩さん、取持つておくんなせえな」

岩「まア呆れた事をいう奴じゃ、女と侮りあなど身分も弁わえないで、仮た

令御新造様はお弱くても私が付いて居るからは……汝てまえたちに指で

もさゝせる氣遣い無い、兎やこうすると許さんから左様心得ろ」

とて懐より把り出したは、と 旧弊きゆうへいであります故小さい合口を

隠し持つて居ますから、柄へ手を掛けて懐から抜きにかゝると、

峯「ナニ何をしやアがる、刃物三昧をするからア元は旗下の嬢様

とかお附の女中とか、なぎなた 長刀の一手ぐらいは知つても居ようが、

高の知れた女の瘦腕、うぬら 汝等に斬られてたまるものか、今まで上手

を使つて居たが、こう云い出したからは己も男だ、□□□□□□□□

□□□□□□□□

岩「どうも呆れた奴、てごみ 手込にすれば許さんぞ」

峯「どうでもしやアがれ」

岩「どうでも」

と合口を抜いて飛付くと、車夫の峰松はよけながら後あとへトンノ

くく」と下りると、後からズーツと出た奴は以前の車夫でありま
す。これは渋川の杓八もくと云う奴で、元より峰松と馴合つて居りま
すから脱はずしたので、車を林の陰かげに置き、先へ廻つて忍んで居りま
したがゴソ／＼と藪やぶ蔭かげから出て、突然お岩の髻たぶさを把とつて仰
向けに引摺り倒しました。

岩「あれー何をする」

と飛付いて参つた時、これを見て驚きまして彼かのお藤は

「あれー」

といつて逃げにかゝる。

峯「逃がすものか」

と飛付こうとするを見て、お藤は逃げるも真ま暗くらがり、思わず

崖を踏ふみはず外してガラ／＼と五六丈もある山田川の渦巻立
 った谷川へ、彼のお藤は真逆さまに落ちましたが、これは何様
 な者でも身体が微塵みじんに碎けます。

峯「どうした杳八」

杳八「なんだ、己が横ツ腹ア蹴たら婆アおつ死んだ」

峯「大きに御苦労だ、何しろ惜しい事をした、肝腎たまの女ア此の谷
 へ落しちまった」

杳「どうした」

峯「川の中へ飛込んだ」

杳「どうする」

峯「どうするたって仕様がねえ、とても助からねえ、愚図ツかし

て人が来ると仕様がねえ、鞆は車へ乗せるから……手前^{てめえ}、何処へ
往く^い」

柰「往くツたつてお前^{めえ}唯は往かれねえ」

峯「そりやア極つて居らア、さアこれを持って往け」

柰「これだけありやア今月一杯^{べい}は休みだ」

峯「旨^{うめ}え物でも食つて娼妓^{じよろう}でも買え」

柰「有^{ありがた}難え、こんな手^{てつだえ}伝しなけりやア旨^{うめ}え物が食えねえから」

峯「己は乗せて来た鞆を持って往くから、後^{あと}ア又伊香保で会おう

ぜ」

柰「じゃア別れる」

と彼^かの鞆を付けて峰松は折田村の傾斜^{なだれ}を下りましたが、見かけ

によらぬ大悪人でございます。此の峯松は三年前あとに足利栄町に於
 きましてお瀧と密通して、茂之助夫婦が非業な死を遂げた村上松
 五郎と云うさむらい士族で、今姿を変えても斯様な悪業を働いて居りま
 す。

四十五

さて車夫の峯松が、欺いて連れ出しましたお藤と云う彼かの婦人
 を、たにあい 亀茨滝の谷間へ追込みましたので、お藤は勝手は知らず、
 足を踏ふみはず外して真逆まっさかさまに落ちましたが、御案内の通り彼あの折
 田の谷は余程深うございまして、下には所々しよくに巨岩おおいわが有りまし

て、これへ山田川の流れが衝あたつて渦を巻いて落します。水色真まつさ
 青おにして物凄おそろい所であります。前面むこうには白茨滝と申します大滝
 が有りまして、ドウードツと云うすさまじい水音でございます。
 其処へ落ちては五体粉微塵となるくらいけんその嶮岨な処でありますか
 ら、決して助かりよう筈はないのでございます。丁度其の晩山田
 川へ筏を組みに参つて居りましたのは、市城村の市四郎と云うお狭
とこぎ
 気の人で、御案内の通り筏乗と申すものは、上州でも多く五町
 田、市城村、村上彼の辺あに住すまいを致して居ります。此の日向見川
 と荒川あらかわと云うのが二筋ふたすじに別れて来ます。是は信州と越後との
 境から落して参り、四万川と称え、流れの末しもが下山田川やまだがわに合がっし
 て吾妻川へ落しますゆえ、山から材木を伐出きりだし、尺しやく角二尺角

或は山にて板に挽き、貫小割は牛の脊で下して参ります。山田
 川で筏を組みますには藤蔓を用います、これを上拵えとと
 なえ、筏乗の方では藤蔓のことを一把二把と申しませんで、一タ
 キニタキと云います、一駄六把ずつ有りまして、其の頃では一駄
 七十五錢で、十四五本ぐらいつ繋げましてこれを牛の脊で持つ
 て来るのを、組揚げて十二段にして出しますが、誠に危い身の上
 でございます。筏乗は悪く致すと岩角に衝当り、水中へ陥るよ
 うな事が毎度ありますが、山田川から前橋まで漕出す賃金は稍く
 金二円五十錢ぐらいのもので、長い楫を持ち筏の上に乗って、前
 後に二人ずつ居りまして、中乗りが三人ぐらい居まして、忽ち
 に前橋まで此の筏が下りて参りますが、中々容易なものでは有り

ません。只今彼の市四郎が上拵えの手伝いを致して居りますと、
「きやー」

と云う女の声に恟り致して、市四郎が仰向いて見ますと、崖の上からバラ／＼／＼と櫛筧が落ちて来ました。

市「おや……何か落ちて来た」

と身を屈めて透して見ますと、谷間に繁茂致して居る樹木に於て居ます藤蔓は、井戸綱ぐらいもある太い奴が幾つも八重になつて繋んで居ます、其処へ陥りましたはお藤と云う女の運が好いので、藤蔓と藤蔓の間へ身が挟まって逆さまに成りましたから、髪も乱れ、お藤は一生懸命に藤蔓へ掴まったなり気が遠くなりました。

女「あゝ……」

と云う声に恟りして市四郎が仰向いて見ますと、一人の女が藤蔓の間に挟まって下^{さが}つて居ましたから、

市「おゝゝ落^{もと}ちたこと、あゝ危い」

と素^{もと}より勝手を知つて居りますから、忽ちに市四郎が岩角に捕^{つか}まつて這い上り、樹^きの根へ足を踏^ふん掛^がけて彼^かのお藤を助けまして、水を飲ませ脊^{せな}を撫^{さす}り、

市「何か薬でもあるか」

と聞きましたがお藤は更に物も云えません様子だから流れの水を飲ませ、脊中を撫り、種^{いろく}々介抱致して居^{うち}る中に漸く生^{しょう}氣^{うき}に成つて、

藤「実はこれくの悪党の為に騙だまされて此こ様な難なんに遭あいました、
従者ともの下婢岩おんなと申すのは、何う致いたしましたか、何卒どうぞお探たずねなすつ
て下さいまし」

市「ム、ーそれは飛んだ事だった、私わしが往いつて探たずして上げやんし
よう」

と素おとこより侠気だての人ゆえ、御案内の通り恐ろしい谷間の急な坂を
登のぼつて参まゐり、庚申塚の在あります折田の根方へ来て見みますと、血
が少し流れて居ゐるのみで、供の女中岩と申すものゝ死骸が見えま
せん。櫛くしや笄はしは折これて其そこ処ちに落おち散ちつて居ゐながら死骸しかいが分わりませ
んと其こ処ちに野の口ぐち權ごん平べいと云いう百姓ひやくしやうがござござざいます、崖たけの方かたへ引ひ付つ
いてある家うちで、六十九番地むそくじゅうばんちで、市四郎いちしやうは予かねて知し合あの者ものゆえ其家そのこ

を起して湯を貰い、

市「何か薬はあるか」

權「だらにすけならある」

といったが埒らちが明きません。

市「まあお女中御心配なさるな」

とはから直すくにお藤を連れまして、市城村の我が宅へ歸つて来まして、深くお藤の身の上を聞きました。

四十六

此方こちらは左様そんな事は知りませんから、明日あしたは来るに違ちがいと待まち

に待つて居りました、橋本幸三郎、岡村由兵衛の二人は、鈴木屋の下婢おんなは瀧川左京と云う以前は立派なお旗下のお嬢さんと知りませんでしたから、

幸「あゝ何も彼あれに酌をさせて、お前姐めえねえさんと云つたぜ」

由「旦那本当にお気の毒じやありませんか、あなた五十両で彼あの女こを身請して東京へ連れて往いけば、お母つかさんが嘸さぞお悦びなさいましよう、さつそく貴方の御新造にお取持を致しましょう」

幸「然そうお太鼓口をきかれちやア困る」

と幸三郎は飲めない酒を飲んでグツスリ寝付きますと、温泉場も一時（午前）から三時までの間は一際しんと致します。往來ゆきくは素もとよりなし、山国の事でございますから木に当る風音かざおとと谷川の水み

ずおと

音ばかりドウドツという。折々聞ゆるは河鹿の啼声ばかり、

只今では道路がこう西の山根から致しまして、下路の方の川岸

へ附きましたから五六町で往かれますが、私が十ヶ年前に参りま

した時には上路へ参りましたから八丁余もありまして、足場が

余程悪く、上路へ参りますとなだれに橋が架つて居りまして、是

から彼の關善と云う大屋の家へ参ります。橋を渡らずに左に附い

て谷川をザブ／＼膝越で渡つて参る曲者一人、山路染の手

拭に顔を深く包み、身軽に尻からげを為まして四辺へ眼を付けて

居りますと、灯火もほんのりと薄暗く障子に写ります、橋の傍に

点いてありますランプ灯も消えかゝりましたを幸いと、何時か忍

入りたる悪者は、四五間の川を渡つて石垣に取付き、そろ／＼關

善の玄関の角すみの座敷へ這上りました。只今でも開けん処へ参りま
 すと、温泉場などでは余り戸締りを致しません、私わたくしが参りました
 時分には頓と締りが有りませんから、自由にそつと障子を開けて、
 濡れた足で窓から忍び込み、長四畳ながの入側いりかわの処へ踏込みまして、
 二重に締つて居りました唐紙を細目に開けて、覗いて見ますと、
 行灯あんどうの火光あかりがぼんやり点いて居ります。幸三郎も由兵衛もグー
 ／＼と云う鼾いびきの聲、そつと襖を開けて枕元へ忍び込み、布団の
 間に挟んで有ります金側きんかわの時計に珊瑚珠の大きな玉の附いたポ
 ン筒の腰差の煙草入を盗んで自分の腰へ差し、時計を懐へ納れ、
 まだ何か有るかを探したが、大概の物は皆鞆みんなへ納れて此の旅亭やどやへ
 預けて置きましたから何も有りません、岡村由兵衛の枕元へ参つ

て見ると煙草入が一個有りました、これをも盗んで我腰へ差そうとする途端に、

「ウーン」

と由兵衛が寝返りをする様子に驚き身を引いて、入側の方へ出に掛ると、玄関口から這入つて来ましたのは前申し上げました瀧川左京の娘おりゆうにて、私の身体を身請してくれると云う旦那様に一言頼みたいことも有るが、何うかしてお目に懸りたいが、鈴木屋さんに知れても悪いし……なれども旦那様が夜が更けたらソツと忍んで来いと仰しやっただけでも……参るのも恥かしい……が、どうも真実か虚言か旦那さまのお心持が聞きたいと思つたのでございましょうか、今そつと拔足を致して玄関の式台を

上り、長四畳へ這入つて参り、折曲おりまがつて入側の方へ附いて来ます途端に、頬冠ほうかむりを為した曲者が、此方へ出に掛るから、恟びつくりして後へ退りました。此方の曲者も人が来たなと思ひましたから怖あとさがいゆえ窓から戸外へ出ようと思ひ、這うようにして玄関の方へ出に掛ります。此方では襖へピツタリ身を寄せて透すかして見ますと、橋の傍に点ついて居ますランプ灯の火光あかりばかりで有りますけれども其の姿が見えます。悪者の方でも相手が女だからびくともせず、若もし己を取捕とつつかまえたなら殴ぶちのめして逃げようと腹を据え、今出に掛ると、

りゆう「おい／＼松さんじゃアないか、松さん」

とおの己が名を呼ばれましたから恟りして透し見まして、

曲者「何だ……お瀧か」

りゆう「あゝ、私はまあ種々お前に話が有るんです、逢いたか
つたが何うして此処に居るの、まあ此方へお出でよ」

とむりやりに松五郎の手を取つて、

りゆう「此処から往くと知れないから」

とソツと忍んで關善の裏手へ出まして、叶屋の傍から小橋を渡
り、田村の下の小商人の有ります所に蕎麦店がございます。此
家は予て自分も時々借りる家と見えます、此の二階へ夜半に忍
び込んで頬冠を脱り、ほツと息を吐きました。

松「何うしたえ」

りゆう「私も何うかしてと種々いろく心配して居ましたけれども、さつぱりお前さんの様子が分りませんでした。が、能くまアお前こつち方へ出て来ておくれだね」

松「己おらア此の通り姿を変えて人力挽ひき、何んでも手前てめえが上州路に居ると聞いたから、草津か、沢渡か、伊香保にでも居るかと思つて居たのよ、併しかし己おれも危あぶえ身の上だが、渋川へ来て車夫になつて、東京の客を当込んで、車くるま引ひきの峯松と是まで化けて居るのも、実は手前に逢いたいばかりで彼方あち此方こちとまごついて居たが、碌な仕事もする訳じゃアねえ、と思つうちに宜いい塩梅に今度霊岸島

川口町の御用達だてえ橋本と云う野郎を乗せた処が、己を正直者だとか律義者だとか惚込んで次の間へ置くばかりに、すっかり彼奴いっの腹へ這入つちまつたからたんまりした仕事が出来ようかと思つて居ると、隣室となりに居た女が其奴そいつに岡惚をした様子だから、些ちつとばかり好い仕事を為しようと思つと、こいつア失策どじをくんだが、伊香保へ残した荷物を取りに往いく証拠の手紙が有るから、是れを持つて往けば先方むこうでも雑物ぞうもつを渡すに違ちがえねえと思ふんだ、少しばかりの仕事だけれども、これを纏まとめてドロンと決めようと思ふんだが、往掛いきがけの駄賃に幸三郎が金を持って居るから跡を躡つけて此処まで来たが、首尾好く座敷へ忍び込んだが、枕元に鞆たもとがねえから其処に有合せた煙草入や時計を引ひつ浚さらつて表へ出ようとする途

端に、手前に出でつくわ会したのよ」

りゆう「私も宇都宮で少し失策どじを組んだから此方こつちへ来たんだがね、

此の鈴木屋へ身を落着け、色気の客があつたらと思ふ処へ泊つた

奴はお前の話の幸三郎、此奴こいつを欺だまして旗下のお嬢様だと出鱈目な

言ことを云つて隠れて居るのさ、始めて橋本に逢つたのに舌の長いこ

とを云うから、生なまぞら空ア遣つかつて泣いて見せてとう／＼……關善に

は内証だよ、鈴木屋さんに知れても悪いから黙つて、おくれよと

すすかりだま 尽底騙くちどめして口留しを為たが、夜半よなかに最ねじめう一遍根締を見ようと思

つて往つたのだが、ちようど宜いい処で出会つたね、実はね關善か

鈴木屋か二人の中誰うちでも宜いから金を受取り、私の身を渡したと

云う請判うけはんが有れば宜いんだがね……三文判でも構やアしないが、

男の手でなければいけないの、おりゆうの身の上に付いて……マ
お聞きよ、今私はおりゆうと云う名前になつて居るんだよ、金子^{かね}
五十両^{たし}慥かに、受取り、おりゆうの身の上を宜しくお引渡し申し
ますつて、お前は其^{そのん}様な事を拵^{こしら}えるのは上手だから、本当らしく
巧く書付を拵え、金子^{かね}で先方^{むこう}へ妾にでも往^いく積りにして、宜いか
え、兎も角もそうしておくれよ、お互に別れ々々になつても隠れ
場所があれば、時々出て逢えるような事がなくつちやア私も苦勞
をする甲斐がないよ、私だつて身を切られるほど厭^{いと}だけでも、
表向き明るい処をのそく歩かれる身の上じゃないから」
松「ウン斯^{こん}様な書付じゃア何うだえ」

と硯箱を借りましたが、松五郎はもと旗下の用人の忤で、少し

く書付が堅ましく出来ました処へ有合わした三文判を押しして、おりゆうの名前の下には爪印を捺し、これを懐に入れて橋本幸三郎より五十両の金を取り、松五郎を越後の浅貝の間道を逃がそうと云う企てでございます。此方では夜が明けると大騒ぎでございます。

幸「枕元に置いた金側の時計と煙草入がない……」

由「私の煙草入もない」

とは是から關善を呼んで派出所へ訴えに成りましたから、早速警察官が御出張に相成り、段々取調べましたが、少しも当りが附かない、随分湯場は稼ぎ賊が多いものでございます。

四十八

翌朝あけに成ると皆々打寄り 届とど書けがきを書いたり、是から原町はらまちの警察署へ訴える手続が宜かろうかなどとゴタ／＼致して居りまする処へ這入つて来ましたのは、年頃三十八九に成る色の浅黒いでつぷりとした丈せいの高い大きな男でございます。長四畳の方の襖を開けまして、

男「はい御免なさい……」

由「はい、お出でなさい何方どなたです」

男「はい、え、二三日前から伊香保の……十二あ彼の伊香保の木暮八郎とつ処こちから此方へ湯治にお入いでなされた橋本幸三郎さんてエの

は貴方でございますか」

幸「はい、橋本幸三郎は手前てまいでございますが、何方でげすか」

男「私わしア市城村の市四郎という筏乗ですが、お初にお目にかゝります、少しお訊ね申してえ事が有つて出やした、え此処すくで直にお話をしても宜うがすかな」

幸「はい、左様そうでございますか……只今種々いろく取込が有りまして、是から少々山の派出所まで参らんければならんでげすが何御用でげす」

市「なに別の事でも御座えませんが、貴方が伊香保から此方こつちへおいでなすつた供に峯松くるまひきてえ車くるまひき夫おとこが有りやすか」

幸「はい峯松と申すものはございますが、伊香保へ残して私共は

此方こつちへ参りましたが、何か御用でげすか」

市「その峯松を隠さずに此処へ出してお貰え申してえ」

幸さよう「左様でございます、何う云うなんでげすか……おい由さん引ひ込んでちやいけねえよ、此処へ来て掛合つておくれなお前つこ」

といわれて由兵衛が其処へ出て参り

由「へえおいでなさいまし」

市「お前は何んだ」

由「へえ手前てまいは此の旦那のお供をして参りました由兵衛と申すものでございますが、貴方は何んの御用で入らつしやいました、峯松と申す車くるまひき夫は伊香保へ残して置き、旦那と私だけ先へ此方こつちへ参りまして、二週間ばかり見物かた／＼湯治に参つたのでげ

すが、へえ」

市「其そん様な事は何うでも宜いいから、早く其の峯松てえ奴を此処へ出してくれ」

由「へえ：早く此処へ出せと仰しやつても只今申もうしあげ上る通り当人が居りませんので」

市「居ねえたつて貴あなた下方の供だから出さねばなんねえ訳じゃアねえか」

由「何んでげす、何う云う訳なんですか存じませんが、居らんものを出せと仰しやつちや困ります」

市「その野郎を此処へ出しておくんなさならなけりやア、私わしイハア、お前さんがたをたゞア置かねえぞ、首でも引ん捻ねじつて押おさめえて、

本当に原町の警察署へしよびいてツて、私イハア屹度それだけの
処分さばきを附けねばなんねえ」

由「驚きやしたな、無闇に首を捻るなどと仰しやつても、私わたくし

共どもは生きて居る人間だから、捻るたつて黙つて貴方に首を捻ら

れるものでも有りませんが、タゞ峯松は居ねえが此処へ出せと無
闇に御立腹に成つて仰しやつては分りませんので、へえ」

市「分らねえ事はねえ、其方そっちに悪い廉かどが有るから参つたゞ、人を

殺して物を奪とる奴ア盗賊どろぼうに違ちがえねえから、警察署へしよびいて

往いくのにも不思議はねえ、当然あたりめえの話しだ」

由「へえー、彼奴あいつが人を殺しましたか」

市「ムムーしらばつくれるな野郎、汝うぬらも峯松の同類ちげに違えねえ、

伊香保の木暮八郎とこン処にお前めえがた方逗留して居る時分、己おらア知んね
 えけれども、何だか御用達の旦那さまだとか金持だとかなま虚言ぞら
 を吐ついて、漸だん々隣座敷の者と親しく成つた其の上で、巧うまく欺だま
 してよ、此こん様な山こ中へ連れ出して来て刃物三昧を為しやアがつて、
 女を斬殺きりころして、その死骸を河か中へ打ぶちこ込んで、えれエ奴われだ、汝
 が言附けてさせたに違ちげえねえ、二人ながら同類どうるいだろう、己にがア逃にがさ
 ねえぞ」
 と掴つかみつきいきおいいな勢いきで有ありますから。

四十九

由兵衛は市四郎をなだめまして、

由「マ、静かにして下さいまし、私共を同類だの盗賊だのと仰しやつちやア困りますが、何う云う訳でげす」

市「私わしア筏乗ゆえ上仕事うわしごとに時々参るんだ、すると、昨夜山田川

の崖の藤蔓へ引懸つてキイ／＼泣ねえてる女が有るだから、私も驚

いて漸ようやく助け、段々様子を聞くと、その女の云うには、伊香保の

木暮八郎方に逗留うちしている中に、隣座敷に居た橋本幸三郎さんて

え人が、此方こつちの温泉は利きが宜い、案内しようといわれて、跡から

供の峯松と云う奴の車に乗つて参る途みちで、その峯松てえ奴が刃物

三昧をして供の下婢おんなは斬殺きりころされ、私は逃げようとして足を踏み

はずして崖から下へ落ちましたが、幸いにして藤蔓へ引懸あやうつて危

い命を助かりましたが、ア、一口惜しい、欺だまされたって泣いてる

だ、湯場稼ぎの有る事は聞いてるが、貴方あんたの供しの為た事だから、

仮令たとえ貴方らは手おろを下して殺さねえでも、大概同類ちげに違えねえ事は

分るだ、御領主様と縁繋がりごしんぞうの御内室さまだし、お前方も掛り

合えだから私わしと一緒に警察まで往いきなせえ」

由「何う致しまして私わたくしども共は決して同類などではございませぬ」

市「いや同類でねえたつて掛り合いだ」

由「これは驚きましたな」

幸「是は何うも思ひ掛けねえ事で、あの車夫しゃぶの峯松と云うものは

私わたくしの供やくしじゃありません、雇やといにん人でもないの、実は渋川の達

磨茶屋で私わたくしども共ちゆうじきが昼食を致して居りますと、車夫が多おおぜい勢来て

供を為しようと勧めました其うちの中で、江戸ツ子で気の利いた様子の
好いい奴だと思ひましたから、彼あれを雇つて来ますと、至つて正直者
のように思ひましたから目を掛けて遣りましたが、そんなら彼奴あいつ
がお藤さまを連れ出して無慙むざんにも殺しましたかえ」

市「殺したつて殺さねえつてとぼけてもいかねえ、さア警察署へ
一緒に往いきなせえ」

幸「まアく静かにして下さいまし、私わたくしも籍のないもんじやアあ
りませんから、決して逃げ隠れは致しません、私は全く橋本幸三
郎と申して少々ばかり御用を達たす身の上でございまして…この岡
村由兵衛と申すものは奉公人てえ訳ではない、日頃宅へ出入りを
致すもので、木挽町に居ります何うろんも胡乱うろんの者では有りません、全

く私が連れて参った供でないと言ふ証拠の有るのは、伊香保の木暮八郎方でお聞きなすつても、渋川の達磨茶屋で聞きましたも分りませんが、私共へ繩を掛けて引くと仰しやるのは誠に迷惑致しますが、其の代り出る所へ出て申訳は致しましょう」

市「さア早く出る所へ出なさい」

幸「それではお藤さまには誠にお氣の毒でげしたが、何なんにしてもお怪我は有りませんでしたか」

市「怪我はないだつてよ、藤蔓の間へぶら下つて居たから宜いいよ
うなもの、下へ落れば巨おおきな岩が幾つも有るから身体は微塵に
打ぶつ碎けるだが、幸い私わしが下に居たから助けて上げたけれども、
二人の車夫は人を殺し鞆と荷物を引さらつて何処かへ逃げやがっ

たのだ」

幸「へえ、成程、私わたしの方でも昨夜賊難に遇あひまして、是から其の届けを致そうと存じ、騒さわぎをやつてるのですが、兎に角斯う致しましょう、ねえ由さん、此処こゝから使つかいを遣つて伊香保の木暮八郎の手代と渋川の達磨茶屋の主人を呼びましょう、幾ら金がかゝつても仕方がないから」

由「然そうでございますとも」

と直すぐに手紙を認しため、早速来てくれるようにと申して遣ると、木暮八郎方の番頭も参り、達磨茶屋の亭主も来ましたから、打連れ立って原町の警察署へ参りまして、段々調べになりますと、全く車夫の峯松と杳八という渋川から従ついて参つた処の悪車夫二人に

て人を殺し、鞆と荷物を引つ浚つて逃げたに相違ない事が判然いたしました。されども其の者等らの行方は未だ知れませんが、全く知らん車夫ゆえ橋本幸三郎は宜いい塩梅に身遁みのがれは出来ましたが、是がために二週間ばかりと云うものは頓と出るも引くも出来ませんで、空しく湯治を致して居りました。

幸「あゝ案外つまらん目に遭つた、併しかし東京に帰るに付いて他ほかに土産もないから」

と前ぜん々、思いを掛けました彼の鈴木屋と云う料理茶屋の働き女おりゆうを五十円で身請を致しました。おりゆうのお瀧は何処までも継すがつて橋本幸三郎を騙し五十両の金子かねを取つて窃ひそかに松五郎に持たせて越後へ立たせてしまい、自分はずう／＼しくも請出

され、東京へ来て橋本幸三郎の妾となつて橋場に囲われて居りました。直すぐにおりゆうの母をたずねると死にましたと云う。是も皆うそであります。幸三郎はおりゆうにすっかり欺だまされて、あれは世間へ出るのが嫌いで、至つて温順おとなしい、志も感心なものだ、芝居も見たがりもせず、美いい着物を着たがらんで信心一三昧で温順うちしく宅うちにばかり居る、彼あ様な感心なものはない、いづれ氣象が知れたら女房しに為ようと幸三郎は思つて居りました。

五十

橋本幸三郎が瀧川左京という旗下のお嬢さまと存じて悪党のお

瀧を五十円にて身請を致し、橋場の別荘へ囲つて置きました。只今の権妻ごんさいは極く勉強でございます。先ず旦那のおいでのない日には洋学をして見ようとか、或は少しづつ歌でも習おうとか、それとも編物をやって見ようとか云つて何か遣つて居りますなれども、昔の妾ぐらい怠けたものは有りません。只今なれば起るのが十時でげすな、往時まえは巳刻よつと云つた時分にようや稍く眼を覚して、権「誰か火を持って来ておくれな」

とはから枕元へ下女が煙草盆へ切炭を埋いけて持つて来ますと、

腹はらんばい 這はいになつて長い烟管きせろで煙草を喫のむことくおおよそ十五六

服喫まなければ眼が判はつきり然覚めないと見えます。是から寝衣ねまきの姿なり

で、ずうツと起上つて障子を開け、廊下伝いに往つて便所へ這入

り、小用を達すのでございませうが、此のまた便所の永いこと
 稍やゝ三十分ばかりも這入つて居ります、出て来ると楊枝箱ようじばこに真しんち
 鍬ゆうの大きな金かな盥いだらいにお湯を汲とつて輪形りんなりの大きな嗽うがい茶碗、
 これも錦にしき手てか何かで微温ぬるまの頃合の湯を取り、焼塩が少し入れて
 あります。下女が持つて参ります。是から楊枝を遣い始めようと
 すると、ゴーンと云うのが上野の午こゝのつ刻だから今の十二時で何う
 云う訳か楊枝が四本あります、一本へ齒磨を附けまして齒もとの齧もと
 表を磨き、一本の楊枝で下齒の表を磨き、又一本の楊枝で齒の裏
 を磨き、小さい楊枝が有りまして、これで齒の間あいだ々々を掃除い
 たします。舌をこきますときは化物が赤あかんぼ児あかんぼでも喰うような顔付
 を致しまして、すっかり溜飲を吐いてから嗽うがいを致しまして、顔を

洗い、それから先ず着物を着替るので、其の永い事、それから神
 仏へ向いましたして線香を上げまして一心に拝みは為しませんが、神棚
 や仏壇に向つてごちやく云いながら拜んで居ります中うちに、漸く
 下女が茶を入れて持つて参りますから、これを飲んで居ると、ポ
 ーンと未刻やつの鐘が響きますから、

権「お湯に往いこう」

と昔は種いろく々々のものを持つて往つたもので、小さい軽石が有り
 まして朴ほうのきずみ木炭ぬかぶくろ、糠袋ぬかぶくろの大きいのが一つ、小さいのが一つ、
 其の中に昔は鶯うぐいすふんの糞、また烏からすうり瓜などを入れたものでございま
 す。爪の間を掃除致すものを持つて参り、下女に浴衣を抱えさせ
 てお湯に這入りますのがこと／＼尽く長い。先ずすつかり悉皆洗い上げて、すう

ツと湯屋から出て家へ帰つて来ますと、ポーンと鳴る、是が申刻と云うので、それから

「さアお飯を喰べようねえ」

と是から朝御膳に成るのでございます。お膳の上には種々な物が載つて居ります。自分の嗜なものが小さい蓋物ふたものに這入つたり、

一寸片口に這入つたり小皿に入れたりして有りますが、碌なものはありません、お芋の煮たのや豆の煮たのやなにかを取交とりまぜて有ります、総唐草の輪形の茶碗へ銀の股引を穿はいた箸を出して喰べようと致して、

権「あゝー痛いこと……ちよいとその丸薬を取つておくれ」と丸薬を七粒服のんでお膳に向い、

権「是じやア喰べられやアしないよ、例いつもの処で何か見つくろつて来ておくれ」

と喰いません。仕方がないから誂あつらえに往くと間もなくお椀に塩焼とか照焼が来ます。

権「氣に入らないよ、妾わたしはいやだよ、それより甘いものが嗜すきだから口取くちとりか何かありそうなものだ、見附めつけて来ておくれ」

下女「はい」

と下女が二度目に使いに参り、帰つた時にポーンと酉刻むつが鳴ります、朝飯あさはんが夕六時くれむつでございます。是からお化粧に取り掛ります。すつかり鬘たばや何かを櫛で搔上げて置いて、領白粉えりおしろいを少し濃めに付け、顔白粉を付けてから、濡れた手拭で拭い取ってしま

ます。誠に無駄な事を致します。唇へ差した余りの紅を耳たぶや眼の間へ差して、髪を搔揚げてしまい、着物を着替えたりするとボーンと夜の亥刻になります。

権「ちよいと其処の三味線を取っておくれよ」

と、柱に倚掛よりかつて碌に弾けやアしませんいが、忌アな姿になつてポツ／＼端唄はうたの稽古か何かを致して居ります中に、旦那がおいでになります。是からお酒が始まるとボーンと子刻こゝのつに成りますから、昼だか夜よるだか頓と分りません。それに引替えて今の権妻は権威が附いたのか、旦那の為に学問を為しようといつて御勉強でございませぬ。

さて橋本幸三郎は靈岸島から橋場へ通いますには何か托かこつけなければなりません。今日は斯う云う権門けんもんだとか、明日はあゝ云う集会よんどころがあつて抛よんどころなく遅く成りましたら橋場の別荘へ泊りますと、断つては出掛けます。何時も岡村由兵衛が一緒で、或日丁度自分の宅うちの少し手前に懇意なものがありまして、此家こゝでの宴会を済まして表へ出ると、彼かれ此これ一時でございます。

幸「由さん遅く成つて気の毒だね」

由「なに遅くなつたつて、斯う云う時に御別荘の有るてえ此の位便利な事はありません、だが矢張川口町へ帰るつもりで頻しきりに急

ぎましたが知れるといけません、好い塩梅によし原の（芸者）おしめ、延^{のぶ}しん、おなおなぞが、貴方の此処へ帰る事を知りませんから宜うございますが、知った日にやア、ヘエーてんで無闇に来ますよ」

幸「お前ばかり知ってるんだから誰にも喋^{わたくし}つちやアいけねえよ」
 由「なに私は喋^{わたくし}りやアしません、実に世間にも権妻は幾許^{いくら}もございませが、何れ芸者上りが多いので、旦那が大金を出して身請^{いず}を為^してサ、増長させて云う芽が出るんですが、それとちがいお宅のお内^{うち}さんぐらいの温^{おとなし}和い方を私は未だ見た事がありません、
 第一 信^{しん}心^{しん}者^{しや}でげす」

幸「ウン余り外へ出るのが嫌^きえで、芝居は厭だ花見は厭だとい

て、宅うちに居て草双紙を見るのが宜いいてえんだ」

由「御自慢なせえく、実に彼あの方は品が違いますねえ、私わたくしが参つても物数云わず、につこりと笑われると胸がむか／＼して来て、カアーと気が遠くなる位のものでげすが、一向にお化粧しまいもなさいませんが、何処ともなくお美しゆうございますなア、此の間の黄八丈はすつかりお似合なさいましたぜ」

幸「平素ふだんは木綿で宜いいなんて彼あれは少し變つて居るね」

由「變つてる処じゃアありません、彼様あんなものが上州四万村辺あたりに居ようとは思いきやで、御運が悪くつて御苦労なすつて、あゝやつて在いらつしやるくらい御苦労の果はてだからさ、大概の権妻は朝寝あそが嗜すきで、第一喰物くいもの選えらみをして、あの着物を買いたいので、此処へ往

つて見たいとか劇場しばいへ往いきたいとか種々いろく云い出して、チンく
をするくらい無理なのはありませんよ、旦那が奥さんの処へ往つ
て寝るのを権妻がチンくをするくらい何う考えても無理なのは
ありません、旦那がお茶を習えとか活花を稽古し為ろつてえと忌いやア
に捻ひねつて仕舞い、女の癖くせに変なこうポツく毛の生えた羽織など
を着ていけません、それに洋学などを習つたりすると変な氣位きぐらい
ばかり高くなつて、外国の話なんぞを為ますが、僕などには些ちつと
も分りませんで面白くありませんが、彼のあおりゆうさんなどは柔
和わでね、何も彼も心得かて、女らしく在いらつしやるのは、ありやアち
よつと出来ないで……」

犬「ワンく」

由「シツ畜生……」

犬「ワンく」

由「畜生く」

幸「かめく……帰ったよ……トンくくく、おさんや帰ったよ、
トンくくく」

さん「はい」

と小声で返辞をして慄ふるえながら窃そつと戸を開け、

さん「静かにして下さいましよ、盗賊どろぼうが這入りましたよ」

幸「えゝ……何処から這入った、締りは嚴重にして置いたんだろ
う」

さん「あれ……貴方其方そっちへ往つちやアいけませんよ」

と云われて慌て、由兵衛は柱へ頭をコツリ。

由「あ痛い何うも……私わたくしは直ぐに帰りましょう……」

さん「あれ、お庭の方へ出ちやいけませんよ、盗賊はお庭から這入つたんですよ」

と云われてまごごして彼方あっちへ打ぶつかり、此方こっちへ突当つて滑つたり、盥たらいの中へ足を突つ込んで尻つもちをつくやら大騒ぎで、

幸「静かに〜」

由「し静か処じやありません、あ痛い何うも……痛くつて口がきけませんくらいで」

幸「おい／＼……お駒こまやおりゆうは何うした」

さん「何うなさいましたか知りませんが、何でも庭から這入りま
した様子でございます、判はつきり然とは分りませんが、是は美いい妾だ、
姦なぐさんで殺して仕舞え、お金を奪とつて往いこうと云う声が聞えたよう
に思います、キヤーと云う声がいたしましたから、何でもお駒ど
んは斬られやア為しないかと存じます」

幸「ム、ー、おい……マアこれ沈おち着かないかよ、静かにしなくつち
やアいけねえじゃアねえか」

由「静かにしろつて、わ私わたくしは、さ騒さわぎたくつても口がきかれませ
ん、是れでは」

とワナ／＼ふる慄えて居るを見て、

幸「氣を確しつかり持ちなよ」

さん「確りも何もありませんから私を逃して下さいまし」

幸「これ／＼そっち其方へ出ちやアならん」

と幸三郎は沈おちつ着いた人ゆえ悠々ゆう／＼と玄関の処へ来ますとステツキがあります。これを提さげ、片手に紙燭ししよくを点ともしたのを持って、

幸「何処の所だ、何にしてもお駒が案じられるし、おりゆうに怪我は無かつたか、賊は逃去つて仕舞つたか」

下女「何うでございますか私は只台所のお竈へつついの下へ首を突つっこ込んで居りましたから、確しつかりとは分りませんでした、多分お怪我をなさいましたらう」

幸「えゝ、怪我をするのに多分などを附ける奴があるものか……
 おい由さん一緒に往つておくれよ」

由「へえ……一緒にツたつて私は逃げられませんかよ……あゝ宜しい、心得ましたが然う引張つたつていけませんてえに……あ痛い……足へ手桶が引掛つて居ます……あ痛い……是は何うも大変な処へ歸つて来ましたなア、私を引張つて往つたつて何の役にも立ちませんよ」

幸「チョツ静かにしねえか」

由「あ痛い……何うも是は痛い、暗いもんだからお茶棚の角へ頭を打附けました、木齋もくさいに此の角を円くさせて置いて下さいな」

幸「お前後生だから外へ出て一寸ちよつと派出所へ届けるか、其処らに

巡査さんが歩いて居たら御出張を願つて来てくれねえか」

由「へえ……私は巡査は極ごくいけねえんで、へえ何うも私は巡査さんを見ると何となく怖いので」

幸「お前は盗賊どろぼうじゃあるめえし」

由「ないが何処ともなく巡査さんは凛々りんりんしくつて怖味こわみがありますから、私わたくしが届けちやいけますまい、何卒どうぞは一つお女中に願ひましょう」

幸「チョツ……意気地いきぢがねえなア」

と云いながら倉前へ来て見ますと、緋ひの縮緬しじみの扱しきが一本、傍そばに浴衣が有りました、ポタリ／＼と血が垂れて居ますを見て由兵衛は慄え上り、

由「あゝ、血が、夕垂れて居ます、南無阿弥陀仏く血と聞いた
らまた腰が脱ぬけツちまいました」

幸「えゝ、此方こつちへ来な」

と漸だん／＼々庭伝だんいに来て見ますと、庭に櫛かんざしだの簪かんざしが落ちてあつて、向うを見ると棧橋の木戸が開いて居ます。

幸「ムゝ、……此処が開いて居るからにやア此処からでも這入つたか知ら」

と眩つぶやきながら棧橋へ出て見ますと血が垂れて、其処そこにおりゆうの寝衣ねまき浴衣と扱ねまききが落ちてあつたのを取上げ透すかし見て、

幸「ムゝ、是はおわしりゆうの寐衣と帯だが……おい由さん、何を為して居るんだ、私は此処こゝに居るよ」

由「へえ……私わたくしはとても其処までは参られせんよ、へえ」

幸「チョツ……困るなア」

と云つたが浮うつかり倉の方へ這入り、盗どろぼう賊ぞうに長い刀ものを提ひげて出られちやア堪りませんし、由兵衛はぶるくして役に立ちませんから、幸三郎が自身に駈出して参ると、丁度巡行の查公さこうに出会いました。

五十三

幸「只今私わたくし宅かたへ強盗が押入りました、家うち中じゆうに血が垂れて居りますから、直すぐに御出張を願います」

巡「ウン承知致した」

と云つたが、一人では万一賊の方が多勢おおぜいではいけませんから
派出所へ立帰り、呼子よびこにて同僚を集め、四人ばかりにて其の場へ
駈附かけ、裏口台所口棧橋の出口へ一人いちにんずつ立番をして居り、一
人ちが表口からズーツと這入り、段々取調べると、

幸「今年十六才になりますお駒と云う少女むすめが見えませんが、尤も同
人の寝衣、扱とき等が倉前に落ちて居りますから、賊が倉の中に隠
れて居りまするかも知れません」

と申しますので、是から段々取調べました処何処にも居りませ
んが、大した品物を盗んで参りました。

巡「大方妾のおりゆうとお駒と申す少女むすめを辱かしたる上に斬きりこ

殺し、死骸は河の中へ投り込んで、舟で逃げたものだろう」

と取調べ、探偵は入替りく四五名来り、名刺を置いて歸り

ました。是から先ず其の筋へ訴えなければなりませんから大した騒ぎでございませぬ。斯うなつては幸三郎も母に明さん訳には参りませぬから、母にも明し、是から番頭を呼んで来まして、隈なく取調べた上、訴書を認めさせました。

盗難御届

京橋靈岸島川口町四十八番地

橋本幸三郎

明治八年九月四日午前一時頃我等別荘浅草区橋場町一丁目十三番地留守居の者共夫々取締致し打伏し居り候処河岸船付棧

橋より強盜忍び入り候ものと相見え裏口より雨戸を押開け面めんで
 体を匿しかく抜刀を携え二人とも奥の方へ押入り召使りゆう雇女
 駒と申す者を切せつがい害致し右死体は河中へ投込候ものと相見え今
 以て行方相知れ不申候又土蔵へ忍入りしや私所持の衣類金銀
 とも悉く盗取り逃去り候跡へ我等参まいりあわ合せきよと申す下婢かひに
 相尋ね候処驚怖の余り己の部屋に匿れ潜み居候えは賊の申候言
 葉並に執へ逃去候哉慥やしかと不相分由申出候然るに一応家内
 取調申候処庭前所々に鮮血の点滴有これあり之殊に駒の緋絹縮下
 小巾したじめおび帯りゆうの単物血に染み居候まゝ打棄有うちすて之候間此段御訴
 申上候

右盗取られ候金高品数左之通りに御座候

一金二千円 内 訳金千円十円札、金千円五円札○一金三百円内
 訳金百円二円札、金二百円一円札○一金側時計一個但金鎖附此
 代金二百円○一同一個但銀鎖附此代金百円○一掛時計二個此代
 金五十円○一衣類二十七品此代金五百円○一玉置物一個此代金
 二百円○一古銅花瓶一個此代金百五十円、合計金高三千五百円
 也

さて右の書面を以て其の筋へ訴えましたゆえ、探偵の方が段々
 調べました処、後に致つてお駒の死骸が中洲なかずに掛つて居て是が揚
 りました。尚嚴重に調べに成りましたが、何うしても盜賊の行方
 が分りません。此の後明治十一年七月十日、千葉県下しもふさのくに 下総 国
のだのしゆく 野田宿なる太田屋おおたや という宿屋へ泊り合せて、図らずも橋本幸三

郎が奥木佐十郎と云う前申上げました足利江川村の機織屋が、孫の布卷吉を連れて亀甲万きつこうまんという醤油問屋しょうゆどいへ参るに出会い、敵かたきの手掛りを得ると云うお話でございます。

五十四

明治十一年七月十日野田に祇園会ぎおんえと云う事がございますが、豪商の居ます処ゆえ御祭礼は中々立派に出来ます。両側へずーつと地口行灯じぐちあんどうを掲げ、絹張に致して、良い画工えかきに種々の絵を描かせ、上には花傘を附けまして両側へ数十本立たちつら列ね、造り花や飾物が出来ます。水菓子屋或は飴菓子団子氷水を商う店が所々しょくに出まし

て、中々賑やかな事でございます。近郷のものが皆参詣に出ます。

鎮守は愛宕あたごでございます。彼地あちらへ往らつしたお方は御案内でい

らつしやいますが、社殿は槻けやきの総彫そうぼりで、花鳥雲竜かちょううんりようが彫つて

極名作ごくでございます。是は先代の茂木佐平治もぎさへいじし氏が建立致したので

ございます。境内には松杉銀杏いちようの大樹が繁茂して余程広うござ

います（寶曆ほうれきの年号が彫つてあります）牝狗あまいぬ牡狗こまいぬの小さい

のが左右にあり、碑が立つて居て、之に慥たしか鐵翁てつおうの句がござい

まして、句「三光さんこうの他は桜の花あかり」句「声かぎり啼ほとけ杜ほと

鶉ぎす神の森」これは先代茂木佐平治の句で、他に眞顔まがおの碑が建つ

て居ります「あらそはぬ風の柳の糸にこそ堪忍袋縫ふべかりけれ」

という狂歌が彫つてあります。大門だいもんを出ると、角に尾張屋おわりやと云

う三階の料理茶屋があります。日の暮から村の若い衆しゆや女中がぞめき半分で見物に出掛けますが、妙な扮装なりで若い衆は頬冠りを致しますが、全体頬冠りは顔を隠そう為に深く致しますが、彼地あちらの若い衆は顔を出して皆後方うしろへ冠ります、成なるたけ顔を見せるように致しますから、鬚ちげみの先と月代さかやきとが出て居ります。手織いとおりの糸織おとこ縮ちぢみを広袖にして紫縮緬むらさきちりめんごろう呉羅ごろうの袖口が附いて居ます、男子おとこの着物には可笑しいようで、ずいと前を広げても白縮緬しろちぢみか緋縮緬ひちぢみの禪ふんどしをしめるのではありません、矢張晒木綿さらしもめんの禪ふんどしで、表附はののめりの下駄なを履はいて団扇あふぎを持って出ますが、女も其の通り華美はな扮装なりを為して出ます。矢張女も手拭てぬぐいを冠かぶつて居ります。彼地あちらでは女が、誠に済みませんが手拭も冠かぶりませんで御挨拶ごあいさつを致します、と

云う処を見れば手拭を冠るのが礼になつて居る事と見えます。実に非常の群集で、其処にツクノリと云う事があります、何う云う事かと聞きましたら、是は墓目ひきめの法だと云う。宵よいから夜中に掛けツクを乗りますが、是は不思議なもので、代々近村の重次郎じゅうじろうと云う人がツク乗りを致します、其の扮装なりが誠に可笑しゆうございます。白木綿の着物を着て、茜木綿あかねもめんのたツつけを穿はき、蝦蟇がまの形をいたして居おるものを頭に冠り、裳すその処に萌黄木綿もえぎもめんのきれが附いて居ますから、角兵衛獅子形かくべえじしがたちで、此の者を、町内の寄合場所へ村の世話人が附いて招待しょうだい致し、屏風を立廻し馳走を致して居ます。年番ねんばんに当つた家うちの前にツクと云うものを建てますが、丸太で長さ十二間もありまして白布で巻き、上に醬油樽が白木綿

で包んで乗せてあります。それを綱で張つてありますが、若し乗りそくな
 損かつて落ちて死んだ時には、ツクの下へ其の死骸を埋うめるのが
 彼の祭の法だと云いますが、危けん険な業わざであります。なれども慣
 れて上手なものでございます。下に囃はやし子を為して居ます。弥いよ々重
 次郎さんが来る時には早めて囃子を致します。笛が二管、メ太鼓
 が二挺ある切りで囃子が極つて居ます、テレツクくスツテンテ
 ン、テレツクくスツテンテンと叩きます。重次郎さんを送つて
 参ります時の囃子が可笑しゆうございます、唄のような節を付け
 て「ツークの重次郎どんがツークへ登つてヤレエーヘンヨ、テレ
 ツクくスツテンテン」他に何も文句は云いません。処の風と云
 うものは妙なもので、充いっばい溢ばいの人立ちでございます。太田屋とい

う旅宿やどやがございまして、其の家に泊つて居りますのは橋本幸三郎に岡村由兵衛でございます。

五十五

幸「おい何うだえ此処の祭てえのは」

由「何うも驚きやした、是は何うも実に驚きました、是程の騒ぎじゃアないと思いましたが、狭い処にしちやア珍らしゆうございますね」

幸「僅か離れた所でも大層風俗の変つたものだね」

由「変つたつて何だつて何うも大変り、女が皆みな粉この吹いたよう

に白粉おしろいを付けて、黒い足へ紺天こんてんの亜米利加の怪しい鼻緒のす
 がつたのを突掛つツけて何処から出て来るんだか宜いいね、唐縮緬とうちりめんの
 蹴出けだしをしめて、何うしても緋縮緬と見えない、土器色かわらけいろになつた、
 お祖母ばあさんの時代に買ったのを取出してチョコくくしめるんでき
 よう、実に面白うげす……此うちの家の餡あんころ餅が旨いから私わたくしは七つ
 食べましたら少し溜りゆう飲いんに障こたえました」

幸「手塚屋は古河の在手塚村の者が出て売始め、今では上等の菓
 子屋に成つたてえが、今お前に御馳走だと云うのは、亀甲万の醬
 油蔵は何うだえ」

由「何うも大きなもんですねえ、一年に何の位造るんでしょう」

幸「大して造るてえ事だ、何でも一ヶ年に並亀甲万が七万樽以上

に、上等のが七万樽で、両方で合計十四五万樽も出るてえことだなア」

由「へえ沢山の桶が並んで居ましたが、醤油蔵が二十三間あつて此方こつちが十八間あるてえましたね」

幸「桶の高さが七尺五寸から八尺ぐらいで、彼あの中へ落ちて死んだものがあると云うが、あの石を付けて絞る様子などは大したものだね」

由「へえ何うも実に驚きました」

幸「並の醤油を造る大桶の数が百四十五もあると云うが、近い処だけでも大きいものだね」

由「大きいたつて私わたくしは実に驚きました、醤油を三十石ぐらい造る

んで、蔵の中に居る人数ひとかずが四五十人ぐらいも有つて、事が大き
 いたつて、あの竈かまどの釜は何うでげす、矢張あ彼れは釜屋堀かまやぼりの七右う
 衛門えもん（今の釜浅かまあさ铸造所ちゆうぞうじよ）が拵たてえたんでげしようが、七右衛
 門と六右衛門が釜を売つて、たつた一右衛門違いで五右衛門は其
 の釜でうで煤すすられたたてえのは妙でげすな」

幸「詰らねえ事を云うな」

由「亀甲万の旦那にあれ彼は旦那の御紋ですかと聞いたら、なにそ然そ
 じやアない、是には種々いろく訳のある事だ、南みなみしんぼり新堀よろずやちゆに萬屋
 忠藏うぞうと云う仲買があつて鱗の紋だから、それを二つ合せて萬屋
 の萬の字を附けたのが始りだと申しますが、不粹ぶいきな紋もあります
 が、僕のは太輪ふとわにして中を小さくし為しても抱茗荷だきみようがはいけません、

彼あれを細輪にして中を大きく出すと商あきんど人らしく成ります、形が悪うございますね、抱茗荷を太輪にすると馬の腹掛のようではないけません、ハ、ハ、ハ、ハ、

幸「静かにしねえか」

由「はい、大きな声で喋りましたが、何うでげす、彼あのツークの重次郎どんテレツクく、スツテンテンてえのは」

幸「止しなよ」

と話をして居ります。其の隣座敷に居りましたのは前申上げました奥木佐十郎という年齢としは六十六に成り、忰も嫁も死んだのでよんどころ抛ななく機織女を抱え、僅かの事で其の日を送って居りますが、一体達者な爺さんだから、今年十三に成ります孫の布卷吉と云う

ものを亀甲万へ奉公にやって置き、孫に会いに参つたのでござい
ます。

佐「これは詰らん物だけれども、宜い物を上げたつて何も彼も御
不自由のないお宅だから、是だけお祖父さんが持つて来たから、
旦那様へ上げておくれよ、お前何でも能く辛抱して、然うして、
宜いか、何も私がお前に過して貰おうてえのじゃアねえが、奥木
の家を相続するのはお前より他にはねえから、奉公は辛い、辛い
ものだけれども詰りお前の為だ、取分け朋輩衆も多からうから、
番頭さん始め若い衆から朋輩衆の機嫌を取、損わねえようにし
て、怠りなく旦那さまを大切に為なければならねえよ」
布「お祖父さん、私は奉公が厭になりましたから、今日直に足利

へ連れて帰って下さいな、誠に御無理な事を云うようでござい
すけれども、今日お前さんのおいでなすつたのは幸いでございま
すから、何卒どうぞお暇ひまを戴いて帰り、私わたしはお祖父さんの傍そばに居とうご
ざいます」

佐「お前は私わしの顔を見ると其そん様な事ばかり云う、それだから私は
滅多に顔出しをしないのだ……それは辛らいさ、辛いけれども何ど
様な人だつて奉公を為して、他人の中を見て其の苦しみをして来た
ものでなければ役には立ちません、お祖父さんの傍に置いて、何
でもはいくとお前の云うなり次第に氣儘にすれば馬鹿に成つち
まいますから、辛かろうが他人の中うちで辛抱して、何様な事でも生
涯の立つ事を覚えなければ成りません、殊に結構なたなお店で、旦那

さまもお慈悲なごけぶか深いし、文明開化の事も能く御存じのお方ゆえ、何でもすがつて居なければならぬえのに、苟かりそめにも帰りたいたいなどと云つては成りません、何だつて其様なことを云う」

五十六

布「お祖父さん、あんたは老とるお年でございますから、お父とつさんお母つかさんも死んでから、お祖父さんのお蔭で私は斯こん様に大きくなりましたが、幾いくらお達者だつて、最う六十の上六つも越して入らつしやるから、翌あすが日病みお煩わづいに成つても、お薬一服煎じて貴方に服のませるものはありませんと思えば、熱あつかったり寒ひやかったり

する度たびに気になりました、お前さんの事を朝晩忘れた事はありません：復奉公またに参りますまでも一旦は帰りとうございませうから何ど卒うそお暇を戴いて下さいまし」

佐「お前そんな事を云つては困つたなア……お祖父さんは無いものと思え、お祖父さんの事などを思つて奉公が出来るものか、お祖父さんも以前まえは大小を差して、戸田家にて假令たとえ少祿でも御扶持ごふぢを戴いたものだ、其の孫だからお前も武士さむらいの血統ちすじを引いて居るではないか、忠孝全まつたからずと云うて、奉公をする身は假令両親があつても主人つかに事うちえる中は親の事を忘れなければならんものじや、それが忠義と云うもの、お祖父さんの顔を見ると其様そんな事を云う、これから其様な事を云うとお祖父さんは最う決して構いませんよ、

わし
私も何うかしてお前の多足たそくに成るようにと思つて、年寄骨としよりぼねに機はたの仕分しを為しているのに、其様な弱い音ねを吐きくと肯きかんぞ、お祖父さんは再び此処へ来んぞ」

布「はい……お祖父さん昨夜ゆうべお祭礼まつりで講釈師こうしゃくしの桃林とうりんの弟子との桃と柳りゅうと云うのが来ましたが、始めて此処へ来たもんだから座敷

を為してやろうと旦那さまがお口をお利きなすつたもんですから、聴衆ききうでが多勢おおぜい出来ましたので、お店の方も皆な寄つて講釈を聞き
ました」

佐「ウンそれは有難い事で、足利の江川村などに居ちやア講釈でも義太夫でも芝居でも見聞みききをする事は出来やアしない」

布「その桃柳てえ講釈師こうしゃくしが金比羅御利生記こんぴらごりしやうきの読よみ続つきで、田宮坊たみやぼうた

太郎ろうが子供ながら親の仇あだを討ちました所の講釈でございまして、彼あれを聞きましてお祖父さん私は親の仇が討ちたく成りました」

佐「え、なに親の仇が」

布「へえ私わたしも茂之助の忤いもとであります、母と妹は村上松五郎とお瀧の為に彼様あんな非業の死し様ようを致しましたのは、親父が間違えて母お親ふくろを殺したんでございますが、実に驚きまして途方に暮れ、彼あの様に親父は首を縊くつて死にますような事になりましたのも、皆みんななお祖父さん村上松五郎お瀧から起つた事でございます、私わたしも子供心に二人の顔を覚えて居ますから、彼奴等あいつら二人を殺さんでは私わたしが親に対して済みませんから、何卒どうぞお暇を戴いて下さいまし」

佐「あゝ……、然うか、手前年も往かねえで能く親の仇を討とう
 てえ心になつてくれた、おくのや茂之助が草葉の蔭で此の事を聞
 いたら嘸悦ぶであろう……じゃが今の世の中では仇討と云うこ
 とは出来ないが、彼奴等は天罰でいまにお上の手に懸つて、その
 悪を為ただけの処分は屹度受けようから諦めてくれ、よ、其様な
 事を云つてくれると私が困るから」
 布「いえ、お祖父さん何卒お暇を戴いて下さい、私は最う一日も
 居られません、若しお祖父さんが私を置いて往けば、明日にも彼
 家を駈出します」
 佐「どうでも手前討つと決心したか、併し人を殺せば手前の身に
 もそれ丈の処分が附くぞ」

布「いえ私は死んでも宜しゆうございます、彼奴等二人をたとえ仮令私
 が手をおろして討ちませんでも、捕つかえてお上の手を借りましても
 思う存分にし為しませんでは腹が癒えませんか」

佐「ウム：宜し、お暇を願つて遣ろう……あゝ能く仇を討つと
 云つた」

としめやかに話をし為て居るを隣座敷で聞きました、岡村由兵衛
 が、

由「旦那えく」

幸「何だ」

由「仇を討つてえませんが何でしょう」

幸「講釈だろう」

由「ナア二少ちいさい子が仇を討つてえと、何だか傍に居る老じい爺さんが能く討つと云つたてえましたぜ」

幸「ム、もう討つたのか」

由「なに討つたとか討つとか云つてますが、此処でチョンく始まつては大変で」

幸「まさか始まりやアしめえ」

由「何でげしよう」

と岡村由兵衛が怖々廊下へ立出で、そつと障子の破れから覗くと、六十有余歳の老人と十二三に成る小僧と二人にてのひそく話、幸三郎も覗き見て、

幸「はて変だな」

と怪しみました。さて是から奥木佐十郎が茂木佐平次方へ参つて、布卷吉の暇いとまを貰つて、川蒸汽に乗りまして足利へ歸るのでございませうが、此の汽船ふねへ再び橋本幸三郎が乗合せるのも妙な訳で、上州の川かわまた俣村と云う処で筏乗の市四郎に会いますと云う、是れから敵かたきの手掛りが分ります。

五十七

野田の祇園祭でございまして、亀甲万の家うちへ奉公を致して居りまする布卷吉と云うは、今年十二歳ではありますが、至つて温和おとなしい実体じつていものでございます。祖父そふ奥木佐十郎が顔を出しに参り

ましたのを見ると、親の敵かたきが討ちたいからお暇ひまを戴かたいてくれと云うので、祖父じいが亀甲万の主人に面会致し、只ひたすら管暇ひたすらをくれるようにと頼み、幾ら止めても肯ききません。亀甲万の御主人も親切な方でございますから、懇々こんく説諭を致しました。

主人「当今は復讐などは決して無い事じゃから、そんな事は思い止とまつたら宜かろう、それより相変らず当家に奉公して居おれば私わしも彼あれの温順おとなしい事も看抜みぬいて居いるから、後々には私も力になつてやろう、年を老とつたお祖父じいさんが先に立つて仇討などという事を勧めちやアいかん、それは時節が違ちがうから、まア私の云う事を肯きいて思い止とまなさい」

と種々さまざまに意見を加えましたが、一かた方くが頑固な老爺じいさんで肯き

ませんから、そんならば暇をやろうと万事行^{ゆきとぎ}届いた茂木佐平治
 さんだから多分の手当を致^してくれ、今上川岸^{いまかみがし}の舁^{ます}田と申す出船宿
 から乗船切符まで買うて与えました。是から出船宿へ参るには、
 太田屋と申します宿屋の向^{むこう}横^{よこ}町^{ちやう}を真^ま直^つに這入りますと、
 突当りに香取神社^{かとり}の鳥居がありまして、傍^{わき}に青面金剛^{せいめんこんごう}と彫付^{ほりつ}
 けた巨^{おお}きな石塚が建つて居ります。鳥居から右へ曲ると高梨の家^{うち}
 で、左右森のように成つて居り、二行の敷石がございまして、是
 からずいと突当ると小高い堤^{どて}が有ります。其^{それ}処^{あが}を上つてだら／＼
 と下^{おり}ると川岸でございます。此^{こゝ}処^{ところ}に出船茶屋があります。升田^{ますだ}仁
 右衛門^{にえもん}と申しては彼の^あ辺^へきつての好^よい出船宿でございます。船へ
 乗りますお客は皆早く此家^{こゝ}へ参りまして待受けて居ります。切符

を買つたり弁当拵えの支度をするとか、或は菓子を買つて入れるなど多勢がごた／＼して居ります中に、前申上げました橋本幸三郎、岡村由兵衛の二人が野田から参りまして、先刻から出船を待つて居ります。

由「旦那、只何うも私が今日驚きましたのは、彼のツク乗りで、何うも倒さまに紐へ吊下つて重次郎さんが下つて参ります処には驚きました」

幸「彼はまア珍らしいなア」

由「珍らしいなんて実に見る事は出来ませんよ、灯台下暗しで、東京の近処で彼様な変つたお祭の有る事を是まで些とも知らずに居りましたが、実に何うも不思議、へ、へ、彼のテレツクくな

んぞは悉すつかり皆覺えましたが、重次郎さんの扮装なりてえのは恰まるで角兵衛獅子でございますね、白の着物に赤い袴もえぎいろで萌黄色もえぎいろのきれの附あいている物を頭部あたまに冠かぶつて、あれで獅子が附あいてれば角兵衛獅子だが、彼あれは蛙だから重次郎蛙です、只々重次郎さんの出て来る処あが不思議でげすが、彼様あんなな事は開化あの今こんにち日は種切れあに成りそうなもんだが、代々重次郎さんてえものが出るのが訝おかしいね、彼あれで乗そこなり損あつて死あんじまうと、ツクの下へ死骸あを埋うめるのが法あだと云あいますあが妙あでげすねえ」

幸あ「おい／＼汽笛あが聞あえるようだぜ、汽船ふねが来たんじやアないか」
由あ「然そうでげすな……おツ旦那あ月あが登あつて来あました、好ようがすな
ア、月の光あで川あの様子あを見あながら参ありますと退屈あ凌あぎあになりあます

よ……あ来ました〜お前さん此の鞆を持って、下さい」

下女「笛が聞えたつて彼あれでまアだ半道程も先だアから、緩ゆっくり支度をしておいでなせえましよ」

由「でも、ピー〜と川へ響けて大層聞えますね……何わっだか私ア気が急せきますから、旦那徐そろ々支度をなさいな……大きに姉さんお世話さま、お茶代は此処へ置きましたよ」

下女「これは有難うございます、まア御緩ごゆっくりおいでなせえましよ、滅多に汽船ふねは来ませんから」

由「来きなくつても先へ出て居た方が宜しい、へ〜〜〜呑氣どでございますね」

幸「田舎は是だけが宜いいのう」

五十八

由「姉さん、棧橋が何処にかありませんかい」

下女「はい、今度出来るてえ事ですが、まだ無えだから、堤どての草へ掴つかまつて下りるだアね」

由「草へ掴つかまつて：危あぶえなア、早く棧橋を拵こせえたら宜さそうなものだ……すべ迂すべりやアしないかい」

下女「大丈夫でござえますよ、慣れてるものは船へ飛込むだが、岸の方は水が来ねえから泥が深くなつてますよ」

由「深い……困こつたねえ、ずぶりと這入こつちやア大變でげすから、

船が来たら板か何か向へ渡して貰いましょう」

下女「慣れた人は皆跨いで船へ打飛んで這入りますよ」

由「此方は慣れねえから打飛べねえよ」

と云つて居る中にシヤ／＼／＼／＼と汽船が忽ちに走つて参り

ました。其の頃には通運丸と永島丸とありまして、永島の方

は競争して大勉強でございます。

幸「さア／＼お前先に這入んなよ」

由「宜うございますから、荷物は後からとして……上等の方は何

方だえ、なに此方だ、大變だなア……これは危い、ちよいと貴方

此の鞆を持って、頂戴……両手でなければ逆もいけません、ズブ

／＼と這入つちやア大變でげすからナ……へえ御免なさい／＼……

これはく、何うも旦那御覧じろ、恰まるで鮪を転がしたように皆みんななゴ
 ロく寝ていますが、上等の方でさえ是れでけすもの、下等の方
 はゴタゴタして大変なもんですぜ……此の通り実はすいて居るの
 だが皆な寝ているので幅を取つちまいますが、仕方もありません、
しか併しね旦那、此処に包ちやあんや何か整然と掛ける処しが出来てるのは流石さすが
 に手当が届いて居ますね……蝙蝠傘などを窃どろぼう取されるといかね
 えから此処へ斯う纏まとめて置いて……貴方最う少し其方そっちへお寄んな
 さいな、此処を広くしていきましょう……貴方寝ねぼ蓋おほけて居ますか、
 アハ、野田に遊んでたので何んだか百姓ばかり乗つて居るよう
 な心持が致しますね……おいボーイさん、火を持って来ておくれ
 な……なにマチが這入つて居ると、マチはあつても宜いいから火を

一つ持つてお出な……淋しくつていけねえから……なに夜は火はない、虚言ばかり吐いて居る、面倒だもんだから彼様な事を云つてる」

とマチで火を擦付け、煙草に移し一口吸い、

由「フー……これで何んでげすね、今夜一晚船の中では何うで寝られませんか、東京からスイと来て上州の川俣村まで往くにやア随分退屈は退屈でげすな……おツ是は大変に蚊が居ますね、傍からく這入つて来ます事、是は恐入りましたなア……永島さん早く船を出す訳には参りませんか」

水夫「荷が悉皆這入らねえじやア出しません」

由「荷てえば大層転つてますね」

と見ますると、傍に居ましたのは年の頃二十七八にも成りましようか、大丸髻の婦人で、色の黒い処へベルモットでも飲んだよ
うな顔付で、鼻が忌^{いや}アに段鼻になつて、眼の小さな口の大きい方
で、服装は木綿縮^{なり もめんちぢみ}の浅黄地に能模様丸紋手^{のうもようまるもんで}の単物^{ひとえもの}に唐
繻子^{ゆす}の帯を〆《し》め、丸髻には浅黄鹿の子の手柄を掛けて居
ます、朱縮緬の帯止をこてく巻付けて、仕入物の蒔絵^{まきえ}の櫛に鍍
金足^{つきあし}に土佐玉^{かんざし}の簪で、何処ともなく厭味の女が、慣れくしく、
女「貴方^{ごちら}此方へ入らつしやいまし、御緩^{ごゆる}りお坐りなさい」
由「へえ有難うございます、誠にお邪魔さままで」
女「お婆さん其の包みを脊負^{しよ}つておいでよ…貴方方は東京^{とうけい}でい
らつしやいますか」

由「えゝ東京で」

女「東京のお方と聞くとお懐かしゆうございますこと」

由「貴方も東京でございますか」

女「はい私わたくしは足利の方の親類共に厄介に成つて居りまして、時々博覧会や何か有りますと東京へ参りますが、上野はまた別でござ
いますね」

由「へえ左様です」

女「今度の博覧会は立派な事でございますね」

由「えゝ盛大な事でございます」

女「大して人が出ますね」

由「えゝ出品物ものも余程多い事でございます」

五十九

女「私もそれから彼方あっちこっち此方と見物も致しましたが、私は此の様にふと肥つてますもんですから、股が縮むすくようでも何だかがっかり致しますので、それから何でございますね、弁天から上野の辺が誠に綺麗に成りましたこと、それに松まつげん源とりやそ鳥八十などと云う料理茶屋も立派に普請が出来ましたね」

由「えゝ大層……立派に普請が出来ました」

女「それに花火の仕掛ものなどは昔とは全然すつかり違つてしまいました」

由「えゝ大した勉強な事で」

女「是までの東京とうけいの玉屋鍵屋などで拵える仕掛とは違ひまして、ポツポと赤い火や青い火が燃えまして誠に不思議で、あの水の中をチュク〜と走つて歩くのは彼あれア何てえのでございましょう」

由「へえ何てえますか私は知りません」

女「貴方は新富町しんとみちようへいらつしやいましたか」

由「えゝ参りました」

女「大層巧よく演いたじますね、今度の狂言は中々大入で、私が参りましたら一杯で、尤も土曜日でございましたが、ぎつしりでございましたよ」

由「へえ、土曜日曜は大入で」

女「團十郎なりたやは何うも巧うまいもんでございますね、渋い事をさせては

彼の位あの役者はございませぬね、他の役者ほかとは違ちがいますね、むずかしい事を致しますが、実に巧うまいもんで

由「え、堀越ほりこしは別でございます」

女「それに菊五郎は上手なことで、左團次さんも巧うまいものですが、菊五郎と左團次と一対揃そろって巧うまいものでございますね」

由「へえ彼あれは中々巧うまいもので」

女「小團次こだんじは大層役者を上げましたね、それに私は福助しんこまの人気の有るには本当に驚おどろきましたよ、往來そとを福助ふくすけが通ると私共わたくしどものよう

な者まで駈出かきだして見る気になりますのは別で、また娘むすめなぞに成ると実に綺麗きれいでございませぬ」

由「え、誠に綺麗で……（小さな声で）これは延べつだ」

女「大層綺麗で人気の有ることは別でございますから、何うかして身体を快くして遣りとう存じまして、私も心配致して居りますが、何う云うものでございましょう、癒りましようかね」

由「へえ癒るかも知れません、松本先生などがお骨折ですから癒りましよう」

女「それに家橘が大層渋く成りましたのに、松助が大層上手に成りましたことね、それに榮之助に源之助が綺麗でございませぬ」

由「え、彼は誠に綺麗な事で……これは堪らん、旦那少し代つて下さいまし、私は小便に往きますから」

女「お手水は其方そちらじゃアいけません此方こちらでございますよ」

由「へえ種々いろいろ御親切に有難う存じます」

と由兵衛はこそく逃しました跡で、彼の女かは橋本幸三郎に向いまして、

女「貴方も東京のお方で」

幸「へえ」

女「彼の方あと何方どちらへいらつしやいますの」

幸「私わたくしは足利まで参りますので」

女「おやまアお嬉しいこと私も足利へ参りますの、私は足利町五丁目の親類共に居りまする吉田屋よしだやのふみと云うもので、何うか些ちつとお訪ね下さいまし」

幸「左様でございますか」

女「貴方は足利は何方でございます」

幸「へ、極く外れの野暮な処へ参りますが、何れいずまたお訪ね申
しましよ」

女「何卒どうぞ入らしつて下さいましよ」

幸「有難うございます」

女「私は五丁目に居りますので、右側の何でございますよ、貴方
は」

幸「へい栄町の変な処とこを這入つて桐生の方へ参る道でございます
よ」

女「へえ左様でございますか」

幸「由さん早く来ておくれよ」

由「まだ話が途切れませんか、是は驚きましたな」

と云つて居る中に船が出ました。また寶珠鼻へ着くと乗込む

ものも有り、是から関宿へ着きますと荷物が這入るので余程手

間がかゝり、堺へ参りますと此処にて乗替え、栗橋へ参り、旭

が昇つて川に映り、よい景色でございます。栗橋から上州の川俣

という処へ船が着きますと、かれこれ十時、宜い塩梅に天気もよ

く皆々客は上りましたから一同大きに安心致しました。是から幸

三郎由兵衛も上ることに成りますと、いゝ塩梅に彼の段鼻の大年

増も居なく成つたから、二人はホツト息を吐きました。

六十

由「旦那何うでございました」

幸「何うも本当に驚いちゃった」

由「吉川屋よしかわやてえ料理屋は此処でげす、昨夜ゆうべ彼の女あにのべつに喋しゃ

られたので私ア胸が一杯に成りました……さア這入りましょう」

下女「此方こつちへお掛けなさいまし……此方へお上りなさいまし」

由「何処か斯う景色の好いい、見晴しの有る、風かざ通とおしの好いい、し

んとした、乙に賑やかな処とこがありませんか」

幸「そんなむずかしい処とこがあるものかアね」

女「此方こちらへ入らっしゃいますし」

由「昨夜は些ちつとも寝られませんでしたから、此処で昼寝をして顔を洗つてから、何か誂あつらい物を致しましょう……姉さん何が出来るかい」

女「鯉どじょうこくに玉子焼鰯でがんです」

由「結構、じゃアその鯉どじょうこくに玉子焼でお酒の好いのを、と云つた処ところが別に好いのもあるまいが、成たけ氣を付けておくれ、兎に角顔を洗つて参りましょう」

女「お顔をお洗いなさるなら此方こつちへ入らつしやいまし」

と下婢おんなの案内に従つて顔を洗つて参り、

幸「浴衣が湿しめついたから」

と着物を着換え、酒も飲み、御飯ごぜんも喫たべてから昼寝をしようか

と思ひますと、折おり悪あしうドードツと車軸を流すばかりの強雨おおぶりと成りましたから立つ事が出来ません、其の中うちに彼の辺あは筑波は近し、赤城山あかぎさんへも左のみ遠くありませんから、ガラ／＼／＼と雷が烈しく鳴って参り、二三ヶ所へ落雷致しましたので立つ事も出来ず、ぐず／＼して居ます中うちに、午後の四時半時分に成ると、フーと雲が切れましたから幸三郎も由兵衛もホツと息を吐つきました。

幸「是から立つてえのも遅いから今夜は此処へ泊ろうじゃアねえか」

と皆泊りも多うございますから宿屋でも気を利かして湯を立つてくれました。

由「旦那わたくし私は雷にやア驚きました、お湯へ入いれただけは当こ処も中々気が利いてますね」

幸「ウン此処うちの家は宜く手当ゆきとぎが行届くねえ」

由「大届しきでげすとも、併しかし私は雷は大嫌ひどいだね、甚ひどく怖こうござ
いました、尤も雷が怖こいてえ顔付かほづでもありませんが、今の雷と昨ゆ
夜うべの段鼻だんばの大年増おとこには実に驚おどきました、貴方あなたの様子ようじの好いい処ところから
ちよいと横目よこめでキョトく見みたりして、本ほん当とうに嫌いやでございました
な、のべつに喋しゃべつてさ」

幸「然そうさ、併しし雷と云いえば四万よんまんで一おおがみなり大雷鳴おほいかみなりに遭あつて驚おどいた
つけな」

由「左様さやうさ、宿屋しゆくやの裏うらの口くちへ落おつた時ときには驚おどきましたね」

幸「此の頃ではかみなりよけ雷 避かみなりよけが出来たので安心だが、日光へ往った時に霧降きりふりの滝へ往く途中ゆで大雨大雷鳴に出会い、甚く困ったが、

あの時を思えば霧降の滝壺まで下りたつけねえ」

由「それは何んですが、伊香保でお癪を起した御新造ね、彼あのく
らいまた人柄よの善い御新造も沢山たんとはありませんね、お可愛そうに

世の中の事を御存じないのだから驚きましたろう、峰松と云う車く
夫るまひきが騙だまして引摺り出して、折田村で正直あいつそうな彼奴あいつがやった

てえのでげすが、彼奴が鞆が残つてあつたと云い持つて来たのが
手で、お金は入りません、車に残つたものをお届け申すのはあたり当

然まえの事だてえのでげすから、誰たれも一杯喰おうじゃありません

か、つい正直者と思つて次の間へ置きました、どっちりお金の這

入つて居た大鞆は木暮の方へ預けて置いたから宜うございましたが、然うでないとは様な目に遭つたかも知れませんが、何しろ暇を潰した上に四万では大御散財でございましたが、關善へ大きな男が談判に来た時にやア私は本当に怖うございましたよ、首を捻るなんて親切ものだから、烈しく掛合われた時には本当に驚きました」

幸「彼の時は怖かつたな、彼の時に種々災難の重なつたのも詰りお母さんが止せと仰しやつたのを無理に出たから悪かつたが、鈴木屋に働いていた彼のおりゆうには驚いた」

由「え、彼奴には喰つたね、ポロ／＼涙を零して、え、何とか云いましたつけ、私は瀧川左京のお嬢さままでございますつて身の上話を並べたから、此方もホロリと来て、あ、お気の毒だつて、貴

方はお慈悲なげふか深いもんだから五十円で身の代しろをくぎって、東京へ連れて来て権妻になすつて、目を掛けておやんなすつたが、実に怖いな、漸々だん／＼様子を聞けば芝居町の芸者で小瀧と云う奴だ
 そうで」

幸「私わしが東京へ連れて来ると芝居を觀みるのも厭だ、物見遊山は嫌いだ、外へ出るのは厭だと神妙らしく云つたのは、本当に出嫌いではなくって、実はお尋ねもの、日向見ひなたみお瀧と云う奴で、真実おとな温順しいのではない、何処へも出て歩く事が出来ねえんだ」
 由「亭主は村上何んとか……ウン松五郎てえ肩書の有る旅稼ぎだ
 そうでげすが、得て湯場などには然う云う奴がありますね」

六十一

幸「おい／＼此処でうっかりお尋ねもんだなんて、彼奴あいつの事ア喋
られませんか」

由「へえ：彼女きやつもあゝ云う目に遭つたのは罰ばちでげすね、だが橋場
の御別荘へ押込の這入つた時には私は驚いて腰が脱けちまいまし
た、あゝ血が流れて居るのを見たが、実に何うも彼様あんな忌いやな心持
はありませんね、何んとか云うお女中が其方そっちから這入つちやアい
けません、此方こっちへ往ゆくと其処に泥坊が居りますよと云われた時に
やア私わっちアとつちたね、併しかしまア彼の女あは天罰で賊きりころに斬殺され、
棧橋から投ほうり込まれたのでげすが、彼あれも矢張悪事の罰ばちだろうね」

幸「ウン彼奴もきやつ 窃ぬす 盗ツ をする奴だが、お瀧も矢張りお尋ねもの悪党だから殺されたって却って私はわし 好い気味ぐらいに思つて居るが、彼のお駒と云う小女は誠に可愛あ そうな事をしたね」

由「そうくお母さんが来ておいく泣いて居た時には、流石のさすが わちもわち 氣の毒に思いましたが、おたきの死骸は未だに知れませんかえ」

幸「まだ知れねえが、多分海へ流されて、天罰だから何処かの岸へ打揚げられ、鳥に喙つ かれるぐらいの事は何うしたってなければならぬよ」

と話をして居ると、唐突だしぬけ に一人の老爺おやじ が後の襖うしろ を開けて這入つて参りまして、

老「はい御免下さい」

由「はい……おや旦那、何処かの老爺おじいさんが這入つて来ましたよ」

老「はい御免下さい……え、只今隣の席で承わりましたが、何かソノ村上松五郎と申すものにお瀧と申す者が盗賊に殺されて、川へ投り込まれ、死骸が知れんとか云う事をちよつと承りましたが、貴方がたは其の松五郎と申すもの、行方くわや何か精しく御存じの御様子で」

と問われて兩人は恟びつくりして互に顔を見合わせ、小声にて

幸「だから無闇に喋舌しゃべつちやアいけねえてんだ、掛かゝりあい合あに成る

よ、此の事に付いて一昨年大變に難儀をした者があるんだよ」

由兵衛は胸は早鐘、どぎまぎしながら此方こちらに向い両手を突き、

由「へえ入らっしやいまし、私わたくしども共は何も知って居る訳じやア
ありませんが……ちよいと只今……へえ人の噂を聞きまして、ち
よいとおちやツぴいを致しましたので、精しく知つてると云う訳
じやアありません、只人の噂を聞きましただけの事で」
老「それでも何かお瀧と云うものを尊宅あなたへお連れ帰りなすつて、
目を掛けお使いなすつた処が、其の者が案外盗賊どろぼうで、これこれ
いうお尋ね者ゆえ、あゝ云う死しによう様をするのも天罰だと仰しやつ
たが、貴方は何方どちらのお方さまか知りませんが、お瀧を奉公人にて
もしてお使いなすつた事でございませうが、仰しやつて下さい
ませんと、私わたくしの方に些ちつと困る事がありまするので、何卒どうぞお隠しな
さらず仰せ聞けられて下さい」

由「これは驚きましたなア……」

幸「お前は余りペラ／＼喋るからいけないんだ、旅だアな、此様な処で探偵にでも捕まって調べられると日数ひかずがかゝるよ、四万でも二週間程余計に逗留したじゃアねえか」

由「へえ……貴方ソノ何んでげすソノ……へエ何んで」

幸「何を云つてるんだ」

由「実はソノ何んでげす、此の旦那あが彼のお瀧という女を正直者だと思召して、田舎から東京とうけいへ連れて来て、少しばかり雇やといに人のようにしてお使いなすって居らつしやると、盗賊とうぞくが這入り

まして斬殺きりころされ、未だに死骸が知れませんでげすが、貴方もお掛合いてえ訳でございますか」

老「いや掛合と云う訳ではございませんが、少し調べなければならぬ事が有ると云うは、其の村上松五郎と申すものゝ事で」

由「へえくくく」

老「何卒どうぞ細かに仰せ聞けられて下さい、若しも隠し立をなさると何処までもお附き申して質たゞさねばならん事があります」

由「へえ、これは恐れ入りましたなア旦那」

六十二

幸「お前本当に困るじゃねえか、余計な事を云うからいけねえんだ……何卒どうぞ御勘弁なすつて」

老「いや貴方が何も私わしに謝る訳はないが、ちよつとお姓名なまえだけを承わつて置きましたようか」

幸「へえ……」

老「いやさ御姓名ごせいめいを一寸認めて置きたいから」

幸「へえ……真ま平御免なすつて」

老「何も謝る事はありませんよ、御姓名だけを」

幸「へえ、何う云う何ですか掛合なれば仕方ありませんが、私わたくしも彼あれを正道しょうどうな女と存じまして、お屋敷ものが零落おちぶれて斯様に

難儀をして居るとはお気の毒な事だ、あゝ不憫だと思ひまして、

多分の金子を出して彼の身請を致し、東京へ連帰つて私の妾てかけにして、橋場の別荘へ置きました処が、盜賊が這入りまして斬殺きりころさ

れ、いまだに死骸が知れませんが、尤も其の筋へお届けには成
 ったて居りますが、お再さい調しらべに成りましても当人は助かつて居り
 ますか助かつて居りませんか、其処は分りませんので、へえ」

老「ム、一貴方は何と云うお姓名なまえだ」

幸「え、私は橋本幸三郎と申します」

老「ム一橋本幸三郎」

と手帳へ認しため、

老「お宿所は」

幸「霊岸島河口町四十八番地で」

老「ウン……貴方は」

由「え、私わたくし……あの、へ、へ、私が何もソノ妾てかけにしたと云う訳でも

何でもないので、私は只此の旦那の家うちへ時々出這入つて御用事を

伺うだけの事でげすから、へへへ」

老「いや精くわしい事を御存じだろうから、仰しやらんなら私わたくしと一緒に

に同道していらつしやい、御姓名おなまえぐらい伺うのは当あたりまえ然わたくしの事だ」

由「へえ……えへ私わたくしは木挽町で」

老「木挽町……」

由「三十六番地で、へえ」

老「御姓名おなまえは」

由「岡村由兵衛」

老「お神樂かぐら」

由「お神樂じゃありません、幾らひよつとこ見たよ様な顔でも

……岡村由兵衛」

老「ウン……そこで村上松五郎と申すものゝ行方は慥たしかに知れませんか、更に心当りもございませんか」

由「へえ、それは素もとより知らん奴でございますから」

老「で、そのお瀧と申すものは慥きりころに賊に斬殺され川の中へ陥はまりまして、いまだに死骸も知れませんか」

由「へえ死骸も知れないのでございます」

老「愈々いよく知れませんか」

由「へい知れませのでございます」

と云切ると、襖の蔭で何者か知れませんがワーツと声を揚げて泣出しましたから、由兵衛は驚きましたの驚かないなんて顔色を

変えて、

由「あゝ誰か泣きました」

というと、彼の老人は静かに後うしろみかえを顧り、

老「泣くなく泣いたつて致し方がないから此処へ出ろ、泣いたつて何うなるものか、見みつともない、声を出して泣くなんて男らしくもない、何んだ」

由「旦那、まだ誰か居るんで、此の人は年寄だから何んでげすけれども、若い人が出て来ると大きに怖いような訳ですが……誰たれかいらつしやいますので」

と云つて居る処へ泣きながら出て参りましたのは、今年十三に成りまする布卷吉と云う小僧だから大きに安心を致しました。

由「子供なら安心を致しました……が何ういう訳でお泣きなすつた」

老「はい……此者は私の秘蔵な孫でございませうが、松五郎お瀧の行方を探して居る身の上で、此者が両親と申すものは其のお瀧松五郎ゆえに非業な死を遂げましたのは、此者が七歳の折でございませうが、何うかして両親の敵を討ちたいと子心にも心掛け、奉公中暇を取つて立帰り、其の者を取押えて、手に合わんときにはお上のお手を借りても親の仇を討ちたいと心掛けて居ります、処が敵と狙うお瀧めが今お話の通り死骸も知れんように成つたと承わり、残念に存じまして此者が泣きましたので」

由「へえー御兩人は野田の太田屋で隣座敷に居たお方でございま

すね、此のお子のお父さんお母さんまで非業に殺しましたと、へえー彼奴ア幾人人を殺したか知れねえ」

と話をして居ますと、唐突に隔ての襖をガラリ引開け這入つて来たは大きな男で、

男「はい御免なせえ」

幸「はい」

と何者かと首を擡げて見ると、筏乗市四郎でございます。

六十三

幸三郎も由兵衛も驚きました。

市「え、老爺おじいさん、お前まへさんに又此処こゝでお目に懸かるてえのは誠に深ふけえ御縁ごゑんかと思おもつてるのよ……貴方あんたは慥たしか四万よんまんの關善くわんぜんでお目に懸かつた橋本幸三はしもとゆきさんさんてえお方でげしよう、裁判沙汰さいばんさたになつて警察けいさつへも毎度まいど出いましたが、毎まいもまアお達者たつぱで」

幸「これは思い掛かけない、親方おやぢで、由よしさんソレ筏乗わだかまの市四郎いちしやうさんだよ」

由「これは何なにうも御機嫌ごきげん宜よろしゆう……先刻さつきもちよいとお噂うわさを致いたしましたが、是これは何なにうも……今度こんどは首捻くびねじりじやアないのでしよう」市「いや貴方あんたは由兵衛よしべゑさんとか仰おほしやつたね……あの折なげは永ながえ間まお目に懸かり、また歸かへり際ぎわいには飛とんだ御馳走ごちそうになりました、何なにんとハアお手当あてをね沢山たくさんに遣やつてくれろと云いつて下くだすつたが、彼あのお

藤さまと云う御新造が堅い人だもんだから中々受けませんでした
が、彼の後私のわしも時々参りますがね、何時でもハア貴方のお噂ばかり
致して居りやすだ」

幸「いや何うも誠に思い掛けない事で、そして親方は何方どちらへ」

市「なに関宿まで参りやしたが野田の祭を見ようと思つて往くと、

此の老爺じいさんが此の子に意見しているのを私わしが隣座敷で聞くと、

此の子が、田宮坊太郎の講釈を聞いてから急に敵が討ちたくなつ

たから、お祖父じいさん暇ひまを取つておくんなせえと云うと、此の老爺

さんが今の世の中には敵討は無ねえ事だ、其そん様な事をすると汝われが御

処刑しおきを受ける、駄目だから止せてえと、御処刑を受けても殺され

ても、己おらア死んだ両親の恨みを晴らさねえば子の道が済まぬと云

うのを聞いて、私は隣座敷で胸が一杯になつて涙をこぼしながら聞いて居やした、それから汽船へ乗ると船で会い、また此処で一緒に成るとは何とまあ深ふけえ御縁かと思つてるだ、併しかし其の相手の村上松五郎てえ奴は、旧もとア侍だとむれえと聞きいてるから、此こ様な小せえ子に敵の討てる訳もなしするから、若もし劍術でも習まいてえなら、私の御主人筋の人が劍術が偉ええから其そ処へ往ゆつて稽古をさせてよ、自分で敵を討たねえまでも劍術が習まいたくば其の人に頼たのんで、お前めえの志を話したら、あゝ感心な訳だ、己おらア家うちに置おいて劍術を教おえてくれべえと云つて、引取つてやろうと仰おしやるに違ちがえねえから、己おらアお前まえを其家そこへお連れ申まそうと思つて、入いらざる事だが、十二や十三で親の敵を討うつてえ心が感心だから、愈いよ々くてえ時にア

頼まれやしねえが己おれも助太刀に出て、その松五郎てえ奴の首でも捻つてやろうと思うんだ」

由「へエ、昨日野田きのうの太田屋でソレ申し貴方、隣座敷に居たのは老爺じいさんと此の子でございますか、それを聞いて此の市四郎さんが御親切な親方ゆえ……首くびねじ捻りは恐入りましたが、お力がありますからね、そう云う奴の首は捻ひねつても宜いいでげすからね」

幸「へえー成程妙な訳で」

市「私わしも是れから帰り掛けにちよつくら顔を出さねえばなんねえが、此の瑞穂野村みずほのむらてえ処ところに万福寺まんぶくじと云うお寺があるんだ、其処にもと九段坂上に居た久留島修理くるしましゆりさまてえ方が田地を買つて、有ゆ福うふくに隠居をなすつて在いらつしやる。其処ところにね橋本あんたさん貴方あなたが伊

香保で世話アして上げたお藤さまが女隠居になつて居るだ」

幸「へえー、そりやア何うも思い掛けない事で……何んでげすか、一時は谷中の団子坂下に入らつしやる事を聞きましたか、それじやア此の頃では田舎へ引込んで入らつしやるのですか」

市「久留島さまと少々御縁引であるから、己ア方へ来るが宜え

と引取られてるんだそうだが、御亭主も妹も去年お死去りなすつ

て、久留島さまが引取つて、小せえ家へ這入り、田地を買つて樂

にしてお在なさるが、私も久留島さまへ出入ではいるから、彼れが御

縁になつて時々お藤さまを訪ねると、先方むこうさまでもやれこれ仰し

やつて下さるから、私もハア時々機嫌聞きに往くと、種々結構

な物を戴きやすが、其の度に伊香保で癪を起して種々お世話にな

つたが、彼の橋本さんの御恩は忘れられねえつて貴方の事ばかり
 云つてますぜ……どうせ館林へ出て足利まで往くのなら、瑞穂野
 へは通り道で遠くもねえから、私と一緒においでなさらねえか」

六十四

由「へえー何うも是れは思い掛けない事で、矢張やっぱりこれは御縁があ
 るのでげす、彼の時から岡惚れをして居たので、いまだに忘れな
 いで居て、貴方が会うとまた尚お惚れますぜ」

幸「止しねえな」

由「親方は非是れはお供を願いたいもので、此の旦那は大変な御

親切な方で、彼の御新造がお癩を起した時などは大骨折りで、御介抱をなすつて寝ずに撫さすつて上げなすつた位で」

幸「其その様な事はありやアしない」

由「なに……此の坊ちゃんなんの劍術習いや何かなんもありますから私共も共々に往つて願ひましょう」

幸「余計な事を云いなさんな……私わたくしも誠に久し振でお目に懸りと
う存じますから、何うか御案内を願ひたいもので」

市「え、参りましょうが今夜は最う遅いから明日あすの事に致しまし
よう」

と是れから酒を酌くみかわ交せ、橋本幸三郎が彼かの老人にも御馳走を
致し、翌日腕車くるまで瑞穂野村なる万福寺へ参つて見ると、樹木繁茂

致し、また一面に田畑も見晴しの好い処で、生垣にてちよつとし
た門形もんがたの処とこを這入りまして、

市「はい御免なさい、御免なせえ、何んとか云つたつけお女中：
…」

女中「はい……おやおいでなさい……旦那、彼のあ筏乗の市さんと
云う方が参りましたよ」

修「然そうか……おゝ能く出て来たなア、堅いから時々訪ずれてく
れて誠かたじに忝かたじけない……さア此方こつちへお出で」

市「これは殿さま、其ののち後は誠まことに御無沙汰を致しやした、ちよい
と上らねえばなんねえが、遂つい々御無沙汰になりました相済みま
せん」

修「此の間は結構な茸をくれて大層旨かったが、今は初もの
う」

市「然うかね」

修「今日は何処へ」

市「なに関宿まで参りめえやして、野田へ廻ったり何かして、蒸汽で
川俣まで参りまして雨に降られやしたが、でけえ雷かみなり鳴で驚きや
した、今朝は腕車くるまで此処まで参りました」

修「道理で大層早いと思つた」

市「え、殿さま、今日私わしイ貴方あんたに折入つて願ねげえがあつて参りめえやし
たが、貴方何うかお庭で剣術ウ教えて下せえな」

修「何んだえ、唐だしぬけ突に剣術を教えてくれてえのは」

市「へえ……お前めえさまマア此方こつちへ這入んなせえ……旦那さま此の子でござえますが、まア年齢としイいかねえけれども劍術を習いてえと云うだ」

修「はいく、さアく此方こちらへお這入り、おゝ大分人柄だいぶな可愛らしい兎こだが、今の世の中で武芸を習ったつて廃すたれもので無駄だが、マア何う云う訳で」

市「何でもハア嗜すきで習いてえので」

修「ム、ー……何処どこの者だえ」

市「おい老爺おじいさん此方こつちへ這入んなせえ」

老「はい御免下さい、えゝお初にお目に懸ります、手前は足利在江川村と申します処に住み、微かに暮す奥木佐十郎と申す者であ

ります、お見知り置かれまして己後御別懇に願います：え、此の子は私の孫でございりますが、武芸を習いたいと云う心掛けで、実は是れまで商家へ奉公させて置きました、強つて武芸を習いたいと申すので、主人方の暇を取り連れ戻る途中において、不図した事にて此の親方にお目に懸りました処、これくの殿さまが當時御隠居なすつて在つしやるから、劍術を教えて下さるようお願いしてやろう、と此方の勧めに任せて御無理を願いに参りましたが、何卒お手許へお置き遊ばして、お役にも立ちますまいが、使ひ早間にお使い下され、お暇の節には劍術を教えて下さるようお願いしよう存じます」

修「是れはお前の子か」

佐「いえ孫でございます」

修「左様か、妙だなア劍術を習いたいというのは……老爺おしいさんは
矢張やっぱり商人かえ」

六十五

佐「へえ只今では機屋を致して居りますが、前ぜん々／＼はへへ、戸と
田采女だうねめ匠のしょう 家来で」

修「あゝ足利の、左様かえ……矢張やっぱり武士の家に生れた子供だけあ
つて、劍術を習いたいと云うは妙だな」

市「へえ妙でござえます、尤も是には種々いろく訳もありませんが、パ

ツとなつちやア此の子の望も叶わねえ訳でござから申しませんが、
 まアお手許へ置いて使つて下せえまし、流石の私も魂消て泣えた
 ねえ」

修「はア……其方が泣いた」

市「へえ、後日で分りますが、さアと云う訳になつて、ア、然う
 かけてえば貴方も泣かねえばなんねえ」

修「はてね、何う云う理由で私が泣かなければならんか」

市「何う云う訳つて……云えばなア老爺さま……訳は云えねえが
 置いて下すつて無闇に剣術を教えて下せえまし……お前も遠慮し
 ちやア駄目だから、旦那さまのお暇の時には一本願えますつて、
 宜いか、私も筏乗で力業ア嗜だから時々来て一緒にやる事も

あるから……旦那さま実に此の子ぐれえ感心な者はありませんよ、私イハア胸えいっぺえ一杯になりやしたが、貴方あんたも屹度泣くよ……それからアノ御隠居さまは相変らず御機嫌宜しゅうござえますかえ」

修「ウン藤か、ハ、ハ、藤や、ちよつと此処へおいで、市四郎が来たから」

と云われてお藤は奥より出て参り、

藤「おやまあ能く出ておいでだ、毎度尋ねておくれで誠に有難う」

市「はい御機嫌宜しゅう……何時もお若いね御器量の善いいてえものは違つたもんで、今日は貴方あんたの大嗜だいすきな人を連れて来ましたよ」

藤「妾わたしの大嗜だいすきな……兼かね吉きちという百姓かい」

市「あ、なに……さア貴方あんた此方こつちへお這入りなせえましよ」

幸「是は何うもお懐かしゆうございます…」

藤「おやまア：何うも……由兵衛さんも」

由「へえ、マ有難い事で、是まで貴方のお噂たら／＼でげすが、斯う云う処にいらつしやろうとは些ちつとも知りませんが、昨夜ゆうべも今日さきほども先刻さきほどまでも貴方のお噂うわさが漸々よう／＼重なつて、ポンと衝突ぶつかつて此処でお目にかゝるなんてえのは誠に不思議でげすが、些ちつともお變りがありませんな」

市「へえ、なに是には種々いろ／＼深い訳もありますけれども、其様そんな事は構わないで……昨日きのう図らず一緒になつて、貴方あなたの話をしたら何うかお目にかゝりたいと仰しやつて、どうせ足利まで往らつしやるから通り路の事ゆえ、私わしが御案内をしてお連れ申して来やし

た」

藤「さア何卒どうぞ此方へ……あなた、何時もお話を致しますお方で」

修「ウン、成程伊香保で御懇命ごこんめいを蒙こうむった……是は始めて御意得

ます、予かね／＼々々此の者からお噂ばかり聞いて居りますが、此者これは

私の姪筋めいすじに当る者でござるが、不幸にして男縁がなく、許いいなず

嫁け見たようなものもありましたが、不縁になつたり、其の者が

死にましたり、種々いろく理由わけがありまして、年若の者を女隠居とす

るも不憫なれども、再縁致す了簡がないと申して独身ひとりで居ります

が、常々貴方のお噂ばかりで……成程橋本さんは大分好いい男で」

幸「へ、恐入ります……」

由「いえ是は旦那さま、橋本さんの男の好いのは東京中の評判で

大變なもんでげす、昨晚の段鼻の女などは此の旦那に何どのくらい惚れたか知れませんが、跡を附けて来るてえ処とこを宜いい塩梅に遁のがれて来ましたが、へばり附いて、弱りましたつけ」

修「幸三郎さんは慥たしか靈岸島辺いにお在いでになつて、其の頃はお独ひと身たのよう承たわりましたが、只今では御妻君をお迎むかえになりましたか」

幸「へえ未だ縁なくして独身どくしんで居ります」

修「ム、ー……私の姪めいに当る此のお藤ねえ、日頃貴方の事ばかり誉めて居ますが、少し年は取つて居りますけれども、貴方此娘これを貰つてくれませんか」

幸「へ、御冗談ばかり仰しやつて、恐入ります」

六十六

修「いえ若いのに未だ男の味知らず、是なりに隠居をさせるのも惜いもので、文明開化の世の中なのに昔氣質むかしかたぎに後家を立て通すの、尼に成るのと馬鹿なことを申すから、旧弊な私でさえ開けぬ女だと意見を云うて居る位で、尤も別に支度はない、貧乏士族だから心に任せんが、少しは田地を買つて持つて居ます」

幸「へえ、然そうなれば私わたくしも嬉しゆうございますが、余りお手軽で殿さま御冗談ばかり仰しやつて、私のような町人風情ふせいへ」

由「旦那遠慮をしちやアいけませんよ、是は自然にちやんと斯

う云う事に出来て居るんでげす……、え、由兵衛申上げますが、これは出雲の神さまが御縁を八重に結んで、伊香保結び四万結びこま結びてえ事になつてゐるんでげすから、是は是非願いましようじやアありませんか」

修「今直ぐと云う訳ではない、貴方も旅の事だから何れ又改めて私わしがお話わに出るで、是は只ほんの下した話ばなしだけで」

由「いえ下話うわより上う話わに願ういたわいもので、是は何うか」
修「然うなれば誠に芽出度い」

と云われると、お藤は慕う人の事ゆえ真赤になりましたしてモジノ
ゝ為しながら、

藤「私のような不束者を其の様な事を仰しやうて橋本さん……」

と云う中に自然と情の深い処が顕われます。此方も貰いたいか
ら話も早くおツ附きました。

修「何れ改めて私が出る」

と其の晩は此家へ一泊致し、翌日一方は足利へ立ちましたが、
これも奇縁でございまして、改めて久留島修理殿が東京へ出て
参り、橋本幸三郎の母に会つて右の縁談を申入れると、

母「それは幸いな事で、何うか願います」

と幸三郎の母も異議なく承知を致しました。

さてお話別れまして、伊香保に永井喜八郎と云う大屋がござい
ます、夏季は相変らず極忙がしい処でございませう。此方の三階は
ずーつと長く続がって、新座敷が玄関の上の正面に出来て居ます

が、普請は中々上等で、永井喜八郎の宅の湯殿も綺麗で機械にて水を吹出して居ます。入浴した後で水にかゝり、風を引かんようにまた入浴致します方法を、加賀病院の岡先生が覚えてから湯殿も新しく出来、誠に繁昌な家でございます。此家の三階の角座敷に来て居りますのは前橋の商人で、桑原治平と云う男で、年齢四十五に相成り、早く女房に別れ、独身者で、年中間さえあれば馴染も有りますから冬でも寒湯治と云うて参ります、独身で鞆を提げて参り、暫く保養して、また横浜へ往き、儲かると伊香保へ参り、芸者も買い飽き二階に寝転んで頻りと新聞を読んで居りますと、ガラ／＼と向の二階の障子が開きましたから、ふと見ると、年頃廿六七にも成りましようか色のくつきりと白い、鼻梁の通

りました口元の可愛らしい、目許めもとに愛のある、ふさくと眉毛の濃いよ好い女で、何れいざの権妻か奥さんか如何にも品のある方で、日に三度着物を着替るが、浴衣によつて上へ引掛ひっかける羽織ひらが違ふと云うので、色の黒い下婢おんなが一人附いちにんいて居ります。年は三十一二で其の下婢が万事切きりもり盛を致して居ります。

治「あゝ好い女だな」

と治平は起上り、頻りと彼かの女の顔を見て居りますと、女の方でもジツと治平の顔を見詰めて傍かたえを振向き、下婢に何かコソコソ話を致して居りますから、治平も何うも見たような女だと思いがら、また見て居りますと、見られると見返すもので、情が通ずるか先方むこうでも頻りと治平の顔を見たり何か致して居ります。

六十七

湯場の習慣くせで、運動などを致して居おる時には知らん人でも挨拶を致します。

治「お早うございます、好いいお天氣に成りましたが御運動でげすか……」

物のなんて瞞ごまかし込み、宜いい程に挨拶を致し、終しまいには何かお遣つかい物のをしよう、何を遣つたら宜かろう、八崎はつきから幸よい好いい鮎あゆが来たから贈りたいたいのだと云うので、是から大皿へ鮎を入れて二十足ばかり贈りました。すると先方むこうの女からお礼が参りました。

葡萄酒の瓶を三本に東京から来た菓子折を持って、

下婢「御免下さいまし」

治「これは入らつしやいまし、さア此方こちらへお這入んなさい」

下婢「先程は結構なものを沢山に有難う存じました、誠に大悦び
でございました、大層お珍らしい美事な鮎すきで、大層子がありまし
て塩焼にして召上りましたが、お嗜すきでございましたから三度も続け
て召上る位で、誠に大悦びで在いらつしやいました……此品これは誠に詰
らんものでございますが、此のお菓子は東京とうけいから参りましたか
ら何卒どうぞ召上つて」

治「いや是は恐れ入りましたな、斯様な何うも頂戴致すような訳
なのではありません、多分に何うも：是では却えびつて鯛を釣る

ような訳で、恐れ入りましたな」

下婢「いえ詰らんお菓子で」

治「お茶を一つ」

下婢「有難う存じます……貴方は何んですか久しく此処に湯治をして在つしやいますか」

治「へ、僕は間ひまさえ有れば、近ちかう御座いますから、来たくなるとスイと参つたり、別に用もない時は大概来て居ります」

下婢「だからお馴染が多いので、皆さんとお話をなさる御様子が……併しかし永井の家は誠いえに手当が宜うございますね」

治「え、中々好よい家うちで、永井一郎という俳諧師で武芸も上手なり、鉄砲も打つたりして有名の人だったが、故人になり、その家内は

今の母親おふくろで、今の主人も堅い人でお客を大事に致しますから、此の通り繁昌でげすが、貴方の在つしやるお二階は結構に出来ましたな」

下婢「本当に当家は客を大切にするが、此の位に致しませんではお客が殖えますまい……貴方はお一方ひとかたですが、御新造をお連れなさいませんか」

治「へ、私には其様なものはないので、独身者でございます」
下婢「おや然うそでございますか」

治「へ……お宅うちは」

下婢「極く野暮な処でございますよ、青山で」

治「へえー東京とうけいの青山と申すと四谷の方でございますか」

下婢「四谷とも違いますが、信濃しなんどの殿町と申しまするので奥さま

は未だお若うございますが、御運が悪くつて殿さまが御おかくれ逝去にな

りまして、今年で丁度四年の間お一方でいらつしやいますが、何

も御不自由のないお身の上でありますから、お寒い中うちは大概熱海

の藤屋へ往つていらつしやいますが、今度は伊香保へ来たいと仰

しやつて、箱根へ往らしたり何なんかなさいますけれども、箱根の

お湯は遊山には宜しゆうございますが、お血の道には当地の方が

宜いいと云うので、いらつしやいましたのですよ」

治「へえ、殿様はお逝去に……官員さまで在らつしやいましたか、

何ど処れへお勤めなさいましたので」

下婢「何とか云いましたつけえ、お寺見たような名で、アノー元

老院とか云う」

治「え、ー成程、左様でございますか、それじゃア上等の官員さままで」

下婢「お実家さとはお兄さまあにいは銀行の頭取をなすつて居らっしゃいますので」

治「銀行、へエー前橋にも支店が有りまして御懇意の方もありませんが、へエー左様でございますか、成程深川でいらっしゃいますかお実家さとは」

下婢「あの今晚は月が宜しゅうございますので、裏の方を見ますと流れが見えて、誠に景色が宜しゅうございますから、別段何もございせんが、頂戴の鮎で一口上げたいが、知らない人ばかり

でいけないと思つてますと、貴方のお身の上を承わりまするのに、彼は前橋の斯う云う身の上のお方だと承知致しまして、彼のお方なればつて、奥さまも御退屈ですから何卒入らして下さいまし」

治「それは誠に有難う……へエ是非出ます、屹度参ります」

下婢「屹度お待ち申して居ります、左様なら」

と云い捨て、出て往きました。

六十八

桑原治平は嬉しいので逆せ上りました。別嬪に一献差上げたいから来て下さいと云われたのでありますから、治平は是から急に

髪を刈込み、髯ひげを剃り、お湯に這入り、着物を着替え、大装飾おおめかし

で正面の新座敷へ参り、次の間から、

治「へえ御免下さいまし」

下婢「おや入らっしゃいますし」

女「まあ宜く入らっしゃって下さいました、先程は結構な物を沢山頂戴致しまして、何ともお礼の申上げようがございません」

治「何う致しまして、却って詰らんものを上げ、結構なものを戴きましたから、私わたくしは徳を致したような勘定で相済みません」

女「さ、座布団へ」

治「オやお構いなすつてはいけません、私わたくしはへ、前橋の田舎者いなかもんでございますから、東京とうけいのお菓子は大層結構で」

女「いえ、何ういたしまして……今日は何もございせんが、当地の名物だと申しますから、瓜うりもみ揉と胡麻豆腐だけを取りましたから、さア一口召上つて」

と酌をする。

治「これは恐れ入りましたでございませぬ、向山の名物で……先程お女中から種々いろくお話でございましたが、殿様は飛んだ事でございました」

女「いえ最う過去すげきりました事で、今はもう諦めて仕舞いました、ト申すと何か不実なようでございますが、去る者日々に疎しとやらで、漸々ようく忘れてしまいました、深川の方に少々身寄が有りませぬので」

治「左様でございますか、併しかし未だお若いのお独身ひとりで在いらつしやるのは惜おしい事で、まだ殿様は四十代でいらつしやいましょう……へえ頂戴致します」

女「誠に失敬ですが、何うぞお喫あがり下さいまし」

と献さいつ酬おさえつ酒を飲んで居うちる中に、互あいに酔えいが発して参りました。彼かの女は目の縁ふちをボツと桜色にして、何とも云えない自な堕落なりに成なりりましたが、治平はちゃんとして居すります。

女「大層かしこ畏こまつて在いらつしやいますこと、何卒どうぞお膝をお崩し遊あばして」

治「いえ大層酔よいました」

下婢「宜いいじやアありませんか、まア御ご緩ゆりなすつていらつしや

いましよ：奥さん私はお湯に這入るのを忘れましたから、ちよいとお湯に這入つて参りますから」

女「じゃア文ふみや這入つておいで、其処しやぼんに石罅いしひらがあるから持つておいで、それは私の使いかけで入らぬから」

下婢「はい：それじゃア貴方御免遊ばして」

と好い程に其の場を外して下婢かひは下へ降りて仕舞いました。治平は少し色気がありまして、何となく間が悪あいから煙管で腮あごの処つを突衝ついて見たり、くるりと廻まして頬ほ邊べへ煙管の吸口を当てたり、ポン／＼と叩いて煙草ばかり喫のんで居ります。

女「貴方は何でございますか、前橋の何と云う処で」

治「へ、豎町と云うごたく／＼して居ります処で」

女「お盛んな大層好い処だそうで……貴方は御新造さまをお連れ遊ばしませんのですか」

治「家内は無いのです、手前の妻は五年前に歿しまして、それからはひとりみ独身で居ります、へえ、至つて手狭ではありますが、ちっ些とお立寄を願ひとうございます」

女「はい……まだ私は参つた事はありませんから一度見物したいと思つて居りますが、お寄申して万ひよつと一奥さんか又権妻さんでもいらしつて、お愠りんき気でもあるとお気の毒だと存じまして」

治「いえ家内は全く無いのでございます、尤も世話をして呉れるものもありましたが、長し短かして何うも善よいのがありませんからどくしん独身で居りますが、却つて気楽でございます」

女「それはマア好よいお身の上で……貴方のようなお方の御新造になる方は本当にお仕合せで」

治「へ、なに仕合せでもありますまい、何うもへ、誠に不粹な人間で何も心得ませんからなア……貴方さまもお一方で、お子供しゅ衆はございませんか」

六十九

女「はい子供はございせん、親類が深川に居りまして、これが銀行へ出ますので、私は其の方ほうへ引取られて参るより他に仕方のない身の上でございしますが、疾とうツから嫁かたづ付けく、再縁しろと申

しまして、兄が申すには官員は忌だから遣らない、商人が一番
好いが、何んなら他県で堅い商人であつて、横浜へ来て取引をす
るような田舎の商人の方が、田地なども持つて居て身代が堅いか
ら、然う云う処へ縁付けたいと夫ればかり申して居りますが：何
処かに好い口があつたら縁付けると兄が申すので」

治「へえーなる程……実は東京も盛んな処でげすが、また手
堅い処へ参つては田舎の方が手堅うございますからな、へえー成
程お世話ア致しましょうか」

女「お世話たつて私のようなものですから、誰も貰つてくれる人
がありませんもの……貴方は本当に奥さんがありますか」

治「本当にありません、真実でげす、本当でないから無いと申上

げましたので」

女「貴方はまあお調子が好過よすぎますよ……ま一杯お酌を致しまし
よう……何んですね……私の様なものだつてサ、本当に貴方のよ
うな結構なお身の上はありませんね」

治「なに余り結構じゃアございません」

女「巧く云つていらつしやるよ」

と治平の手首を握るを振払い、

治「へ、エ御冗談なすつちやアいけません」

女「好いいじゃアありませんか、貴方本当にお独身ひとかたですか」

治「へえ……」

女「私は当家へ参りましたから、貴方の在いらつしやるお座敷ばつ

かり見て居りましたことを御存じですか」

治「へ、何かどうも、飲酔たべよいまして誠にどうも」

女「飲酔たべよったつても私は嘘は云いませんが、貴方は本当にお罪だ
と思いますよ」

治「其様そんなことを仰しやると、私は田舎者わたくしですから本当に為します
よ」

女「嘘にされると却つて腹が立ちますが、私のようなものでも貴
方本当に貰つて下さると仰しやるなら、直すぐに兄の方へ話しを致し
ますが、本当ですか」

治「奥さん本当だつて……貴方はそりやア眞実に仰しやるんです
か」

女「私に嘘はありませんが、貴方あんたが真実なら何うか確しつかとした貴方のお心の証拠が見とうございます」

治「心の証拠と仰しやつても別に何もありません、と云つて、まさか髪を剪きるの指を切るのと云う訳にも往ゆきませんが」

女「女の口から此の様な事を云い出すは能よく々の事ですからよう」

治「ようたつて……私わたくしにも何うして好いいか分りません」

女「何うしてつて、貴方あんたのお心の証拠をさ」

治「いえ決して私わたくしは嘘を吐きません、神かけて嘘は云いませぬ、

若もしお疑りなさるなら、書付でも何んでも証拠を上げます、へえ」

女「本当に貴方あんた然そうなんですか」

と少ししなだれ掛る途端にガラリと障子を開け、スーツと立つ

た男は鬚ひげの生えて居る、眼のギョロリとした、鼻の高い、年紀としごろ三十四五にも成りましようか、旅行洋服で、一方の手には蝙蝠傘とステツキとを一緒に持ち、片手には鞆を提げて居るを見て治平は驚きましたから、俄にわかに飛退とびのき両手を突き、

治「これは入らっしやいまし……何方どなたかお客さまが」

と云われて女も驚きまして飛退きますと、

男「此の始末はマア何う云うもんか、呆れて仕舞しもうたなア……僕が僅かに十日許ばかり東京とうけいに参つて居た留守の間に、隠し男を引入れるとは実に怪けしからん事じゃ……これ密夫貴様は何処もんの者じゃ」といわれて治平は「はてな此の人は銀行に出ると云つた阿兄あにきか」と思いましたが、彼かの女に向い、

治「此れは何処のお方で」

女「はい、貴方に対しては誠に済みませんが、私の良人つれやいでござい
ますよ」

治「えゝ……御亭主」

と治平は真まつさお青になりブルブルと慄え出すを見て、ガラリと鞆を

投ほうり出し、どたアりと大胡座おおあぐらをかいて、隠かくしからハンケーチを取と

出りいし、チンと涕はなをかんで物をも云わず巻煙草に火を移し、パク

ーリくと喫のみながらジロリくと怖い眼で治平の顔を見るばかり

り、此の時桑原治平の驚おどろきは一方ひとかたなりません。此の者は谷澤成たにさわなる

瀬せと申す青山信濃殿町の官員でございませす。

七十

彼の洋服打扮（か）（ようふく）（で）（たち）の人がスツと這入つて来ました時には、桑原治平も驚きました。丁度今風呂に這入つて来ましたお文と云う女中が、湯から上つて来て此の体（てい）を見て恟（び）（つく）り致し、一旦座敷へ這入つたが次の間から再び出かゝるを目早く見付け、

成「コラ〜……コラ〜何処へも往（い）かんでも宜しい、其処に居れ、跡をピツタリ閉（た）つて其処に坐つて居れ……さ高（た）（か）これは何うか、ウーン此の始末は何う云うもんじゃ……貴方は何処の者（もの）じゃ、えゝ……貴公は何れ（い）（ず）の者か姓名をお聞き申したい、僕は東京青山信濃殿町三十六番地谷澤成瀬と申すものじゃが、貴公の姓名をお聞

き申そう」

治「へえ、手前は前橋豎町の商人桑原治平と申します」

成「コレ高、己が五日か十日の間東京へ往つてゐる間に斯う云う密夫を引入れて、此の為ていたらく体は何う云うものか、実にどうも何とも何うも言語道断の仕末じゃアないか、お前は僕に斯くまで恥辱を与えたからには、僕も此の儘では捨置く訳にはいかん」

高「はい重々私が悪うございますけれども、此の治平さんと云うお方には些ちつともお咎とがはないので……貴方の有る事を申せば遊びにも入らつしやいけませんから、私は孀婦暮やもめぐらしのものだ、亭主はな

い身の上だと申しましたから遊びに入らしたのでございます、が、何も訝おかしい事であつたと云う訳ではございません、併しかし斯う

なる上は何も彼もお隠し申しは致しません、実は私も此のお方を嗜すいたらしい好よいお方だと思ひました了簡の迷いから、私の方で無理に入らしつて下さいとお勧め申して引入れたのでございますから、此のお方には少しも悪い事はありません、重々私が悪いのですから、貴方の思おほしめしどお召通りりお手討にでも何でもなすつて下さいまし」

成「ムー……それは女の方が悪いのじやろう、訝しな眼遣いをするか、私の方へおいでなさいと云うか、何か怪しからん挙動そぶりがなければ、そりやア男の方から無闇に主有る女の処とこへ這入つて来るものではありません……じやが仮令婦人の方で此方こつちへ来いと招いても、主ある者と席を俱ともにすると云うのは、治平殿貴方そなたも心得て

なすつたので有ろうが、君も前橋では立派な商人あきゆうどじやと云う事だが、実に此の上ない不品行な事じやアないか」

治「へえ：それでは貴方が此のお方の御亭主さんで」

成「左様」

治「これは何うも心得ませんでした、奥おくさん様の仰しやるには御

亭主はない、とこう仰しやつてでございました……がそりやア困

りましたね、何うも貴女あなた、然そう云う嘘をお吐きなすつては私が迷

惑いたしますからな」

成「今に成つて兎や角云つたとて跡へは還らん事じやのう、僕は

詰らん者でも、マ幾らか官職を帯びて居おる者もんじや、亭主の留守に

は宅に居る下男といえども、家内と席を俱ともにせんと云うのが女子おなご

の道じゃ、然そうなければ家事不取締そしりの譏そしりは免がれん事じゃ、僕も御用に付いて他府県へ出張する事もあり、又は洋行をもする、其の長い間、三年でも五年でも僕の留守中まさか禽とりけだもの 獣じやじゃアなし、鎖で繋ぎ置く事も出来ん、併しかし斯う云う心掛こゝろかの悪い女子じよしなれば、僕じやとて決して連添おつて居る事は出来んから即刻離別して、戸籍あとは後から送る事に致そうが、マ何うも主ある身の上でありながら、密夫を引入れるなどと云う事がありますか、左様な事を知らん其方そなたでもあるまいが、余程此の人を想うて居おるに相違ない：
：治平殿、此の高と云う女を引取り、女房にして遣る心か、但し斯う遣つて遊びに来て居いる中うちの慰みものにする気か、亭主のあるものとは知らんと云いなさるが、風体ふうていを見たつて大概分ろう、

是が茶屋女や芸者じやアなし、宿帳しゆくちようをあらた検めんと云うのは不都合じやアないか、併し貴公も手を出したからには万更まんざら氣に入らん訳でもあるまいから、真に貴公の妻さいに致して呉れるなら、改めて僕が離別して実家へ沙汰をするから、貴公の方で此これ婦の実家へ貰いいに往けば話も早く纏まとまつて、少しも手間の要らん事ことちや、見合も何も要らん訳じやが、何うか」

七十一

治「へえ：左様でございます、貴方の方で全く愛想が尽きて御離縁に成りまして、此の御内室が御実家へ帰る事になれば、此の方

から御実家へ話をしてお貰い申すかも知れませんが、何も枕を並べた訳じやアございません、其処へお帰りがあつて私を密夫に落されては甚だ残念でがすからな」

成「残念だつて女の首筋へ手を掛けて抱締めた処へ僕が帰つて来て、障子を開けたればこそ離れたのであろうが、然う云う事を云つて何処までも情を張れば、止むを得ず公おもてむき然にするばかりだ、けれども然んな事を為ちやア僕も此の上ない恥辱じやから、敢て好みはせん、好みはせんが貴公の出ように依つて之を公然こうぜんにすれば、云わずと知れた重禁錮、貴公に土を担かつがせる事を好みはせんが、止むを得ん、何うだえ」

治「へえ……私も決して好みは致しません、何うかソノ内ないぶん分の

お計はからいが出来ますれば願ねがいたいで

成「ウン然さうせんければ僕も実まことに此の上うない恥辱ちじよくじやアないか、

若もし此この事ことが人ひとの耳みみに這入はつて、明日あすにも新聞紙上しんぶんじじやうへでも出るよ

うな事ことがあつちやア僕も勤つとめは出来できず、何なにうしても職しやくを辞やさんけれ

ばならんから、今宵こよいの中直うちぢくに僕わがは此これ者ものを一旦いつぱ連れ帰かへつて、前橋まへはしか

ら高崎たかざきまで下さつて、それそれから実家まことへ帰かへる積つみりだ、離縁りえんのうえ籍せきを

送おくつたら、治平殿ちへいどの貴公きこうの方かたへ郵便ゆうびんを上げよう、え解とつたかい、え

治平殿ちへいどの、就つては治平殿ちへいどの貴公きこうへちと予よが難儀なんぎな事ことを云いい掛かけるよう

じやがな、此この女むすめが僕わがの処ところへ縁付えんづいて参まゐる折せきに千円せんげんの持参もちまゐ金かねを持も

つて参まゐつたから、此この者ものを実家まことへ帰かへす折せきには、何なにうしても一旦いつぱ廉かど

なく公こう、然さ離縁りえんをするするンじやに依よつて、此こ者ものが実兄まこと深川ふかがわ佐賀町さがまち

の岩延いわのべという者の処ところへ、千円の持参金に筆筒長持衣類手道具等とう残らず附けて帰さなければ成らん、処で今此処に僕は千円の持合せがないし、東京とうけいへ帰つても至急才覚も出来んのじゃ、就ては貴公誠に迷惑じやろうが、其の千円の持参金の処を才覚して、一時じ僕に渡してくれんか」

治「へえ千……これは少し驚きましたな、私が千円なんてえ金を中々持つては居りません、え、只今手許には二百金程ありますが、へ、二百金で何うか一つ御内々に願いたいもので」

成「いやさ千円取つたつて僕が取切る訳じゃアない、一旦佐賀町の岩延方へ渡し、此者これがまた貴公の処ところへ嫁す時に、其の千円の持参を持つて往くゆのじゃ、些ちつとも出すのじゃアない、詰り貴公の懐

へ這入るじやが、然うせんければ事穩かに治まらん、内分沙汰に致すのだから一旦然うして、直にまた其の金を持つて貴公の処へ嫁せば宜いじやアないか

治「へえ……併し何うも千円と申しては大金で、何の様に美人だつて、千円出して困いますような贅沢な事は滅多にございませんからな」

成「いや出せんければ宜しい、無理に出して呉れるとは云わん、僕も君の手から只取るのじやアない、君は此の女子を愛して首へ手を掛けて引寄せるくらいに思うて居るから、一旦君が千円出して遣れば、其の金を附けて実兄の処へ歸すて……のうお高、お前も其の金を持参としてから治平殿の処へ行きなさい、然うすれば

いいじゃアないか」

高「はい……じゃア斯うして下さいまし、貴方あんたには済みませんが、
若もし此処で千円出して下されば、仮令たとえ兄が千円出さんと申しまし
ても、私は衣類櫛笄こうがい手道具から指輪のような物までも売払い、其
の他た是まで心掛けて少しは貯えもありますから、貴方お厭でも、
マ然うなすつて下さいませんか、今になつて若し否いやだなんと仰し
やいますと私は生きては居おられませんから、死にますよ」

成「これは呆れたもんだ……左程まで貴公を想うて」

治「へえ……それでは只今手許にはごさいませんゆえ、永井喜八
郎から用達ようだて、貰つて参りましょう、毎まい年ねん参つて顔も知つて居
りますから」

と云捨て立ちにかゝるを引止め、

成「アこれ何処へ往いかつしやる」

治「へえ、鞆を取りに」

成「いや往かんでも宜しい、硯箱もあるから手紙を書きなされ、鞆の中に千円くらい這入って居ろう……いや隠したっていかん」

治「でも懷中に印形がありませんから」

成「なければ喜八郎を此処へ呼びなさい、下婢おんなを呼びにやりましょうから、貴公の手で手紙を書きなさい」

と硯箱を突付けられ、

治「へえ、宜しゅうございます」

と治平は手紙を認しためて女中に持たして遣りました。

七十二

治平が手紙を書いて女中に持たして遣ると、直ぐに永井喜八郎に預けて置いた千四百円這入りました重たい鞆を女中が提げて参りまして、慄えながら怖々に治平の背後うしろから出すを受取り、中より千円取とりま纏まとめて差出し、

治「え、仰せに従い千円の処とこは差出しますが、金は慥たしかに受取つた、女の処は相違なく貴殿方へ嫁にやると云う確しかと致した書付を一本戴きませんでは、何分大金でございますから、ハイ」

成「お前は分らん事を云う人だな、其様そんな証書を取つて公おもて然むき

にする氣かい、僕も恥じやから公然には出来ないし、お前も之を公然にすれば何うしたってそれだけの処分につかなければなるまいから、証書も何も要る話じやアない、どうせ此の女が金を持って貴公の処へ嫁くのじやアないか、強いて分らん事を云えば公然に為ようか」

治「へえ、成程……詰り私の方へ廻つて参りますかな……左様なら何卒確とお受取りを願います」

成「金額に違算もあるまいがお前受取るが宜い、早く勘定をなさい、面倒でも十円札だから造作もない、ちよつと勘定を為なさい」

高「はい」

と積上げたる札を数えまして、

高「千円慥かにございます」

成「然そんなら靴へ入れて置きなさい……永とう此処こゝに居て、万一他の者の耳へ這入つてもならんし、此の下女も堅い奴と思つたに、斯う云う不始末に及んだが、此の者の口も確と止めなければ相成らん、何にしても何処どこに居ては事面倒だから、至急前橋か高崎まで下さがるが、貴公此の女を見捨てずに生涯女房にして遣しなさい……またお前も治平殿方へ嫁かたづ付いたら、もう斯こん様な浮氣しを為しちやアならんぜ、己いご後斯う云う事ことをしたらいかんぞ、治平殿から千金と云う大した金を出して貰たつた位だから、仮たと令治平殿の方へ再たび返るにもせよ、それ程に思つて下さる治平殿に不実ふじつがあつてはなら

んぜ、此の上は心掛けを正しゆうして、能く女子おなごの道を守らんければ濟みませんよ」

高「今度は何様どんな事がありましたも、見捨てられても治平さんの処とこは出ません、私は深川の宅たくへ帰れば、直すぐに貴方あんたの方へ手紙を出しますから、きつと貰うつて下さいましよ」

治「深川の何う云うお宅うちか、ちよつとお書付うを願ねがいたいもので」

高「あの、深川佐賀町二十二番地で岩延傳衛つたえと申まします」

治「へえ」

とすらく 書いて、

治「確しかとです、間違まちがうといけませんよ」

高「お前まへさんの方かたでこそ間違まちがうと肯ききませんよ」

とはは最う別れだと思ふのか、お高は治平の膝へ手を突いて、もたつきながら涙を拭きます様子を見て、谷澤成瀬も心悪しく思いましたか、苦々しく顔を反^{そむ}向けて居りましたが、

成「サ往^いこうじゃアないか」

と立上る途端にガラリと障子を開けて這入つて来ましたのは、例の筏乗市四郎が今年十五歳になる彼の^か布卷吉を連れて参り、市「少し此処に待つておいで……はい御免なせえ、少々お待ちなせえましいい」

成「何んじや其の方は」

市「私^{わし}ア市城村の市四郎てえ筏乗でがすが、貴方^{あんた}は村上松五郎さんでございますね」

成「え……イヤそれは人違いだ、僕は谷澤成瀬と申すものじゃ、人違いだろう」

市「いやお前さんは元渋川で腕車くるまを挽ひいて居なすつた峯松さんと云う車夫だアね」

成「なに……これは怪しからん事を云う、失敬な……車夫とは何んだ、苟いやしくも官職を帯びて居おる者を……大方人違いだろう」

市「人ひと違ちがえじゃアねえ……此の奥さんみたような人は慥たしか旧猿若町の芸者で小瀧と云つて、中頃前橋の藤本へ来て、芸者に出て居た小瀧さんだアね」

高「な何んですと……まア呆れますね、怪しからん人違いで」

市「いや人違えじゃアねえ、見知り人があるだ……さア此方こちらへ皆みんな

なお這入んなすつて下せえ」

「御免」

と云いながら這入つて来ましたのは橋本幸三郎で、お瀧も松五郎も見^{びっく}て恟り致し、顔の色を変えました。

七十三

橋本幸三郎の跡から続いて這入つて来ましたのは岡村由兵衛と云う、前^{ぜん}々橋本の取巻で来ました男で、皆是^{みしり}が見知と成つて這入つて来たのを見ると、お瀧も松五郎も面^{めん}体^{てい}土気色に成り、最早^{のが}遁^{みち}れる路なく、ぶる／＼手先が慄え出しました。

市「さ旦那さま此方へお這入んなすつて下せえまし」

幸「はい親方此間ア……やい斯うなつたらもうお前方は知らねえと云う訳には往くめえ」

市「どうせ駄目な話だから白状して仕舞つた方が宜かろうぜ、もう遁れる路はないから逃途はない」

幸「やい盗人峯松、其方は何うも大え奴だなア、七年以前に此

の伊香保へ湯治に来た時、渋川の達磨茶屋で、私ア江戸ツ子でござ

ええ、江戸のお客を乗せれば此様な嬉しい事はありませんて

……ね此の由さんが鞆を忘れたら態々持つて来て見せやアがつ

たから、私も正道の人間だと思つて目を掛けて、次の間へ寐かす

位にまで為てやったのに、何んだヤイ悪党、鼻の下へ附髭か何

だか知らねえが生かして、洋服などを着て東京近い此の伊香保へ来て居るとは、本当に呆れちまったな」

由「これは驚きやしたな……おい／＼もういけないよ／＼、酷いじゃアありませんか、お隣座敷に在らしたお藤さまと、お岩さままでえお附の女中まで引張り出して、私達が先へ四万へ往つてると、後からお連れ申すつて取持がった事を云つて、折田の山ん中まで連れ出して、お二人を殺したと思つても、お附のお岩さんは殺されたろうが、お藤さまは神が附いてますよ、谷へ落こちたつて、ちゃんとお助け申す人があつて御無事で在らつしやるんだ」

市「イヤ何うだ、彼の時に私が筏の上荷拵えをして居た処へ、山の上から打ち落ちて来た婦人が藤蔓の間へ引懸つて髪の毛捌

み附いて、吊ぶらさが下つて居た危あぶねえ処を助けて、身内に怪我はねえか
 と漸だん／＼々様子を聞くと、私が元三の倉に居た時分、御領主小栗
 上野さまのお妾てかけばら腹のお嬢さまと分つたので、私も旧弊なア人
 間だから、まア宜いい塩梅に助かつたつて、婆ばあとも相談わづらのう打ぶつて、
 然そうして久留島さんまで送り届けて、直すぐに四万へ追掛おつかけて往つて
 掛合かあひをしたが、其の時此の野郎を踏ふんづか捕とらめえれば宜いかつたアだが
 ……汝うぬ此処へ来やアがつて何んだえ化けやアがつて、官員さまの
 お姓名なめえを騙かたつて太ふてえ野郎だ……これ此処にござる布卷吉さんと云
 うのは、年イ未だ十五だが、偉えれえお人だ、忘れたか、両人ふたり共によ
 く見ろ、此のお子が七歳の時汝われが前橋の藤本に抱えられて小瀧と
 云つてゐる時分、茂之助さんが大金を出して身請えすると、松五郎

てえ悪足わるあしが有つて、抛よんどころなく縁を切つたものゝ、あゝ口惜くちおしいと男の未練で、お瀧を殺すべえと云つて茂之助さんが脇差イ持つて往ゆくと、物の間違てえものは情なさけねえもので、汝を殺すべえと思つたのが、闇の夜とは云いながら、此の布卷吉さんのお母つかさんを殺した処から、茂之助さんも顛てんどう倒してしまつて、あゝ濟まねえと思つたか、梁へ紐を下げて首を吊つて死ぬくれえ非業な真似工したのも、皆みんなな汝から起つた事だから、何うかして松五郎お瀧の二人を捜し出し、両ふたおや親の仇あだ、妹かたきの敵を討ちてえと、十三の時から心掛けなすつた其の時に、私も入らざる事だが助太刀を為しようと云つたのが縁となつて、汝を捜しに来たら、丁度橋本さんにお目に懸つたのだ、サ最う斯うぼくが割れたら駄目な話だ」

治「へえー実に驚きました、此のお子は茂之助さんの子かい、へえ……道理で此の女は何処かで見たと始まりから思ったが、私も斯う係蹄わなに掛るとは知らず、真実私に心があるのかと、男の己惚うぬぼれで手出てだをしたが、お瀧でがんすか、其の時分には眉毛を附けて島田だったが、へえー、何うもずうずうしい奴で……私彼あの時貴方あんたのお父さんとつに然う云つただよ、彼の女を持つてゝは駄目だ、夜々よゝ斯う云う奴が這入つて、斯う云う訳があるつて、貴方のお父さんに意見を云つただが、何うも是は、何うも魂消たまげたね、へえー」

七十四

幸「やいお瀧、てめえ汝四方に居やアがつた時に何と云つた、瀧川左京と云う旗下の嬢でむすめございますが、兄に欺されてだまと涙を落したを真に受けて、私は五十円と云う金を出し、汝を身請して橋場の別荘へ連れてツて、妾にして置くと、何んだ、しおらしく外へ出たくない、芝居へ往くのは勿体ない、旨い物は喰べませんと云つたのは其の筈だ、汝はお尋ねもので外へ出る事が出来ねえ、日向見のお瀧と云う日蔭の身の上とも知らず、欺されて橋場へ置く中に強盗しこみに殺されたと思つたら……由さん何うだえ、ずうくしく此処に居るたア」

由「開化に成つては幽霊が生きて種々いろくなものに化けるんでげしよう、彼の時あ棧橋に血が流れて居ましたから、旦那も私も必然てつきり

盗賊どろぼうに殺されて川かわ中へ投ほうり込まれたものと思つて居ましたが、
ずう／＼しく大丸鬻うで此処こゝに居ても最ういけないよ、早く正体あら顯
わしておしまい、逃げたつて騒さわいだつて開化の世の中、ピン／＼
と電信と云う器械がある、恐ろしい鉄砲時世に成つてるのに、昔
流行はやつたつゝもたせ、其様そのんな事をして役には立たねえぜ」
市「さアぐず／＼したつていけねえ、何うだ、返答しろ、どうせ
駄目だから、年とし齡の往いかねえ布卷吉さんが親の敵を討とうてえが、
刃物で斬合うような事ア出来ねえから、尋常に繩に掛つて、派出
も近ちかえから引かれて往いくが宜い、然そうして是まで犯した悪事を自
訴するが宜いわ、若もしじたばたすれば汝腕うぬを引ひん捻ねるぞ」
と逃げもすれば殴はりとば飛ばす勢いで、市四郎は拳を固めて扣ひかえて居

ます。松五郎お瀧の兩人は多勢に云い捲まくられ、何も云わず差俯さしうつ向むいて居ました処へ、

山「少々御免下さいまし」

と這入つて来ましたのはお山、年齢とし五十五でございですが、昔むかしかたぎか氣質かの武家に生れ、御新造と云われた身の上だけに何処か様子が違います。娘小峰年齢二十五歳で、最う分別も附いて居ります。母と娘は摺寄りまして、

やま「皆さん御免くださいまし」

小峰「お母さん、もつと先へ出てお云いなさいよ」

やま「あい……さ松五郎、此処へ出ろ」

松「やお母つかアか……これは何うも面目ねえ、何うして此処こけへ来た」

やま「なに……これ人非人……その形姿は何んだ、能くもずう
 くしく其様な真似をして此処へ来て、まだ性懲もなく悪事
 をするな……皆さま何ともお恥かしくって申そうようはございま
 せんけれども、此の者はね貴方……小さい時分から碌でなしの根
 性で、放蕩無頼で、何う云う訳か他人さまの物を盗み取りました
 り、親の物を引浚って逃げますような悪い癖がございましたか
 ら勘当致しましたが、御維新己来汝の行方ばかり捜して居たが、
 東京には居らんから、大方函館へでも行つたらうと他人さまが
 仰しやつたが、三の倉で旦那さまが彼の騒動の時、汝は賭博打
 と組んでよくも旦那さまへ刃向い立てを為たな、知らないと思つ
 て居るか、そればかりじゃアない、今承われば殿さまのお胤のお

藤さまを欺して、汝は折田村で殺そうと掛ったそうだが……まあ
どうも狗いぬとも畜生とも云いようのない此こん様な悪人を……私はマア
沢山もない子でございませうが、惣領と生れ、跡目に成る奴が此様
な恐ろしい根性な奴でございませうとは、ハア何たる事の因縁かと
存じまして、私は此の娘と二人で、毎度松五郎の事を申しては泣
暮して居りますが、此の奴に引替えて此の娘は柔やさしくして、芸者
になつても精出して能く稼いで呉れますから、何うやら斯うやら
致して居ります」

やま「実に何うも松五郎のような不孝不義な奴はございませぬ、
 お父さまの御命日に、お墓参りでも為^した事があるかと、偶^{たま}に東^{とうけ}
 京^いへ出てお寺へ往^いつて、これ^いくのもので年頃はこれ^いくでござ
 います、塔^{とう}婆^ぼの一本も供^あげてお墓参りには参りませんか、
 方丈さまや寺男に聞くのも、少しは悪をしながらも、親の有難い
 も主人の大切な事ぐらいは分りそうなものだと思つて居るのに、
 つい墓参りをした事もない、尤^そも然^そう云う心があれば此^こ様^んな悪い
 事も出来ませんが……どうせ遁^のれる道はないから、私は年を老^と
 て何うなろうとも、小峰^かの掛^{かり}合^あにならんよう立派に名乗り出
 て、自分だけの罪を被^きるが宜^いい……誠^{まこと}に何うも皆様に面目次第も
 ございませぬ」

と泣き沈むを見て流石さすがの悪人松五郎も心に感じ、

松「橋本の旦那わっちえ、私わっちア何う云う訳で此こん様な悪い事をしたかと思つてね、今夢の寤さめたような心持で……その布卷吉さんは茂之さんの子たア知らねえ、年の往ゆかねえで親の敵を討とうと云う其の孝心を考え、今まで此方こつちの作つた悪事と不孝を思い合せれば、同じ人間に生れても迷えば此様なにも悪の出来るものかと、我ながら実に先非を悔いて改心致しました、もう何うせ遁れる道もありませんから、斯う云う親孝行な兄にいさんの手に掛つて死にやア本望で、昔なら腹ア切る処ところでござえやすが、此の家を血で汚けがしちやア客商売の事ゆえ永井の家に氣の毒だから、向山へ引摺つてつて思ふ存分に斬つてしまつて下せえ、決して手出しは致しやせん、そ

れとも縄に掛け派出へ引いてつて、親の敵を捕まえましたといつて処分に附けて下されば、私の罪も消えます、兄さん早く引張つて往つて、貴方のお手柄になすつて下さい……サお瀧、お前も此処らが死しにどころ 処だ、成程考へるとなア茂之さんがお前を殺そうと思つて裏口から這入つて来た時、お前は己ん処とけへ知せに来ていて、茂之さんのお内儀かみさんが一人で留守居をして居ると、大夕立大おおが雷鳴みなりの真暗まっくらの処とけへ這入つて、女房こ児を殺した時の心持は何うだつたらうと、悪事をする中うちにも時々思ひ出すと、余り好いい心持じゃありません……ナアお瀧、手前も時々うな斃された事もあつたな、手前も死処だぜ」

瀧「あゝ何うも面目次第もございませぬ……私どもに縄を掛けて、

布卷吉さんお前さんの思う存分胸の晴れるようにしてお呉んなさいまし」

松「決して手出しは為しませんから引摺つつて下せえまし」

市「ウン能く覚悟をした、私わしア縛る役じやアねえけれども、逃げ隠れを為しようたつて、捕めえたら動かさねえぞ、お役人の手数てかずを掛けるより私が引張ひつて往ゆく、無闇に人を縛とちやア済まねえから、私が手前てめえを捕めえて往いこう」

やま「能く其方そちは覚悟をして繩に掛り、名乗り出る心になつた、人は心から悪いものではない、一念の迷いから悪い事をすると聞きく、何も彼かも知しつて居いながら此こ様な事ことをして：其方そちは暴もれ者もんだが、親方さんのような力の強いお方に捕とまつて逃にげ隠れを為しようとし

て怪我でもするといけないから、尋常に名乗って出る」

小峰「本当に懟なまじ逃げようなぞとして怪我アしてはいけませんから、おとなしく名乗って出て下さいよ」

七十六

松「大丈夫だよ、どうせ己は無ねえ命だ……あゝ是まで母おふくろ親には
 腹はらいっぺい一杯瘦せる程苦勞を掛けて置いたから、手前てめえ己の無あとえ後は二
 人前めえの孝行を尽してくれ、あゝ実に面目なくつて何も云えません
 ……何卒直どうぞすぐにお引きなすつて下せえまし」

というので、是から市四郎が松五郎の手を捕とつて二階を下りま

したから、永井喜八郎は驚きました。是より引張つて往ゆき、派出へ此の旨を届けて申立てますと、警部公が一々お書取りに成り、渋川の警察署へ引かれましたが、桑原治平とお瀧との関係は相あいた対いまおとこ密夫でございませうから、詐欺取財しゆざい未遂犯と云うので処分は決つて居りますが、何分にも謀殺を致した廉かどがございませうので、松五郎は天命遁れ難く遂に死刑に処せられ、復讐と云う事は尤もない事とでございませうから、松五郎は此の儘死刑となり、お瀧は悪事とを俱ともにしただけでございませうが、人殺しがございませうので重禁錮に処せられて、悪人ことは悉く罰せられる事になり、お文は構いなし。跡で只嬉しいのは桑原治平で、千円取られるのを助かつたのでございませうから、

治「何^{なんとも}共お礼の為^しようがない」

と、吝^{けち}嗇な人で女の事でなければ錢を使わん人でありませんが、

其の時は余程嬉しかったと見え、二百円出して、

治「何うか市四郎さん二百円だけで……」

市「いや私^{わっち}ア金を取る訳はねえ」

治「それではせめて此のお子に」

市「此のお子にたつて、布巻吉さんも此の金を受ける訳はないから、何うしても受けられやせん、松五郎が名乗つて出たんで此方^{こつち}の恨みは晴れたが、此の母^{おふくろ}親さんや妹が可愛そうだから、小峯さんを請出して遣つたら、首を斬られた松五郎へ追善にもなり、母親さんも安心だし、親子のものが助かる訳だから、左様^{そう}なすつ

たら何うです」

幸「これは宜うがす、お請出しなさい……峯ちゃん^{ちゃん}が得心なら、縛られて出たお瀧ね、お瀧より少し器量は少し悪いからお氣に入らんか知らんが、小峯を貴方の女房にして遣つては下さいませんか、此の橋本幸三郎がお媒^{なこうど}妁^どを致しましょう」

治「へえ、有難う……お幾^{いくつ}歳で」

幸「二十五で」

治「へ、それは有難い事で、女が好^よくつたつて悪党は驚きます、生血^{いきち}を吸われますからな、何うもそれは有難い事で、幸三郎さん何うか願いたいもので」

というので、是から橋本幸三郎が媒^{なこうど}妁^どで、小峯を桑原治平方

へ世話をする事に決し、前橋豎町へ母お山もろともに縁付きま
した。此方は予て約束こなたもありませんから、橋本幸三郎方へお藤を縁付
けたいと云う事で、彼の川口町の橋本幸三郎と云う御用達の家へ
縁付けました。此の時の媒妁は桑原治平が宜かろうと云うので桑
原治平が媒妁になつて、お藤は橋本方へ縁付く事になりました、
芽出たく事納まつて後、布卷吉は祖父佐十郎を永い間介抱して見
送りました後、奥木佐十郎の跡を継ぎまして、桑原治平は生糸商いと
人だから糸を送り、橋本幸三郎が金を出して呉れましたから、立
派に機屋を出して大層栄えました、末お芽出度いお話でございま
す。又筏乗の市四郎は、只今では長野県へ参りました、材木屋を
致して居ると云うことを、五町田の百姓から私わたくしが聞いて参りまし

た、其の儘取纏めた愚作でございませうが、此のお話はこれで読切りに相成ります。へい御退屈さま。

(拋酒井昇造速記)

青空文庫情報

底本：「圓朝全集 卷の三」近代文芸資料複製叢書、世界文庫

1963（昭和38）年8月10日発行

底本の親本：「圓朝全集卷の三」春陽堂

1927（昭和2）年1月28日発行

※「旧字、旧仮名で書かれた作品を、現代表記にあらためる際の作業指針」に基づいて、底本の表記をあらためました。

ただし、話芸の速記を元にした底本の特徴を残すために、繰り返す記号は原則としてそのまま用いました。誤用と思われる箇所も底本の通りとしました。

また、総ルビの底本から、振り仮名の一部を省きました。

底本中ではばらばらに用いられている、「其の」と「其」、「此の」と「此」、「彼《あ》の」と「彼《あの》」は、それぞれ

「其の」「此の」「彼の」に統一しました。

また、底本中では改行されていませんが、会話文の前後で段落をあらため、会話文の終わりを示す句読点は、受けのかぎ括弧にかえしました。

※底本は、物を数える際や地名などに用いる「ヶ」（区点番号5-86）を、大振りにつくっています。

※「小峯／小峰」「峯松／峰松」「桑原治平／桑原治兵衛」の混在は底本の通りです。

入力：小林繁雄

校正：門田裕志、仙酔ゑびす

ファイル作成：

2009年6月19日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.waizora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

霧陰伊香保湯煙

三遊亭圓朝

2020年 7月13日 初版

奥付

発行 青空文庫

著者 鈴木行三校訂・編纂

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>

※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。

<http://tokimi.sylphid.jp/>